

淨瑠璃通解

第一編

淨瑠璃通解

第一編

竹本攝津大塚
竹本彌太夫
山本九馬亭
竹本章太走
著

東京博文館藏版

いつぞやお話の。淨瑠璃通解の御稿本は。その後博文館の内山正如君。御持參なされ候て。ざつとながら拜見いたし候。今ははや十數年以前の事にて候が。依田學海小永井小舟兩翁の。新評戯曲十種の出で候ひしとき。小生喜びて之を讀み候ひき。しかしその時は。たゞ一の谷嫩軍記と。忠臣講釋と。二つのみにて候ひしかば。何となく飽かず思ひ居り候ひしに。今度の御著述にて。大に渴を慰し申候。特に近年は。寄席に行く機會もなく。何々傑作集などを。繙く場合も少く候ひし折柄とて。一段面白く覺え候。この書公になり候はゞ。世間定めて小生と。感を同じくする人多く候はん。近年淨瑠璃最も流行して。之を語りて。樂む者。頗る少からず。之を聽く人。勿論多く。之を見る仲間。は尙それよりも多しと承り候が。貴下の此著續々出で候はゞ。之を讀む者。最も多きに居ることゝなり候はん。

この種の文學には。鄙陋の言葉多く。風教上の缺點少からざるは。昔

より承るところにて候。されども。忠孝貞烈の事もまた多く。士人以上は之を擯斥し。専ら聖賢の遺書によりて。德義を淬礪せし間に。中以下の人の。これによりて。活きたる學問をせし時代も候ひき。されば小生等は。たゞ之を美文とし。安樂椅子に凭りて讀過の際に。一時の快を貪るのみならず。また以て人情風俗を窺ふべく。以て言語の變遷を知るべき。好資料として歡迎すべく候。

英國に於て。嘗て戲曲に殘忍刻薄の所爲多く。且つその仕組に統一の缺けたりと。批難せられしこと。これあり候ひき。丁度それと同じ時代に。佛國の舞臺にては。之と反對に仕組の統一に執着すること。其度に過ぎて。却つて滑稽に陥りしのみならず。所作少くして臺詞多く。覽る者讀む人。しきりに睡魔に襲はれしこと候ひき。同じ時代に。しかも鄰りづからの國にて。かくまでの相違面白く。感じ候まゝ。何時何の書にて見しやら。忘れ候ひしかど。事柄のみは覺え居り候。

是等の點より。我が淨瑠璃を見ての御評語も。この次よりちともらし給はゞ。趣味多くなりさむらはん。

御草稿は内山君へ返へし申し候以上

明治卅六年六月五日

東京にて

三上 参次

大阪にて

山本 信吉 殿

益御清穆奉賀候。年來御熱心の御從事被成候。淨瑠璃通解。此度御完成の上。博文館より御發行の由。大兄の御満足は勿論。學界の爲に大賀の次第に御座候。此方面の著書甚だ尠きこと。兼々遺憾に存居候處。今回の御著述。江湖の歡迎も嘸かしと存候。不取敢右御祝意申述候。

六月二十日

山本大兄

や
い
ち

謹で來書を誦し候。かねて原稿拜見に及び候。淨瑠璃通解第一篇。愈御發刊の手續相成候由。御精勵の段不堪感服之至候。淨曲が徳川文學の粹にして。能く當時の世態を反照せるは。既に漸く一般の知了する所と相成候今日。貴著の如きは實に得難き秘鑰にして。大方の歡迎を受くべきは期して可待候。殊に貴下が臺詞曲節の細より。歴史地理の大に涉り。隻語を遺さずして。正を僞夫野人に質し。百里を辭せずして。全を辟阪山間に求めらるゝの御勇氣に至ては。尤も敬して服する所に御座候。今后益奮猛勇進。不屈不撓。先夏銀閣山莊に於て。御話有之候如く。淨曲の佳篇をば。釋し終るの日ならんことを。小生は深く希望致し候。頓首再拜

五月三日

島 文 次 郎

山 本 盟 兄

侍 史

淨瑠璃通解。三篇まで御脱稿の由。發行の曉は。義大夫ずきの公衆の
よき葉なるべく。とその折を指折數へ候。顧みれば。東西相離れ居る
われ／＼の。再會を得て貴稿を拜見せしは。實に昨今兩年の境にし
て。また駿州興津にての事なりき。當時小生は。その地に寒を避け居
りしを。御歸西の途わざ／＼御立寄あり。世の中が今日大晦日の急
ぎを忘れて。靜かに旅宿の一室に貴稿を見て。さま／＼意見を鬭は
しもしたりき。坤儀いつしか轉じて。三十六年の元旦。うらくと長
閑なる三穗の海に。漁舟一葉旭日を浴びて。動くとしもなき景色を
眺めつゝ。なほ談話は。頻りにかの道の事に進みて。御出立の期に遅
れんとまでしたりき。時日の経過は休みなく。その後また半年。貴著
發行の折も近きぬと承りて。かの時の事など。いろ／＼思ひ出され。
また飽く事なき御勤勉の。失禮ながら感心の外はこれあらず。愈々

御丹精の結果の現はるべきを祝して。一筆如斯御座候。

明治卅六年五月廿二日

藤岡作太郎

山本信吉様

拜呈。初夏の候に御座候。倍々御清祥。奉賀上候。陳者。過日御來駕の節
原稿拜見いたし候。淨瑠璃通解の儀。月刊として。十二冊御發行相成。
近日第一篇。世にあらはれ候由。欣喜の至に御座候。先生が文意は勿
論。故事來歷俗諺俗語等。巨細漏さず。熱心に御調あそばさるゝ段。實
に奉感佩。斯道の光榮不過之候。今後御自愛の上。益御精勵。全部御完
成ありて。淨曲の美を發揮したまはんこと。偏に希望いたし居候。勿
々頓首。

五月五日

竹本攝津大椽

山本先生

侍史

謹啓。屢御尊來の上。原稿御示しに相成候。淨瑠璃通解。全部十二篇として。月次御發刊之由。雀躍の至に不堪候。先生が。歴史地理故事俗諺等。漏らさず熱心に御取調の上。通解を施し。淨曲の美を。世に發揚し給はる事。斯道の爲め。深く奉感謝候。今迄御盡力下さる。學者無かりしゆゑ。之を口にするも。其意を解せざる箇所。往々有之。遺憾一方ならざりし折柄。尊著の如きは。實に旱天の驟雨に御座候。爾後これを光として。其意を會得し。これを語るに至らば。自ら眞に迫りて。人を動す事も一層なるべく。斯道の發達。此上なき事に候。先はよろこびのあまり。一書捧呈仕候。頓首。

五月五日

竹本彌太夫

山本先生

侍史

自序

難波江の。芦のかりそめ事に。注釋二篇をものせるまゝ。いつしか深く染まりて。通解十二篇を著さんと。思ひ立ちぬ。淨曲が。徳川文學の粹たるにかゝはらず。學者其人を惡みて。其書を捨て。敢て顧みざりしかば。空しく磨かざるの玉として。今日に至れり。近時漸く其美を認めて。これが研究に取かゝれる。大家先生多き中に。淺學菲才を思はず。瀨踏みとして踏出すは。負氣なきわざならんかし。されど思ふ事かゝぬも。事ゆかぬ心地すれば。第一篇の稿を脱せるまゝ。世のおもはくもかへりみず。梓に上す事とはなしぬ。此文學は。上雲上より下裏長屋に至る迄。神祇釋教戀無常。あらゆる社會の。あらゆる状態を。寫せるものなれば。用語の範圍頗るひろく。随つて解釋も。極めて面倒にして。遂に博奕の隱語までも。問合すべき必要を生じ。ほとぼ

と困じはてたり。

淨瑠璃は大坂に生れ。大坂に育ち。大坂に熟したるものにて。今もなほ其名聲を落さず。随つて近松門左衛門。竹田出雲。近松半二を始め。作者の大家は。殆ど大坂の人なり。東都にて。これに匹敵すべきは。平賀源内一人のみ。淨瑠璃の名稱は。織田信長の侍女。小野お通が作りし。淨瑠璃姫物語(十二段冊子)に起るといへど。其以前の書にも見ゆれば。物語もお通の作にあらざるべしといふ。其起因變遷等については。既に高野氏の著。淨瑠璃史あり。余も述べたく思へど。事なかく煩しく。且及ばずながら。思ふまゝ文章趣向を批評し。作者の比較研究をなして。各自の特色を論じたき考へあれば。全部完結の上。更に通解餘言一冊をものすべし。

近松。出雲。源内。半二等は。學も博く。才も深かければ。其他は大抵。目よりも耳學問の連中なれば。筆才には感心すべきも。學才には服すべ

きもの少し。されど。いづれも人情世態に通じ。俗事俚諺に精しく。且花柳の巷に出入して。俗歌俗曲に達せし。通人粹士なれば。著者の如き無粹漢が。此等數十作者の智識を。頭腦に藏め。一々明亮に解釋を下さん事は。到底望むべきにあらず。故に注意はせし積なれど。誤解もあらん。漏脱もあらん。足らざるもあらん。知らざるもあらん。幸に大方の諸君子。御教示を賜はらば。後篇に訂しもし。加へもし。補ひもし。掲げもすべし。

余癖あり。其道にあらざる人。又何等の關係なき人の序文を挿はさみて。著書を飾る事を好まず。篇首に序代りとして。私通文を載せたる方々は。種々の事につき。御教示を賜り。御注意を忝ふしたれば。其恩を念ひ。其徳を忘れざらん爲め。許を請ひ得て掲げしなり。又京都第三高等學校教授山内文學士。大坂天王寺中學校教諭龜嶋三千丸

兩氏には。一方ならぬ御助力をうけたれば。こゝに深謝す。

小楠公祠畔四條畷ホテルにて

明治三十六年七月廿八日

著者 識

淨瑠璃通解第壹編

目次

檀 浦 兜 軍 記……………	琴 責 の 段……………	一
伊 賀 越 道 中 双 六……………	婚 禮 の 段……………	四 五
伊 賀 越 道 中 双 六……………	沼 津 の 段 口……………	六 四
伊 賀 越 道 中 双 六……………	沼 津 の 段 切……………	七 五
伊 賀 越 道 中 双 六……………	新 關 所 の 段……………	八 五
伊 賀 越 道 中 双 六……………	岡 崎 の 段……………	九 七
伊 賀 越 道 中 双 六……………	伏 見 の 段……………	一 一 九
伊 賀 越 乘 掛 合 羽……………	圓 覺 寺 の 段……………	一 三 九

二

染模様妹脊門松……	質屋の段……	一五五
新版歌祭文……	野崎村の段……	一七八

目

次終

淨瑠璃通解第壹編

山本九馬亭 著
竹本攝津大椽 贊助
竹本彌太夫

檀浦兜軍記 琴責の段

總解

平・景・清・ 景清には巷説頗る多し。作者は此巷説と他人の事蹟とを取合せて面白く仕組めるものなれば。今其傳を記し併せて巷説の由來につき聊余の考を述べんとす。

景清は平家の侍大將上總介忠清の次子にして。上總七郎兵衛と稱し。世に悪七兵衛と呼ぶ。幹軀長大武勇を以て聞えし。人にて。壽永二年維盛に屬して義仲を砥並山に攻め。又知盛に従つて行家

を室山に伐つ。元暦元年一の谷の戰に。先陣として打入りし熊谷平山を拒ぎ。文治元年屋嶋の戰に。岸に登りて名乗を上げ。進み來りし箕尾谷十郎(四郎とするは誤)と格闘し。逃ぐるを逐ふて其鉦をつかみ、首手相引きて之を斷ちしは。世に鉦引とて名高し(川柳に、景清は尻餅四郎つんのめり)檀の浦の戰。知盛敵將義經を獲んことを期す。景清坂東の兵は騎戰に長ずれども。船戰に拙し。盡く捉へて海に投ぜんと號呼して進み。越中次郎盛嗣が源氏の兵範綱と舟中に搏つを見て。旁より範綱を刺す。平家滅びて失踪し。平知忠の兵を擧ぐるに及び。來りて之に屬す。事破るゝに至り。再び逃亡せしが。後出で、賴朝に降る。賴朝和田義盛の家に拘せしめしに。義盛其傲岸無禮に堪ふる能はずして辭す。よつて八田知家の許に移す。居ること歳餘。飲食を斷ちて死せり。これを正しき傳ともいふべきか。

惡七兵衛の名。景清平家滅亡の後、攝津國嶋下なる伯父大日坊の下に潜みしが、伯父の己を殺さんとするを疑ひ、之を刺せるより負へる名なりといへど、盛衰記などには、屋嶋の戦に既に自ら惡七兵衛と名乗り居れり。軍記物は證とするに足らぬ所あれど、大日本史なども疑を挾めるものゝ如く、彼れが零碎なる事蹟を取拾せるに拘らず、此事は只「世呼曰惡七兵衛」と記せるのみ。案ずるに、惡の字は骨肉を殺せしもの動作の荒々しきもの等にかむらせし文字にして、景清の惡は動作より來れるにはあらざるか。東大寺に賴朝を狙ひしといふ事。平家滅亡の後、仇を報ぜんと姿をやつし、賴朝が東大寺の落慶に臨みし時、之を刺さんとして捕はれ、六波羅の牢に投ぜらるゝと、男山八幡宮にも景清塚ありて、名所圖會にも見え、賴朝當山參詣の砌、景清此處に隠れて狙らひしといひ傳ふ。案ずるに、此事は「大佛供養の日を數へて牢中に餓

死。せ。り。』といふ鎌倉の傳説より。孕み出せるにはあらざるか。又明の建文帝の臣に景清といふものあり。主君の爲めに仇太宗を刺さんとし。苦節を盡せし。後捕はれ殺さる。其名惡七兵衛と同じき。ゆる。近。松。巢。林。子。門。左。衛。門。の。出。世。景。清。は。こ。れ。に。擬。し。て。作。れ。る。と。こ。ろ。あ。り。と。流。石。は。巢。林。子。此。事。な。し。と。い。ふ。べ。か。ら。ず。觀。音。の。功。力。に。て。牢。破。れ。し。と。い。ふ。事。景。清。常。に。清。水。觀。音。を。信。じ。尾。張。よ。り。日。參。を。な。す。捕。は。れ。て。六。波。羅。の。牢。中。に。投。ぜ。ら。る。ゝ。や。之。を。念。じ。其。功。力。に。よ。り。て。牢。自。ら。破。れ。た。り。と。彼。れ。が。牢。中。に。て。彫。り。し。と。い。ふ。爪。彫。の。觀。音。は。隨。求。堂。の。賽。路。右。側。に。安。置。し。牢。破。り。の。額。は。隨。求。堂。に。か。ゝ。れ。り。堂。僧。に。問。ふ。に。一。も。得。る。處。な。し。案。ず。る。に。平。盛。久。年。清。水。觀。音。を。信。じ。等。身。の。像。を。刻。み。て。こ。れ。を。納。め。し。が。平。家。滅。亡。の。後。京。師。の。民。家。に。か。く。れ。姿。を。か。へ。て。千。日。參。り。を。行。ひ。し。に。願。い。ま。だ。滿。さ。る。に。捕。は。れ。て。鎌。倉。に。送。ら。れ。由。比。が。濱。に。て。刑。に。處。

せらる。刑に臨み斬者の刀再び折れしゆ。此狀を賴朝に奏す。賴朝以て觀音の奇瑞となし。其死を助けし由。平家長門本に見えたり。これを景清に附會せしものならん。尾張より日參の事。熱田大宮司の娘に通ぜしといふ事などは。彼れが佩しといふ麤丸の太刀の熱田の神寶となり居ると。賴朝が大宮司の娘の腹にて。彼の地に生れしといへると。謠曲に尾張熱田の遊女と契りて。子を産せたる由作れると。恐くは謠曲は前二者より作れるものなるべし。かれこれ取合せて作れるものかなほ考ふべし。景清牢の事。鎌倉化粧坂の邊に。景清の土牢といふあり。傳説に。景清賴朝に降りて。八田知家の許に拘せられ。此土牢に投ぜられしが。大佛供養の日を數へて。飲食を斷ち牢中に死せり。其娘追福の爲め。牢の側に草庵を結びて。向陽庵と稱し。十一面觀世音を安置して。行ひすませしといふ。牢は果して此牢なりや疑しけれど。

兎も角此傳説は聊正史に合ふ節もありよく味へば種々なる巷説のもとなれるものゝ如し

日向に流されしといふ事 景清日向國に流され兩眼を抉ぐりて復讐の念を斷ち日向勾當と稱せしが建保年間水に投じて死せりと眼病の靈驗灼然なりとて其名九州に高き同國宮崎郡生目神社は彼れが兩眼を祝ひし祠なりと稱し其附近には其古跡遺物頗る多く種々の口碑も傳はりてこれを信せざるものなしといふ案ずるに別に景清と稱する生目に關係深き人ありしを偶々悪七兵衛と其名同じきゆる好事の者虚構の説をなせるがもとにて尾に尾のつきしものならん

阿古屋 阿古屋塚は京都六波羅密寺にありて名所圖會にも載せたりもと塚上に祠ありて賽するもの多かりしが今はすかれて人家となり石碑のみ寺門の右側に残れり寺僧の話に其由來更

に知れざれば。先年東京の或學者に尋ねたるに。書見はなけれど。臆説を述べれば。禪家にて火葬に火をつくるを^あ下火^{（宋音）}といふ。もと平氏の名ある人を。火葬せし骨を埋め。下火塚と呼びしが。遂に阿古屋塚となれるにはあらざるか。との回答ありたりと。案ずるに。あこやは眞珠の事にて。美しく愛すべき珠なれば。昔婦女子の名につけしもあるべく。中世名ある白拍子などにて。あこやと呼びしものありて。それが塚なりしも。もとより正じき史に載すべきものならねば。其傳のほろびたるにはあらざるか。こは至極の臆説なり。そはとまれ。作者は此由來分らぬ阿古屋塚におもひつきて。清水の道筋なる五條坂の遊君とし。面白く仕組める事はしるし。今も阿古屋茶屋といふもの残れるもをかし。先年其由來を。六波羅密寺へ尋ね來れる由なり。

阿古屋景清を訴へしといふ事。近松が出世景清に。阿古屋が悋

氣と兄の慇懃によりて。景清を訴ふる由を記せり。こは越中次郎盛嗣が平家滅亡の後。其仇を報せんと姿を變じ。但馬の氣比道廣が馬飼となり。主に隨ひて京師に往き。もとの妾家をおとづれしに。妾これを官に訴へ。爲めに捕はれたる由。平家長門本に見えたるを。景清に附會して仕組めるなるべし。口碑に山城紀伊郡上鳥羽村小枝橋の下稻瀬の淵は。景清の妾夫の隱所を訴へ。爲に捕はるゝに至れるゆゑ。官其不貞をにくみ。縛して投ぜし處なりといふ。恐くは出世景清より。孕み出せる説なるべし。

謠曲の景清は。彼れが日向に下り。眼を抉りて盲人となり。日向の勾當と稱して乞食し居たるを。彼れが尾張熱田の遊女に生せたる。人丸といへる娘。鎌倉より尋ね來りて面會するといふ。前後なき一片の物語にて。日向の巷説より作り出せるものか。貞享元年に死せし井上播磨椽が。興行外題中に見えたる日向。景清は。謠曲

の焼直しなるべし。近松が出世景清は前に載せたる諸傳説を綜合して巧みに仕組み檀浦兜軍記はこれを一層潤色せしものなる事同書を讀まば自ら明なるべし。なほいひたき事あれど餘りくたぐしくなれば通解完成の上更に通解餘言といふをものして淨瑠璃の由來作者趣向文章人物等につき卑見を述べん覺悟なればこゝには省きつ。

此淨瑠璃は享保十七年九月九日竹本座の興行に上せしものにて。作者は松田和吉(文耕堂)長谷川千四。

琴責の段

「鳧の脛短しといへども云々」は鳧の脛の短きも鵝の脛の長きも、皆天性にして、之を續ぎ之を断たば必ず憂ひ悲むべし。民を治むるも此理にひとしく、賢愚明闇各其天性を異にすといへども、之を矯なほさんとすれば、却つて本然を害して、憂ひ悲ましむるに至る故に各其性に随つて治むべしといふ意、莊子に見ゆる語にて、道德の譬喩なるを、章を断ち義を取りて民を制する理に轉用したる手際頗る巧なり、感服々々本文は別記に載す、
「治まる九重に」 いましめの一重を添ふ、護衛頗る嚴重九重に禁裏又都をいふ、九天に擬して天子九門といふよりの稱
「水上清き堀川御所」 堀川

鳧の脛短しと雖も。之を續がば憂ひなん。鵝の脛長しといへども。之を断ば悲みなん。民を制する事此理に等し。然れば治る九重に。猶も非常を警戒の。水上清き堀川御所。當時鎌倉の嚴命に従ひ。秩父の庄司次郎重忠。禁裡守護の代官として。兼ては民の公事裁判。私の計ひ無く。道に曇らぬ十寸鏡智仁の勇士と耀やけり。同席に相並ぶ。岩永左衛門致連。南都東大寺の建立より。直様都に押止り。重忠の助役と號し。悪七兵衛景清が有家を搜す邪智佞奸。表は忠義に見せ掛けて。己が意恨を挟む心の底の二股竹。虎の威を借狐とは。きよろつく顔に現れたり。斯る折から秩父の郎等。榛澤六郎成清。遊君阿古屋を拷問の。時刻も限る末の刻。六波羅より立歸り。御門に下す囚人籠。簾

「重忠」は畠山重能の子にして、武藏國秩父郡の人なり忠勇智謀鑑府第一の名臣にして、宇河の合戦に馬を肩にし、二士を挈げて河底を涉り、鵜越の險に馬を負ふて絶壁を下るなど、武勇を以て名を著し、力量を以て人を驚かせし事、數ふるに違あらず、元久中事にて

を上あて引出ひきだす。姿すがたは伊達いたての襦じゆや。縛いめはの繩なは引替ひきかて。縫ぬの模も樣やうの
 糸いと結むすび。小裙こづま取手とても儘ままなれど。胸むねは解ほどけぬ思おもひの色いろ。形かたちは艶はでに
 氣きは萎しほれ。筒つづみに挿さしる牡丹ぼたん花けの。水みづ上あ兼あね風情ふうせい也。榛はん澤ざ六郎らう御
 前まへに出いで。仰おほせに任まかせ繩なはを赦ゆるし。様々さま宥なだめ不ふ便べんを加くはへ。尋問たづね候もとめへども。
 何分なにぶん景清かげきよが行衛ゆくゑ。存ぞんぜぬとばかり。外ほかに申口まをぐちも無これ之なき故ゆゑ。召連めしづて
 候さふらふと。披露ひろう半なかに岩永いはなが左衛門さゑもん。つかくと立出たちいで。詞ことヤア無念むねなり也榛
 澤ざは。科人とがにんに繩なはも掛かけず。其上そのうへ見れば。拷問ごうもんに勞つかれたる氣色けしきも見え
 ぬが。エ、聞きえた。扱さては御邊ごへんが今日こんにちの拷問ごうもん。生溫なまぬるく遣やれしな。
 能々いよく明日あすは拙者せつしやが受取うけとり。然さうく家來けらい任まかせにも成なるまじ。自身じぶんの
 手並てなみ見みせ付つけ。景清かげきよが有家ありをほさかして見爲みしよふ。侍共まじらひやい。彼女あのをんな
 め。岩永いはながが屋敷やしきへ引ひと。例れいの疎忽そこつを重忠しげたけ押止おしとめ。否先いやまづ待またれよ
 岩永いはなが。繩なはを赦ゆるし拷問ごうもんを寛ゆるめしも。榛澤はんざはが私成わたくしず某それがしが了簡れうけん。其上そのうへ
 に今日こんにちの暮くれまでは。此方このほうの計はからひ。其元そのもとの御構おかま無ない筈はず。入ぬ世いれ

よりて議せられ、鎌倉へ赴く途次時政が討手の兵に遇ひ、止を得ず奮闘して死す、年四十二、惜むべき人なれば、何時もよき役廻りに向けるゝは、積善の餘慶ともいふべきか、いづれ詳傳を記する時あるべし、

「庄司」は莊司と書く、古莊園(私領の田園)を司りし者の稱なるも、後に莊司なられど、其名を襲ふに至る、

「禁裏守護の代官」は徳川時代の所司代の如く、朝廷を護衛し都を治むる役目○代官はもと名代といふに同じく、主君の代を勤むることにて、頼朝に代りて重忠が勤むるゆゑなれば、其稱よく叶へり、舊幕府時代地方にありて、農民を支配せし代官と混すべからず、

話御無用く。是ややい阿古屋。今日も未白狀せぬ由。果扱し太い。何故言ぬ。去ながら。夫もなあ無理とは思はぬ。義理と情を表に立るが遊君の習慣。如何に責らるゝが患いとて。馴染を重ねた夫の行衛。遂應とも明されまいさ。さなきだに流れを立る女は。誠無者と一向に心得し族も有ば。夫等が譏もうたてく思ひ。又は同じ憂節を勤る。友朋輩の顔汚し扱と。思ふての事成んが。爰を篤と合點爲よ。景清が行衛存すべき者成ればこそ。擲取て詮義も爲。有様に白狀せば。畏も鎌倉殿の御意を安じ奉り。天晴の御奉公。萬人の譏を請ても。君一人の御心に叶は。其身の冥加悪かるまじ。爰を能辨へて。サアさつばりと。景清の有家。此重忠に聞せいと。物柔和に理を責て。然も答ゆる詮義の詞。阿古屋は聞て。扱も嚴しい殿様。詞四相を悟る御方とは。常々噂に聞たれど。何の子細らしい四相の五相の。

「道にくもらぬ十寸鏡」政道の明なるをいふ、頗るよし、ます鏡は眞澄の鏡の略にて、まばはめて添ふる語、明かに照りたる鏡をいふ、十寸と書くは假字なれば、其大さと心得べからず、

「智仁の勇士」面白く書きたり、智仁勇は相將たるもの、必ず具ふべき三徳、智以て物を識り、仁以て人を憐み、勇以て事を成す。かゞやけりの語、十寸鏡に應ず、

「南都」は奈良の事、大和國添上郡にあり、元明より光仁に至る、七代の帝都なりしゆゑに稱す、

「東大寺」は奈良市の東北にあり、聖武天皇の建立にして華嚴宗の大本山、帝の鑄造し給へる、長五丈餘の大佛を安置せり、治承四年

小袖に留る伽羅じやまでと。仇口に言流せしが。今日の仰に我が折れた。勤の身の心を汲で忝い仰しやり様。何々の誓文で。景清殿の行衛。知てさへ居るならお心に絆されて。ついぼんと言て退ふが。何を言ても知ぬが眞實。夫とても疑晴ずば。ハテ何時までも。責られふわいな。責らるゝが勤の代り。お前方も精出して。お責成るが身のお勤。勤と云ふ字に二つは無。ア、憂世では有ぞいなと。云ふに傍から堪へぬ岩永。ヤアベリくとはつしやいた腮骨。是非白狀を爲ぬに於ては。是間の拷問に品を異て憂目を見する。聞けば汝懷胎とな。能々屹と思ひ付た腹に子の有る虎蟬の格。鹽煎責にして呉ふと。威し掛れば。ハ、。詞其様な事怖がつて。苦界が片時成ふかいな。同じ様に座に並んで。殿様顔してござれども。意氣方は雪と墨。重忠様の計ひとて。榛澤様の今日の詮義。繩も掛けず責も無く。六

平氏の爲に焼れたれば、頼朝頼主となりて再建し建久六年の落慶に、後鳥羽天皇臨幸し給ひ、頼朝もまた之に臨めり、此時景清頼朝をねらひしといふ傳説あり、總解を見よ。

「景清傳」は總解を見よ。「心の底の二股竹」といひ竹の縁より「虎の威を借る狐」とつゞけたり頗る妙、二股竹は外面と内心と表裏あるをいふ虎の威を借る狐は權勢ある人の威を借りて威張をいふ、此語は、荆の宣王が、臣下昭奚恤を北方の畏るゝ理由を問ひし時、江乙なるもの、昔虎狐を食はんとせしに、狐我れば天帝の命を受けて、百獸の長たり、若し之を疑はゞ、我が後に隨ひて來れといふ、虎以て然りとなし、隨ひ行

波羅の松陰にて。物ひそやかに義理疎め。様々と勞はりて。サ
ア。景清が行衛はと。問はれし時の其苦しさ。水責火責は堪へ
ふが。情と義理とに挫がれては。此骨々も碎くる思ひ。夫程切
無事ながら。知らぬ事は是非も無い。此上のお情には。寧殺し
て下さんせと。頓と投出す身の覺悟。持餘してぞ見えにける。
重忠榛澤を近く召れ。詞斯程心を盡せども。誠を明さぬ上から
は目通りで拷問せん。夫々と仰有る。詞の尾に付岩永左衛門。
やあゝ者ども。阿古屋めに水食はす。用意／＼と呼はるにぞ。
あつと答て白洲の内。直す梯子を見るにさへ。心は上る枕の横樋
庭の傍への井戸屋形。深くも轢る絞車の。胸に響て氣を冷す。
阿古屋が心の濁り水。今しも吞やと覺悟の躰。重忠庭に下立て
詞ア、ぎやうくし靜まれく。阿古屋を拷問の責道具は。某
豫て拵へ置たり。誰か有る持參せよと。仰せに従ひ持出るは。

きしに、百獸皆畏れ逃げたり、虎已を畏るゝを知らずして、狐を畏るゝとなせしといふ、今北方の奚恤を畏るゝも、彼を畏るゝにあらすして、王の兵甲を畏るゝなりと答へしより出づ、戰國策に見ゆたり、本文は別記に載す、

「郎等」は家來の意、もと侍共といふことにて、郎は男とむ字にて、位階なき侍の稱なる由、貞丈雜記に見ゆ、

「阿古屋」は京都六波羅密寺にある、阿古屋塚に思ひつきく作れるなり、總解を見よ、

「時刻も限る羊の刻」羊の歩の語、おもひ合されてよし、羊の刻は今の午後二時、「妾は伊達のうちかけや云々」これ古今の美文、いましめの繩結びに引かへて、伊達のうちかけ妾に糸結びの縫模様、小縫取る手は自在なれども、胸に結ばるゝ

最も優き玉琴に。三味線鞍弓取添て。音締も嘸と白洲なる。阿古屋が前に並べ置。岩永もきよつとせしが。様子如何と打守れば、詞是さ女。其琴彈。重忠が是にて聞と。刀を杖に腮持せ。

岩永殿も御聞有れと。打解て見えければ。詞是や何じやけうが

るは。責道具責道具と。何ぞ嚴しい事かと思へば。エ、聞えた

拷問に事寄。自分の慰氣晴を遣るゝな。天下の政道を取捌決

斷所での琴三弦。神武以來無い圖なほたへ。實誠世界の有様。

天に口無し人を以て言しむとは。今思ひ當つた。阿古屋めが懷

胎。若もや此子が女の子なら。琴でやぐはんく三弦で。ア、

何とやらと京中が。謠ひしは此前表。此上のばれ次手。ちよち

よげ杯もよござんしよがの。ハ、ハ、と嘲弄す。重忠耳にも入

給はず。詞阿古屋何故初めぬ。琴を彈ねば景清が有家を。言明

す所存かと。詞も繁き重忠の。底の心は知ねども。是非無く對

憂思ひを解くによしなし、
彼れが妾の派手にして、氣
のしなれたる機を「筒」に生
けたる牡丹花の、水上げか
ぬる風情」とは、よくもい
ひたりよくも譬へたり牡丹
は國色の名花富貴の花王古
來傾國の美人に比す、豔麗
無双の阿古屋が然に惱める
狀、見るか如し。繩、引き、
縫ひ、糸結び、ほどけぬ、
皆縁の語なり、味ふべし、
「伊達」は見沼の美麗をい
ふ、寛永二年台徳院（二代
將軍秀忠）上洛の時、伊達
政宗の行粧殊に美麗を盡し
人の目を惹きしより起れる
語なりと、
「ばで」は華奢の意、俚言
集覽に「立派にて淨氣なる
をいふ」と見ゆ、
「糸結び」縫摸様の名
「不念」はおこたり、ぬか

ふ爪琴の、行衛を何と岩越すに。絲も心も亂るばかり。聲も枯
野の船ならで。かいなき調搔鳴し。景と云ふも月の縁。清しと
云ふも月の縁。景清き名のみにて。映せど袖に宿らず。重忠耳
を欬て給ひ。詞今彈ぜしは落組の唱歌を我身の上に取。景清が
行衛知ぬとな。まあ知ずんば知ぬにせよ。して景清と其方が
馴初しは何時の比。如何成る事の縁に因。深い契りの中とは成
しぞ。是は又思ひも寄ぬ。替つた事の御尋。何事も昔と成る。
耻しい物語。平家の御代と時めく春。馴にし人は山鳥の。尾張
の國より永々しき。野山を越て清水へ。日毎日毎の徒歩詣。詞
下向にも参にも。道は替らぬ五條坂。互に顔を見知合。何時近
付に成ともなく。羽織の袖の綻。一寸時雨の傘。御安い御用。
雪の朝の煙草の火。寒いに責て御茶一服。夫が凝じて酒一つ。
此方に思へば彼方がらも。功德は深い觀音經。普門品第二十五

りたどの意、
 「ほざかして見せう」は言
 はして見せうの賤語、俗言
 のほざくを活したるなり。
 「寵忽」はそまかしきこと
 よく見たり。
 「了簡は」料簡と書く方正
 しかるべし。はからひ。考
 へなどの意。
 「しぶとい」しは意を強む
 るため添へし辭、剛情なる
 ないふ
 さなきだに
 は只さへの
 意。
 「流を立つる女」は遊女を
 いふ、傾城色三味線に「こ
 れはこゝに置いた扇が見に
 め、我等が持ちしは十一骨
 の有禪が繪に、行く水に茶
 筌を書いて、流れを立てる
 といふことじや（遊女の事
 を流の身といふより、そを
 勤むるを立つるといふなる

日の夜さ。かならずと戯の。詞を結ぶ名古屋帯。終り無れば初
 めも無い。味な戀路と楽しみに。壽永の秋の風立て。須磨や
 明石の浦船に。漕放れ行縁の切目。思ひ出すも瘡の毒。ア、疎
 ましやと語りける。詞さも有なん情の道。聞届けしが詮義は濟
 め。此上は三弦弾い。エ、イ。否さ此方の尋る子細を。聞ぬ内
 は如何までもと。猶望まるゝ三弦の。どう鳴る事か知ねども、
 思ひ込たる操の絲。今更何と鐵刀木。心の天柱引締て。翠帳紅
 閨に枕双る床の内。馴し襖の夜すがらも。四つ門の跡夢も無。
 然るにても我夫の。秋より先に必と。仇し詞の人心。其方の空
 よと眺れど。其ぞと問し人も無し。詞ヲウ最宜は三弦止い。斑
 女が閨のかこち草。絶し契の一節。時に取ての一興ながら。云
 分は暗い。西海の合戦に命を遁れ。都に折々紛れ入景清。
 汝は度々逢ふがな。平家御盛の時だにも。人に知れた景清が。

べし。」「うたてく」はうるさくの意。」「憂きふしを勤める」は遊女をいふ。鎌倉殿も君一人も頼朝を指す。「冥加」は仕合せ果報などの意。へとは神佛の加護をいふ語。「四相」は佛教に、我相、人相、衆生相、壽者相をいふ、小四相大四相の別あり「子細らしい」は勿体らしく又わけありげに。「小袖に留める」伽羅じやま。「ば、小袖に焼きしむる伽羅のうつり香の如く」噂ばかりにて跡方もなしといふ意、當時の諺にてもあるべし。「小袖」は袷の大袖に對して下着の稱なりしむ。今は組布の縮入の事となる

五條坂の浮女に。心を寄ると云はれては。弓矢の耻と遠慮勝。殊更今は日影の身。私は元より川竹の。有が中にも面無親方。目顔を忍ぶ格子の前。編笠越に健に有たか。アイ。お前も無事にと唯一口。言が互の比翼連理。然ばと言間も無い程に。せはしない別路は。昔のきぬぐに引かへて木綿くと零落し。身の果哀な物語り。ア、お耻もじと差俯く。詞如何様是は斯も有ん。景清程の勇士なれども。實色は思案の外思案の外。如何思案仕直しても。此通りでは濟されぬ。夫鼓弓擦れ鼓弓擦れ。あいと答て氣は張弓。歌は哀を催せる。時の調子も相の山。吉野龍田の花紅葉。更科越路の月雪も。夢と醒ては跡も無。仇し野の露鳥邊野の。煙は絶る時ぞなき。是が浮世の誠なる。誠を顯す一曲に。重忠殆感に堪。阿古屋の拷問只今限り。景清が行衛知ぬと言に。偽りなき事見届たり。此上には構無と。仰に阿

「留める」は香を焼しむるをいふ、昔は香をたきて衣服にはひをつけしなり、「伽羅」は熱帶國に産する香料、別記を見よ、「まで」は狂言傾城などの語に多し、下に添べて餘韻を含ましむ。

「あだに」はむだに

「我が折れた」は我慢氣の折れしをいふ、

「なんぐ」の誓文で「はどんな誓文を書いてもにて、誓つてといふに同じ、「誓文」は偽なき由の誓ひ文、多く神佛などの名を入れて書く、

「ほだされ」は引つけられての意、もと馬の足を繋ぎ止むるほだし(繩)より出でたる語、

天下の決断所で「いつまでも責られうわいな」と身をつき出す度胸の太さ、な

古屋は忝涙 盡ぬお禮を伏拜めば。詞「ヤア」重忠。白いとも黒いとも片付ぬ詮義を。阿古屋めに偽無とは何を以て申さるゝ。此岩永は吞込ぬ。不埒不埒と言ひほぐす。詞「ナ、其子細云て聞ん。鼓は五聲に通ぜずと雖。絲竹の調は五音四聲に能通じ。直を以て調子とす。曲り偽る心を以て。此曲を成る時は。其音色亂れ狂ふ。就中此琴。音有物の司として。人の心を正しうし。邪を戒むると。白虎通にも賞し置たり。爰を以て重忠が。女の心を引見る拷問。十三の絲筋に。縛り搦めて琴柱にくゝめ。科の品々一より十まで。斗爲吟するを僻事とは申されまじ。琴の形を豎に見れば。漲落る瀑布の水。其水をくれる心の水責。三弦の二上りに。氣を吊上る天秤責。鼓弓の弓の矢柄責と。詞品を改責れども。いっかな亂るゝ音締も無。調子も時も合の手。の秘曲を盡す一節に。彼が誠は現れて。知ぬ事は知ぬに立す。

かゝ尋常の女にては出来ず、さすが川竹の愛きふしに、立引せしもの又「責らるゝ勤のかはり云々」と、かう腰を据ゑてかうられては、手のつけやうもなかるべし「勤といふ字に二つはない」と下せし斷案の強く重く且妙なる所、さすが人口に膾炙の名句。最後に「浮世ではあるそい」と觀念の嘆辭、前の強さに比して頗る味ひあり、
 「はつしやいだおと骨」はよくしやべる腸といふ意、
 「はつしやいだ」は「はしやいだ」(乾)の音便なるべし
 「おとほれ」はおとがい骨の略
 「かざみの格」はかざみのきまり、かざみは蛸と書き蟹の一種にして、甲の幅七八寸左右各一刺あり、色赤黒くして白點を有し、内甚だ美味なり、此蟹の子を持ちたるは、殊に珍重し鹽煎りにして食す、故に「鹽煎り責」と威せしなり(五雜俎に、蛸、閩中蟬蛸大者如斗、俗名曰蟬、永が「鹽煎り責」と威しつけたを、そんな事こわがつて」と鼻の先であしらひ「並んで股様顔して」と人物の棚卸し、其つうづしき限り知られず、
 「苦界」は女郎の境界をいふ(佛經の語にてもと人間世界の事なるが、轉じたるなりといふ)
 「雪と墨」絶對の相違なふ小町踊に「かきくれて降くる空や雪と墨」

調を正して聞取つたる詮義の落着。此上にも不審有やと。道理に適ひし詞の調。平とも上とも岩永は。撥鬢頭搔ばかり。眞目に成ぞ心地能。詞重忠重ねて。阿古屋が詮義落着と雖。猶此上に某が。尋問ふ子細有り。隨分勞り邸へ引と。仰を蒙る榛澤六郎イザ阿古屋立ませいと。伴ふ情數々の。恵を思ふ女心。有難ふ存じますと。詞に盡ぬ悦び涙。岩永は拍子も無く。調子に乗ぬ三弦の。天柱替たる路組も。冥加に餘る御情。都度くお禮も延棹に。長居は恐れ此儘に。直に御前を三下り。秩父は正しき本調子。撥利生有る絲捌き。直なる道こそ有難き。

「おとほれ」はおとがい骨の略
 「かざみの格」はかざみのきまり、かざみは蛸と書き蟹の一種にして、甲の幅七八寸左右各一刺あり、色赤黒くして白點を有し、内甚だ美味なり、此蟹の子を持ちたるは、殊に珍重し鹽煎りにして食す、故に「鹽煎り責」と威せしなり(五雜俎に、蛸、閩中蟬蛸大者如斗、俗名曰蟬、永が「鹽煎り責」と威しつけたを、そんな事こわがつて」と鼻の先であしらひ「並んで股様顔して」と人物の棚卸し、其つうづしき限り知られず、
 「苦界」は女郎の境界をいふ(佛經の語にてもと人間世界の事なるが、轉じたるなりといふ)
 「雪と墨」絶對の相違なふ小町踊に「かきくれて降くる空や雪と墨」

「水責火責」は肉體の貴苦、情と義理とは心の貴苦、肉體なほ忍ぶべし、心遂に忍ぶべからず、

「詞の尾につく云々」 岩永が拷問と聞て悦ぶ状と、愈忽の性質よくあらはれたり、

「白砂」 は罪人を吟味するところ、白き砂を敷たるよりの稱、

「心はのぼる」 は上氣すること、枕、横槌などいづれも梯子の縁より書けり、味ふべし、

「深くも」ひやす「心の濁り水」 皆井戸の縁の語なり、井戸車の音に氣を冷やす狀見るが如し、心の濁り水は景清の行衛を隠し居る心な

ふなるべし、

「ぎやうくし」 は仰々しにて、仰山なりといふ意、

「玉琴」 の玉ははめて添ふる語、我國にて琴と稱するは筆の事にて、一名筑紫琴とも稱し、宇多天皇の御宇筑紫より傳へたるものなりといふ、元祿の頃入橋檢校出で、其唱歌曲節を改更せしより、大に世に行はる、別記を見よ、

「三味線」 は永祿年間琉球より、蛇皮線と稱する二絃の樂器を傳へしにもとづき、泉州堺の琵琶法師、中小路といへる瞽者、之を三絃として彈きしに始り、相傳へて慶長の頃、澤住檢校歌に合せて彈きはじめしものなりといふ、なほ別記を見よ、

「鼓弓」 は三味線と同時に琉球より渡來せしものにて、もと三絃なりしと、或はいふ、胡弓はもと葡萄牙の樂器にして、琉球より我國に渡來し、三味線もこれより作り出せるものなりと、なほ三味線の別記を見よ、

「根じめも囁と白砂なる」 三曲の根じめもさぞ亂るゝならんと思ひ知らるゝといふ意、知らるゝを白砂とかけたなり

「きよつとせし」 はあきれかへる狀、さもあるべし

「けうがる」 は愉快がること、興の字當れり、なほ別記を見よ、

「決断所」 は鎌倉時代置きたる役所にて、今の裁判所の如きもの、

「神武」のかたない圖のはたへ」 は上古よりかたのなき戯れといふ意、面白く書きたり、音曲を以て裁判すること、古來其例なかるべし

神武は人皇第一代の天皇、此御即位を以て我國の紀元とす、

「天に口なし人を以ていはしむ」 は天は知り給へど口なきゆゑ、人の口をかりていはしめ給ふといふ昔よりの諺、溫古要略「天無口假人口」

「もしや此子が云々」ちよくげ」 皆當時の流行唄など見ゆたり、今傳はらず、流行歌は民が自然の情を謠ひ出でたるものとて、之を以て民の意を知り、世の態を覺り、事の前表となせし事、和漢の諸書に見ゆたり、

「しげき重忠」 とつゞけたり

「爪琴に」夫をかけ、「行衛」とつづけたり、爪琴とは爪にて弾くよりの稱、妻など書くは借字なり

「いばん」を「岩越す」とかけ「糸も心も亂る」とつづけたり、岩越すは琴柱の糸をうくる處、此名稱を知る人稀なりし由、十訓抄に見えたり、別記を見よ、

「聲もかれ」を「枯野の船」とかけ「かひなきに」纏を含ませたり、作者の文才と學力とを見るに足る、枯野の船は應神天皇の御宇、伊豆國に

命じて作らしめ給ひし大船にして、朽ちたれば其材木を以て鹽を焼しめ給ひしに、煙のさる處ありしゆゑ、取りて琴を作らしめ給へり、其音甚だ妙に爽なりしかば、天皇歌を詠みてはめ給ひし事、日本書記に見えたり、かく琴に縁ある船なれば、こゝに取用ひたる事感服々々なほ別記を見よ、

「景といふも月の縁云々」

は琴歌路の曲の作り替にて、景清の二字を隠して月の唱歌とせり、意は景といふも清しといふも月の縁なれど、

たゞ名のみにて、月の如くうつせと袖にやどられば、其行方は知らぬといふことなるべし、

「路組の唱歌」

は八橋檢校の作にて七段よりなり、前の月の唱歌は其第一段なる「路といふも草の名、若荷といふも草の名、富貴自在冥加あらば給へや」の作り替なり、

「景清と其方が云々」頗る粹なる問ひ「これは又思ひも寄らぬ」さもあるべし

「平家の御代と時めく春」

より以下靈妙な筆を以て、微妙なる戀の成立を寫し、詞の巧なる、調の流暢なる、意の纏綿たる、古今稀なる名文、深く味ふべし、

「山鳥」は尾張の枕辭、しかしてながしきとつづけたり

「清水」は延暦年間僧延鎮の開基にして、阪上田村麿の寄進なり、本章は長八尺十一面四十臂の千手觀音なり、始め觀音寺といひしが、大同年間清水寺と改稱せり、景清が尾張國より清水へ日参せしなどいふ傳説あれど、恐くは淨瑠璃よりいひ出せる事なるべし、彼れが觀音を

念ぜしといふ事は、平盛久の事蹟を取りて作れるものゝ如し、總解を見よ、

「五條坂」は清水寺の前にある坂、今阿古屋の遊女をなせし家として、阿古屋茶屋といふものもあるをかし、總解を見よ、

「淺より深に進み、簡より繁に入る」は物の順序「羽織の袖のふくろび」より、戀の糸口解初めて「必ずと詞を結ぶ」までには、此の如き序を追ふなるべし、

二人の中を取持ちし「功德は深、觀音經」は法華經第二十五卷專門品これなり、故に第二十五日とつづけたり、尋常の者の書き得べき句にあらず、

「詞を結ぶ名古屋帯」

とはよくいひたり、結ぶの語は帯にかゝり、名古屋の語は前の尾張に應ぜり、名古屋帯はまづ眞田の袋打なり、別記を見よ。

「壽永の秋の風立つて云々」

はかなき戀のはかなき別れを序し得て、妙味いはん方なし、壽永二年初秋の風に、一の谷に據りし平家は、木の葉と吹散らされて、西海に浮び、秋風立たぬ二人が中も、あかめわかれをなすに至れり「須磨や明石の浦船に漕離れ行く緑の切れ目の句。語も調もあはれにはかなく、身にしてみて覺ゆ、須磨は攝津國矢部郡にありて、有なる源平の古戦場、明石は播磨國明石郡にあり、人丸が「はのく」との歌と、源氏物語とによりて名高し。

「つかへ」

「うとましや」

は癪のこと

「どうなる」

は興のさむるをいふ

「天柱」

は鐵刀木と書き、蠻語なりといふ、熱帯地方に生ずる樟樹の屬にして、色赤黒く、木理はカリンに似て班點多く、實堅くして美なり、三味線の棹胴及種々の器物に作る。

「翠帳紅圍に云々」

は、謡曲班女の句を拾取りてつぎ合せ作れるもの、之を知らざれば意義解せず、頗る無理といふべし班女「翠帳紅圍に枕ならぶる床の上、なれし衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし云々、さるにても我夫の、秋よりさきに必ずと、ゆふべの數はかさなれと、あだし言葉の人心、頼めて來ぬ夜はつもれども、欄干に立ちつくしてそなたの空よとながむれば、夕暮の秋云々」これにて明なり、「同穴の跡夢もなし」を「四つ門の跡夢もなし」とかきかへたるは、此作者にあらず、近松巢林子が冥途の飛脚に「翠帳紅圍に、枕ならべし圍の内、馴れし襖のよすがらも、四つ門の跡夢もなし、さるにても我夫の、秋より先に必ずと、仇し情の紅を頼み、人の頼みの綱きれて云々」とかけり、されば近松は謡曲をつめて作り、此作者は双方よりとれることとし、近松は下の巻の書出しに用ひたれば故障なけれど、此の如く單獨の歌としてうたはしむるに、意義通ぜざるやうせしはわるし、「翠帳紅圍」はみとりのとゞり紅のれや、極めて美麗なるをいふ、「よすがら」は終夜の意、「四つ門の跡夢もなし」の四つ門の意心得られず、筆に任せて書きたるにあらざるか、なほ尋ねべし、「秋より先に必ずと」は秋の前に必ずなとづるゝといふこと、それぞと問ひし人もなしは其人もなとづれずといふ意、

「班女」

は漢の成帝に仕へ、大に幸せられしが、後飛燕の爲めに寵を奪はれ、悲みて秋扇に比し怨歌行を作る、別記を見よ。

「かこら草」

はかこらこと

「浮れ女」

は女郎、意は字の如し。

「弓矢の耻」は武道の耻、

「川竹」は遊女をいふ、起き臥し定まらぬ義なり、金葉集に「一夜とはいつちぎりし川竹のながれてこそをみひそめしか」

「格子先に編笠こし」とはお安くなし、粹が身をくひし果といふべし、

たつた一口が比翼連理とはなさけなし、比翼連理は深き契りといふ意に見てよし、別記を見よ、

「きぬぐ」に絹をかけたるはよし、「木綿く」にめん／＼（各自の意）を含ませたるは頗るいやらし、且滑稽じみたり、めん／＼にて綿を含み居る事明なれば、木綿といはずともあれがし、此絹と木綿とにて、昔の榮華と今の零落とをあらはせり、きぬぐはもととも寝せし男女の、曉おのが衣々になることにて、こゝは朝の別れのこまやかなるをいふ、

「おはもじ」はおはづかし、婦人の語にて、足利時代の末、朝廷式微にして供御のものそなはらず、女官其名を呼ぶを忌みて、何文字と稱せし隠語より起るといふ、

「色は思案の外」千古の格言

「氣は張弓」とかけたり胡弓に應ず

「熊子も相々山」とかけたり、相の山は曲の名、

「吉野立田の花紅葉奥科越路の月雪」謡曲望月の句なり、吉野、は大和吉野郡にあり花の名所、八田知紀「吉野山霞の奥は知られども見ゆる限りは櫻なりけり、立田は大和國平群郡にあり、紅葉の名所、古今集、立田川もみち亂れて流るめり渡らば錦申やたねなむ、更科は信濃國更級郡にあり、月の名所、古今集、我心なぐさめかれつ更科や姥捨山に照る月を見て」越路は今の三越地方、雪の名所、古今集「君が行く越の白山知られども雪のまに／＼あとや尋れん」

「仇し野の露鳥部野の煙」煙は人生のはかなきをいふ、仇し野は嵯峨の奥にあり、鳥部野は東山清水寺の西南にありて、人を葬りし處、徒然草に「仇し野の露消ゆる時なく、鳥部野の煙たち去りてのみ、住みはつるならひならば云々」、歌の意は、月雪花の美しきがめも一時にて過くれば跡もなし、人の榮華も須臾にして、皆北邙一片の煙と化すといふこと、華かなる文字をならべたるまでなり、

「五聲」は宮、商、角、徵、羽、

「五音」も五聲に同じ

「叫聲」は平、上、去、入、

「琴は音ある物の司云々」

此事白虎通には見當らぬやうなるが、推當に書けるものが、風俗通の誤りか、なほ尋めべし、風俗通に、琴は神

農の作にして、樂の統なる由記せり。

「引き見る」 琴の縁語、

「一より十まで斗爲吟する」

罪科を残らず間吟味するといふ意、巧にかけたり、琴は十三絃にして、一二三四五六七八九十斗(十一)爲(十

二)巾(十三)と呼ぶ、

「二上りに氣をつり上げる天秤實、胡弓の弓の矢から貴」

「調子も時も合の手」

とかけたり○間の手は聲の間に引く手の名

「道理に叶ひし」

とは何處が叶ひしか知られど、重忠が俗曲に委しき粹人なることは明なり、景清と鉢合せし事もあるべし、

「びんともしやんとも岩永」

とかけたり、三味線の縁の語、

「撥聲天窓かくばり」

とはよくいひたり○撥聲は聲を撥の如く剥込みていへる髮にて、淨瑠璃太夫江戸の半太夫に始り、寶永頃流行せし憎

らしき結方なり、

「拍子」 以下皆琴三味線の縁の語にて、巧に書きたり、味へば自ら通すべし○「でんじ(天柱と轉じ)かへたる落繩」とかけたり、先の月の

唱歌をいふ○冥加は落の曲にある語前を見よ○「お禮ものべ棹」とかけたり三味線に延棹繼棹あり○「御前を三下り」とかけたり三下りは三の

糸を下けたる調子○「正しき本調子」とかけたり本調子は通常の調子○「撥利生ある糸さばき」妙味ふへし

伊賀道中双六

總 解

此敵の起りは寛永七年にして敵討は同十一年十一月六日なり。我が故郷なる三河岡崎の舊藩主。本多侯が大和郡山城主たりし時にして敵味方を助けし櫻井も荒木も皆其藩士たり。しかして又五郎もゝと同藩士たりし事。殆ど疑ふべからず。其證四あり。

一河合家は幕府の附人にして。世々本多侯三老職の一に列し。以て維新に至る。其子孫今なほあり。本多侯は處々に封を移されしゆゑ。随つて河合家祖先の墳墓も。處々に散在せるが。其中に又五郎と刻める碑ある事。

一又五郎の親戚。本多藩に多かりし事。

一附人はもと幕臣なれば。俸祿も幕府よりうけ。歸參なども自由

なりき。故に幕臣に親戚知人多く。彼等がこれを庇護せし事
一岡崎藩士は。一般に河合家の祖先なる事を認め。町家は岡崎に
て。伊賀越の芝居を演ずれば。必ず雨降るといひ傳へ居る事。
ざるを。彼れが何故に他藩に仕へしかといふに。當時家にかゝはる
程の過失ある時は。退身とて一身を退きて。家を安全にせし事あり
又五郎も父か自身かに過失ありて。俱に退身せしものならんとい
ふ。

又右衛門は。伊賀國荒木村の農夫の子なるが。劔道を柳生宗矩宮本
無三四(無三四は一時本多家に仕てし人なり)に學び。頗る其技に長
ぜしかば。郡山藩主本多侯に召抱られて斯道の師範を勤め。數馬の
姉婿たり。敵討の後。數馬の主因幡鳥取の池田侯に迎られて。其地に
至りしが。俸祿と邸宅とを賜はりて。領外に出づることを許されず。
蓋し仇のこれを窺ふあるを恐れてなり。寛永十四年八月廿四日歿

す年四十一。

櫻井も幕府の附人にして。二家ありしが。此時いづれも仕を致して。助太刀に赴きしかば。藩籍を除かれて家絶えたりといふ。彼れが幕臣に親戚知人あるも。附人の故なるべし。

當時本多家の藩主は。徳川家四天王の一なる。本多平八郎忠勝公の長子。忠政公の男。甲斐守政朝公なり。これを大内記政勝公と思へる人多きが。政勝公は。忠勝公の第二子なる。大坂の夏陣に花々しき戦死を遂げし。出雲守忠朝公の男にして。政朝公寛永十五年に卒去ありて。嗣子政長公幼少なれば。分家より入り。後見として藩政を執りし人なり。ゆゑに敵討より四年の後にして。何等の關係なき事明けし。されど此人は。心あくまで猛く。頗る武を好みて。當時青山大膳。水野監物等と。世に三鬼と稱せらる。吉野山は古來狩獵禁制の地にて。之をなさば山神たゞりをなすとして。人皆恐れしを。我が領内にて我

が狩するに。何者か妨ぐるものあらんやと強て之を催されしに。天
狗出^{いで}來りて咎めしかば。しばし問答の末。鐵炮にて打放されしとい
ふ。これ大内記天狗打の炮とて。今尙本多家に傳はれりと。
此敵討をしるせる書數種ありて中には記事の大に異なるものあ
り。或は又五郎備前岡山にて。數馬の留守に。病身なる其弟源太夫を
殺害して。江戸に出奔し。旗本の士久世三四郎。阿部四郎五郎等の許
に隠れしかば。藩主池田侯大に怒りて。其父半左衛門を拘らへて。人
質になされしといひ。或は江戸の藩邸にて。刀の事より數馬の父靱
負を殺し。のがれて荒井四郎。水野十郎左衛門の許にかくれしかば。
池田侯其母を囚へて。人質になせしといひ。其他都て別物を讀むが
如き感あり。これにつき聊考へあれば。諸書を比較して。其事實を云
々したけれど。事ながくしく。極めて煩しければ。後日に譲りて。こ
ゝには其信僞にかゝはらず。淨曲の本となれりと思はるゝものを。

取りて略記することゝなせり。二僕の一を孫八數馬の僕。一を武助又右衛門の僕。としたるは元祿九年難波より發行せる日本武士鑑などより取れるにはあらざるか。其外他より取れる所もあるやう思はるれと。記事異なる二書を取合せ書きたらんには。前後矛盾して。通せざるふしを生ずるゆる。今は専ら一書によれり。又此道中雙六が。先作の乗掛合羽によれる事はいふまでもなし。

前に述べたる河合家の事などは。餘り世に知られざれど。舊本多藩の古老より聞きたるにて。固く其事實なるを信ずるなり。河合家の子孫に尋ねれば。我が家にあらず。三河東加茂郡大嶋なる。河合家の先祖なりといひ居る由なれど。大嶋の河合家に。何等の關係あるべき筈なく。こは又五郎が。世の憎まれ者となり居るゆる。おひかくせるなるべしと。余兒童の頃より。何とは知らず。岡崎にて伊賀越の芝居を演ずれば必ず雨降ると聞居れり。なほ尋ねて

後に記すべし。

渡邊數馬は、因幡鳥羽の藩士(敵の起りは寛永七年。敵討は寛永十一年にして。此間に池田家は封を備前岡山より。因幡鳥取に移されたり。故に岡山藩士とも。鳥取藩士ともいふ)にして。父を靱負といふ。靱負の父金右衛門。同藩の士河合又左衛門と。親しく交をなす。渡邊の祖先正宗の名刀を藏せしが。長久手の役に之を失ふ。時に河合家に一刀の正宗を有す。これ渡邊の失ふ所のものと。金右衛門。心に之を得んことを欲すれども。敢て言はず。又左衛門其意を覺りて。足下と交情斯の如く厚ければ。命をも惜まず。況んや此一刀をや。されど先祖傳來の家什なれば。手から授る事能はず。必ず得んと欲せば。來りて偷むべしと。金右衛門夜竊に其室に忍びしに。茶の湯の釜の上に蛇の頭を見る。恠みてためらふ中に。又左衛門目を覺して。茶を飲まんとす。金右衛門倉皇出で。其妖を告げしかば。之をあらため見し

に。果して毒液たぎれり。又左衛門大に歎じ今日蛇を殺して其首を失ひしに。彼れが執念こゝに至るか。若し足下の言なくんば。殆と死を免かれじ。其恩に報ゆる爲め一刀を以す。祖先も必ず愛む所なかるべしと。正宗をとりて之を與ふ。金右衛門。蛇の妖を見るも刀のゆるなれば。後のたゞりを恐るといひて。肯て受けず。又左衛門。されば子の世に至りて贈るべしとて。證券を書きて之を與ふ。靱負世を嗣ぐに及び。又左衛門も亦死し。又五郎の世となる。靱負即ち證券を持して。刀を得んことを請ふ。又五郎は新刀を好みて。古刀を愛せざりしゆゑ。直ちに之を與へたり。後笑ふ者あるを聞き。大に悔ゆ。靱負の子數馬。父に謂つて曰く。正宗は世の重寶なりといへども。年代久しければ其利鈍明ならず。且又五郎も悔ゆる様子なれば。返へすに如かずと。靱負以て然りとなし。或る夜一僕を從へて。又五郎の許にいたり。數馬の語を述べて之を返す。此時俱に江戸にありて。住宅相接

せり。又五郎之を聞きて。内心其取捨の容易なるを怒り。利鈍明ならずば。我れ之を試むべしとて。刀を抜き放し。靱負を斬殺して逃亡す。僕は先きに歸りしゆゑ。夜半に至るも之を知る者なし。數馬父の歸宅の遲きをあやしみ。人を遣して訪はしめ。後親く往て其室に入り。始めて父の殺害せられしを知る。さては敵は又五郎なるべしとて。門番に問ひたるに。已に外出せりとの事なれば。之を追はんとせしが。衆の止むるにあひて果さず。藩主池田侯(忠雄)之を聞きて。大に又五郎の暴狀を怒り。其母を囚へて人質となし。千金を以て又五郎を募る。又五郎は逃亡して。從兄なる幕府の士荒井四郎の家に隱る。四郎當時任俠を以て推され。旗本の首領となりて。水野十郎左衛門。池田勘兵衛。近藤登之助等と殊に相親む。水野等は男達を以て任じ。暴威をふるひ。都下を横行せるものなり。一夜此徒集りて酒を酌み。芝居などの話をなす折から。又五郎進み出で。我れ遁れて此家に寄る。

は。敢て命を惜むにあらず。只彼等の刃にかゝる事口惜しければ。自殺せんと欲するのみと。四郎醉に乗じ氣を作して曰く。近頃腕鳴り肉躍るといへども。用ふるに處なし。君等はこれ一騎當千の士。今四人同盟して又五郎をかくまひ。以て池田侯にあたらば。懽勃たる勇氣を散ずるに足らん。これ大快事ならずやと。三人立所に賛し。其黨を召すに應ずる者頗る多し。池田侯之を聞き。先づ人をして又五郎を請はしめたるに。與へざりしかば。其母を殺さんとす。四郎等これを聞き。勘兵衛をして來り説かしめて曰く。又五郎自ら其罪の免かれざるを知れば。請ふ母に易へんと。よつて池田侯。笹川團右衛門をして。卒五十人を率ひて母を送らしめしに。これを奪ひ取りて又五郎を與へず。あまつさへ團右衛門これに死せしかば。侯の怒り一方ならず。我家はもと將軍の姻戚にして。武勇を以て顯る。然るに此奴輩に賣られたる事。遺恨千萬なり。侮辱茲に至りては。誓つて報ひざ

る可からずと。親族なる仙臺彦根。阿波の諸侯と議し。上書して寧ろ封を致すも。四人を得んことを請ふ。荒井等も黨を聚めて自ら固め。其數六百餘人に及び。都下騒然として。人馬東西に奔走し。將に大事に至らんとす。間もなく池田侯逝去あり。遺命に其の志を遂ぐべきを以てせられければ。仙臺等の諸侯。葬事を終へて後復上書し。強て得んことを請しゆゑ。幕府四人を捕へて之を拘し。又五郎を追放に處せり。此時に當り。池田家は世子家を襲ぎて。封を備前より因幡に移され。旗本等は其首領を失へる上。幕府よりの嚴命に接し。又五郎を參河の片濱に匿して。黨を散ぜしかば。事姑らく止むを得たり。ここに於て數馬獨り父の讐を復せんと願ひ出し。故池田侯大に之をあやぶみ。其助力する所を尋られしに大和の郡山に往き。姉婿荒木又右衛門の力を藉らん事を申す。侯又右衛門の武名を聞き及ばれしかば。これを許し。宴と國行の刀とを賜ひ。其母を扶秩せらる。數馬

時に年十六。母と別るゝにめゝしく涙を灑かず。單身旅装を整へ。曉に發して大和へ向ふ。荒木又右衛門は吉村と稱し。劍道を以て郡山藩主本多侯に仕へ。五百石を食む。靱負嘗て其技に長ずるを悦び。女を以て之に妻せり。數馬江戸より來りて。復讐の事を告げ。其力を藉らん事を求む。又右衛門之を聞き慨然として。汝が父は即ち我父なれば。力を竭して其志を遂げしむべしと。之を主君に告げて致仕を請ふ。本多侯之を義として。悦んで聽許し。金及佩刃を賜ふ。乃ち妻子を劍客柳生氏に託し。家財を門人に頒ちて。宅を有司にかへす。又右衛門の僕に。北藤喜兵衛山根武兵衛といふ者あり。いづれも士流にして。好んで武術を學ぶ。又右衛門これと起居飲食を俱にし。親しき事骨肉の如し。二人死を以て従はんと請ひしかば。これを許し。四人各一囊を背にして出づ。こゝに櫻井甚右衛門といふ者あり。荒井四郎の従兄にして。又五郎の伯父なり。嘗て東都にありしが。槍を以て本

多侯に仕へ。五百石を食む。其弟甚佐も。弓を以て百石を食む。甚右衛門又右衛門と。試合をなして負しかば。負惜みに。眞の手並は。白刃相會する時にあらざれば知るべからずと稱す。故に又右衛門。去る時一書を贈りて。我れの仇とする所は。足下の親戚なり。足下往て之を助くれば。白刃を以て會する事を得べしと述ぶ。人之を知りて相傳へしかば。甚右衛門已を得ず。仕を辭して往かんと請ふ。本多侯之を許して賜ふ所なく。併せて弟甚佐の仕を解かる。是に於て兄弟江戸に適きて。親戚なる櫻井氏に依らんと欲し。一族從類三十餘人を率ひて。先づ大阪に逃る。又右衛門之を聞き。彼等の往く所に追跡せば。仇又五郎を得べしと。數馬等と大阪にいたり。一日花を生玉の祠に賞し。櫻井兄弟の幕を垂れて相酌むを見る。又右衛門大に悦び。三人をかへし。獨り尾行して市外の一禪院に入るを認む。是より四人微服して其消息を窺ふ。兄弟これを覺り。金を俠客に與へて劫さしむ

又右衛門眼を瞋らし叱して曰く。汝等我れを知らざるかと。俠客其名を聞きて大に懼れ。狼狽して逃ぐ。兄弟速に東上して。其跡を絶たんと欲し。其從屬を減じて夜半に發す。四人追つて關に至り。驛の旅宿に遇ふ。兄弟大に駭き。如何とも爲す能はず。よつて酒肴を設けて之をもてなし。日頃の怨を棄て好みを結ばん事を請ふ。又右衛門請を諾し。俱に盃を酌みて飲む。これより後百方又右衛門を避けんとす。又右衛門も之を知りしが。遂に江戸に至り。荒井の家に入るを見て去る。此時荒井水野等四人。已に閉門を宥されて。復た黨を會し議して曰く。參州片濱も。又五郎を置くの地にあらず。思ふに肥後の相良(球磨郡人吉)は。世を離れたる山間の一都邑にして。道險隘なれば。彼をかくまうこと此地に如くはなし。曩に相良の領主に請ひて。其許を得たり。されど護送するもの無きに困む折から。幸に櫻井兄弟東上したれば。彼等をして送らしめん。途次は白須賀より片濱に至

る間道あれば其地の領主に依頼してこれより入らしむべしと。衆議こゝに一決し幕府の士にして劔を善くする星合段四郎を始め十餘人を櫻井兄弟に附し夜を冒して出發せしむ。相良侯また賈人を出して之を導く。又右衛門の友なる藤堂家藩士梶原源右衛門竊に知りて之を告ぐ。又右衛門等大に悦び急行跡を追ひて三島に至り。櫻井等の後にあるをさとる。又右衛門三人をして先づ行かしめ止まりて彼れの來るを俟ち之に面す。兄弟大に愕けるが其一人なるを怪みて之を問ふ。又右衛門數馬は病を得て東都に死したれば。故郷へ歸らんと欲するなりといふ。兄弟且信じ且疑ひ屢之を避けんと企つれども能はず。遂に間道に至り夜半に發して片濱に向ふ。又右衛門等直ちに桑名に出で。又伏見に到りて數日待つといへども來らず。櫻井等片濱に至りて又五郎を伴ひ護送して伏見に至り。數日滞在すれども。又右衛門を見ず大に安心して荒木已に去らば。

何の急ぐ事かあらん。一たひ西海に赴かば。また東歸することを得ず。これより奈良を遊覽して。伊勢に出で神宮に詣で。然る後鳥羽港より肥後に到らんと。明朝東に向ひて發す。又右衛門等追跡して之に及び。仇を討つの地を伊賀の上野と定め。先づ着きて酒店に入り。其來るを待つ。櫻井等已に伏見より荒木を見ざれば。上野の城下何の虞なきを思ひ。皆武裝を脱して輕服せり。又右衛門等暫し忍びて窺ふ中に。人馬の音騷然として來り。櫻井兄弟は又五郎の前に。星合は後に。其他護衛從者合計三十名ばかり。列をなして進む。又右衛門突如として一行の前に顯はれ。數馬及二僕をして又五郎にむかはしめ。身は馬上の甚右衛門に近きて。先づ其股を斬りついで其臂を斷ちて之を斃す。星合等が數馬を拒ぐを見て。馳せて之を卻けしかば。數馬此間を得て又五郎に迫り。又五郎槍を以て之に對す。護衛の者左右より。之を翼くるを以て。二僕これに當りて格闘す。數馬且

く退いて。街の西端に至りしかば。こゝに於て三所に分れ。劔光空を掠め。叫喚地に震ふ。領主藤堂侯。一族玄蕃等をして數百人を率ひ。之を周りて護らしむ。梶原源右衛門。其場に赴かんとせしに。或る者公の命あれば。私に往くを許さずといふ。源右衛門友に急あり。後患を顧る場合にあらずと。馳せて之に臨む。喜兵衛は四人。武兵衛は七人を殺して斃れ。數馬は身に三創を被りて朱に染みたり。又右衛門悉く敵を卻け。源右衛門と後にありて聲援す。數馬忽ち退きて伏せしかば。又五郎得たりと。槍を投じて進む。數馬突起して其後に出で。其左臂を斬り。遂に之を斃してとゞめを刺す。されど創甚しかりしゆゑ。一たび絶入りて纔に蘇生する事を得たり。又右衛門。櫻井兄弟及星合等十七人を殺し。二僕十一人を斃し。又五郎を合せて二十九人。逃げし者九人ありしといふ。玄蕃其故を問ひしに。又右衛門口づから語りて之を書せしむるに。語氣平然として頗る詳かなりしかば。

人之感ぜざるなし。明日敵の死骸を穴に埋め。二僕を念佛寺に葬
り。二人墓前に哭して之を哀む。藤堂侯館を與へて之に宿せしめ。醫
をおくりて創を療愈せしめ。翌日引見して大に賞嘆し。各三千石を
以て召抱へんとす。兩人之を固辭せしかば。侯汝等の固辭するは因
幡侯を憚るなるべしとて。二臣を遣して之を請はしむ。因幡侯之を
許さず。數馬は譜代の臣下にして。又右衛門は其姉婿なればとて。同
じく二臣を遣はして來り迎へしむ。藤堂侯與へずして曰く。荒木は
もと我が領民にして。仇を復するも亦我が城下に於てすと。遂に決
せずして之を幕府に訟ふ。幕府之を和せんと欲し。兩人を幕臣とし
て浪華に致さしむ。藤堂侯二千人を以て之を送る。因幡の老臣荒尾
但馬。江戸に往きて二人を請ふ。閣老等皆藤堂侯に請ふべしといふ。
よつて荒尾伊勢に到り。侯に面して頓首して曰く。貴國の士に富む。
關が原大阪の役より。武を以て名を著す者。勝げて計ふべからず。敵

國の如き。只一の大學ありしも。已に死し。臣等の如きは。碌々言ふに
足らず。今二人は。纔に其私讐を復せしまでにて。武を以て稱するに
足らずといへども。寡君の士に乏しき。苟も賜を得て。其闕を補はん
と欲す。侯之を聽し給はゞ。これ寡君の榮なりと。藤堂侯之を諾す。郡
山侯も亦人を遣して。又右衛門を迎へしむ。但馬之に請ひて曰く。數
馬が志を遂ぐるを得たるは。皆荒木の力なり。今歸るに臨み。若し仇
人の窺ひて。酬ゆる事あらば。啻に數馬其名を失するのみならず。又
右衛門もまた前功を廢せん。警備を嚴にして歸り給はゞ。もと貴藩
の臣なるを以て。敢て争はずといへども。願くは賜を得て。寡君の榮
とせんと。郡山侯之を許す。是に於て但馬二人を携へて歸る。池田侯
大に褒賞し。各三千石を以て祿し。藩士師となし。世に告ぐるに死を
以てす。

此記事につき。意見の大要を述べば。池田侯が封にかへても。又五

・郎を首にせんといひ出られたる頃は幕府ももてあつかひしほどの。大事件なりしに相違なきも。總じて誇大に書き。事實よりも淨曲に近しといふべし。弟の敵とせる。明良洪範。武將感狀記などの説を正しとすべし。

此淨瑠璃は天明三年四月廿四日。竹本座の興行に上せしものにて。作者は近松半二。近松加作の兩人。半二等の傳は。あまりながくしくなるゆゑ。後篇の妹脊山に載す。

伊賀越道中雙六

婚禮の段

「心かけある侍は云々」

武士は刀の音に目をさま

すいふ意

「伊達を好まぬ刀の柄前」

青砥的の質素見てたり伊達

は華美に装ふないふ、真丈

雜記に「諸家深秘録に曰く

寛永三年台徳院様（二代將

軍秀忠）御上洛の時、伊達

政宗の僕從等、はゞしき衣

類を着しければ、諸國の人

民に替りし故、その頃風流

の人を見ては、伊達者とい

ひならはしたりとなり（其

時政宗が行粧美麗な盡し眞

紅の糸を以て、馬の轡を作

れりと、其の外を押して知

るべし）

「人に勝れし袴の幅」 彼

れは實際大男なりしなり

「六つ」 は今の六時

婚禮の段

忍び入にけり。心かけ有る侍は。地を這ふ虫も氣を赦さぬ。唐

木政右衛門。伊達を好まぬ刀の柄前。人に勝れし袴の幅。上屋

敷より歸り足。武介手を突。「申し旦那。殊の外お隙入。御用の

品は如何躰の儀でござりましたな。サレバ。此間から辭退

する。彼の林左衛門と武藝の試。明朝正六ツ時。御前において

立合へと。押付て御家老の言渡し。今晚妻を迎へまする婚禮の

中。一兩日お延下されと。願ふてもいかな聞入れず。女房呼は

私事。明日は延されぬと。去とは心ない家老殿。此方は内へ氣

が急く。もゝ尻に成つて。漸只今祝言の拵へ。用意は出來たか

ヤレ。知行取りにも飽果た。嫁の來る迄上下脱で休息せう。

枕おこせ女子共。アイ。と返事もさし足に。角を隠せし塗枕。

「婚禮」は嫁娶の禮は夜行ふよりの稱
 「も尻」は浮きて落つかぬ尻、徒然草に「馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは心うかるべし」俗にいふはつ立て尻
 「知行」は領地のことより轉じて扶秩をいふ
 「返事もさし足」「かたへに奥様」とかけたり
 「角を隠せし塗枕」語面白し、菅原傳授に「木地を隠さし塗机」
 「袴は解けど胸解けぬ云々」夫の風に妻の柳、よく書きたり「侍肩衣」怒りし肩に張りし肩衣、よくいひたり、肩衣は上下の上をいふ、松永久秀又は近衛前久公も、素襖の袖を切捨てゝ作りしといふは、いづれも妄説にて、其以前よりありし由、伊

そつとかたへに奥様を。嬖がはりの見えがくれ。袴は解けど胸解けぬ。鋭い常の侍肩衣。折てたゝんで取直す。詫の種とは見付た夫。「ヤイ武介。あの女子は何者ぢややい。エイく。イヤあれは。彼の今日。お目見えに參つた新參の女中でな。ハイ旦那さま。お目かけられて下さりませ。フウ奉公人ぢやな。見かけから愚鈍さうな。不束な女なれど。遣ふて見てくれう。コリヤヤイ。今夜は身共が女房を呼むかへる。祝言の給仕申付けるアノ嫁御とお盃の。其お給仕をせいとほそりや餘り。イエサア餘り急な御祝言。不調法な私が。「給仕得せすば奉公叶はぬ。立て歸れ。イヤく申し。何でも御意は背きませぬと。下女に成ても夫の内。離れ兼たる心根を。察して武介が吞込む涙。」さうだく。奉公は辛抱が大事。何おつしやらうと。アイくとそこらを程よう鹽梅加減。ドレお盃の用意せうと。料理を機會

勢貞丈はいへり、なほ傾城
戀飛脚を見よ
「鹽梅」は按排の借字、工
合よく取計ふないふ、古節
用集に「按排の音にて」五味
を調利するをいふ、後世鹽
梅の字を用ふるは附會なり
と見ゆ、鹽梅も同じ義なり
「羽織」は古の胴服にて、
はふり（放）の轉、はなふり
のあて字なりといふ
「びつしよなく」は、す
げもなくはれつけ、又ひつ
たくるやうの事にいふ俗語
「彌左衛門」は姓を池永
と稱し、仕立屋なり、其上下
の裁方、角菱立ちしなるべ
し故に「こはよりきつて」と
つけたりなほ其道の人に
尋れて記すべし
「發句」は連歌の發句（上
の句）十七文字を取りて作
れるよりの稱

に立て行く。折から宇佐美五右衛門様。御出でと案内す。「ハア
又堅藏がうせられた。誰れぞ羽織持來いと。云はぬ先から心得
て。勝手覚えし女房の徳。機轉利して後から。着せる羽織をひ
つしよなく。「エ、子供ではないわい。差出女め彼方へ行けと。
睨付られて是非なくも。立間せはしく入來る五右衛門。彌左衛
門裁の社禰。こはばり切てむづと座し。「政右衛門殿。今晚は其
元に嫁入が有ると承り。御祝儀申しに參つた。老人の寸志ぞ。
御覽下されと。一通を差置けば。是はく。婚禮を祝しての御
發句でがな。先以て忝しと。押開き見て驚顔。「フウこりや拙者
への果し狀でござるな。ハテ存じ寄らぬ。先其意趣の次第はな
知れた事。科ない女房何故去た。ハア拙者が女房を。拙者が去
るに。お手前様が何故の御立腹。イヤさいふまい。尤お谷は上
杉の家中。和田靱負が娘なれど。お身と密通して二人連。此郡

「郡山」は大和國添下郡にある都會、總解を見よ

「勘當」は君臣父子などの縁を斷ちて、放逐するをいふ、もと法に勘へ罪に當つるといふ意

「座は立たせぬ」は即座に切はなすといふ意

「別儀ではない飽ました」とは、あつけない返答、五右衛門怒らざるを得ず

「今拙者と打果し云々」

うまく止めたり、五衛門忍ばざるを得ず

山へかけこんだ浪々の躰。不便に思ひ。且はお手前が器量を見込。殿へ申して有付せたは此五右衛門。其上勘當請て親の無いお谷。身共が娘分にして改てお身に呉たれば。以前は靱負が娘にもせよ。今は身が娘。少しの見落し有るとても。去られる義理ではないぞよ。一旦の恩を忘れ。外の女房持かへて。五右衛門を踏付た仕方。勘忍ならぬ。それ共お谷に據ない科でも有るか。それ聞ふ。返答次第。座は立せぬ。と鐙打たゝいて詰かけたり。「イヤモウ重々御尤千萬。お谷に微塵も科はなし。去つた仔細は別儀ではない。飽ました。女房といふ物は。飽てからもうく。片時も持て居られる物ではござらぬ。サ、ハ、ハ、お聞なされく。御立腹は御尤ちやが。今拙者と討果なされては。五右衛門殿。殿への不忠に成ませう。なぜとおつしやれ。今日上より御意有て。明朝御前において。櫻田林左衛門と。劔術の勝

「遺恨は遺恨御用は御用」
と聞分けのよきは武士氣質

「雪と墨」は善悪美醜など
極端の相違をいふ語

「河豚の横飛」よく罵し
つたり、孕み女は見苦しき
もの、その主が見ても、あ
まり感心せず

負を致す此政右衛門。是迄拙者を推擧なされ。明日も勝負見分
の役目を仰付られる其元が。此立合も致さぬ中に。拙者をさつ
ばりと切てお仕舞なされて。殿へは何と云譯はなさるゝぞ。是
非憤り晴れぬと有らば。何と致さう。武士の因果。明日の御前
を勤て。其跡でお手に懸りませう。暫く宥免下されと。理に詰
られてさしもの五右衛門。コリヤ尤。遺恨は遺恨御用は御用。
明日迄は傍輩の役目。中よし。御得心下さるか。ア、忝い
。然らば今宵は。これに緩りと御酒一獻。御上がり下され
「追付新しい女房が参る。イヤ又其器量のよさ。雪と墨との替徳。
古女房のお谷めは。不器量の上に。因果と早ふ子を孕で。正眞
の河豚の横飛。飽たを無理とは思し召すな。と愛相づかしを立
聞きの。障子に齒形も入る計り。登る痞の折しも有れ。」嫁御様
早是へ。ヲ、待兼た。早ふ通せ。女子共夫れ燭臺に火を灯せ。

「島臺」は婚禮の席に用ふるもの、昔の洲濱の遺形にして蓬萊島にかたどり、松竹梅龜鶴及高砂の尉姥等を作りつくは後にいふべし「玄關」は玄妙法門の義より出で、禪家客殿の入口の稱なりしが、後に俗人の家にもいふことなれり「紙乗物」は女中の乗物「介添女房」は嫁に付添ふ女「馳走」はもと其人の爲め奔走周旋することより、轉じて饗應の意となる、「酌、癪癪」相應す

「綿帽子」婚禮の時新婦のかむるもの、被のうつれる

島臺。銚子。と騒ぐ程。五右衛門がむかづき顔。玄關より奥座敷。直に手繰の紙乗物。對の簞笥に染込の。覆も愛持つ介添女房。「チ、大儀く。イヤ巾し宇佐美様。只今かの妻が參つた。お悦び下され。ア、御目出たい儀でござる。御推量下され。貴公には御退屈。コリヤく彼方に御酒上げいよ。イヤ拙者御酒たべると。胸が悪くござる。是は氣の毒。然らばお菓子。イヤサお構ひ御無用。ハテ堅くろしい。何かな御馳走。「ヤイコリヤ新參の女。何をうろくまいくと。其不調法では祝言の酌は得せまい。お客人の癪癪。ソレお脊中でも揉であけいと。いふ程腹の立波に。音を泣く千鳥四海波。扱我等今晚の花智。社祈を着る筈なれど。あたまから打解る様に。角菱止て此儘の見參サアく早ふ。女共の顔が見たいく。チ、お心安い智様で。嫁御様のお仕合。耻かしがつてござらずと。サアお出なされま

ものなりと、前にいへり
「いと様御寮」^{いととやう}いと愛ら
しかるべし、御寮は御料と
書くべき由前にいへり

「尺長もしまらぬ罌粟の花」^{たけなが}
嫁御」罌粟人形其まゝ、

「三寶」は三方と書くべし
三方に栗形あるゆゑの稱

「千秋万歳の」^{せんしゅうばんざい} 謡曲難波
にあり「いやましに運ぶ御
寶の、千秋萬歳の千箱の玉
を来る」

「聲引出」は聲に見参の時
の贈物、引出物とは、もと響
應の時など、馬を引出して
贈りしよりの稱なるが、後
には初見参等、種々の場合
に贈る物の名となれり

せ。と物乗明れば綿帽子に。腰より上は埋もれて。七つ計の可

愛様御寮。尺にも合ぬ襦ほらく。帯につられて座敷にとんと。

「乳母。是取つてく。ア、申し其帽子。御盃の濟む迄召てござれ

ア、イヤく。うつとしからう。取つてやりや。ドレ戀女房の御

面相と。帽子とらせば尺長も。しまらぬ罌粟の花嫁御。直す三

寶土器を。乳母が持添戴かせ。聲君様へ上まする。「忝い忝い。

女子共皆見てくれ。何とちよつこりと。何處に置ても邪魔にな

らぬ。よい女房であらうがな。ハア嬉しいく。目出たふ一ツ

次の間より。千秋萬歳千箱の玉を謡聲。襦の袖に一通取乗せ立

出づる。ヤアお前は母様。柴垣様。と驚くお谷に目もやらす。

政右衛門に打向ひ。頑はない此娘を。女房に持て下され。此上

の本望なし。聲引出の此目錄は。主人上杉宇内様より。倅志津

馬に下されし。敵討御免の御書。いよ／＼助太刀なされて下さ

「どれ合」は野合をいふ
「よしみもない他人の助太刀が云々」武士の義か
くありしなるべし
「お後」は後添の意より
つけしなるべし

「義理といふ色に迷ふて」
語頗る味びあり

「我等もう酔ました云々」
と酒にまぎらす所頗る妙

るお心ぢやな。お尋に及ばず。承知致いて罷有る。「コリヤ新参の女もよく聞け。身共には先妻が有たれ共な。親の赦さぬ密通。靱負殿の勘當の娘。どれ合女夫の悲しさは。表立て髯舅といふ事はならぬぞよ。今郡山の扶持を戴く政右衛門が。よしみもない他人の助太刀が成るべきか。「コレ此お後は。世間晴れた靱負殿の忘れ篋。志津馬が妹に違ひない。此子と今祝言すれば。是こそ誠の髯舅。舅の敵。小舅の助太刀仕ると。殿へ御願ひ申さん。よも不届とは思されまじ。かなたこなたを思ひはかつて科もない女房。去た謂れは此通り。義理といふ色に迷ふて。五年の馴染に見替た心。汲わけた五右衛門殿。御立腹の段ノは「まつびらく御免下され。我等もう酔ました。何申すやらたわいくと。酒にまぎらす本性の。云譯聞て手を合せ。よう去て下さんした。其誠をちつとの間も恨だ女子の廻り氣を。堪忍し

「一度に顔の色直し」よくか
けたりよくいひたり。色直
しは婚禮の時、三三九度の
式濟みて常の食膳に就く禮
なり、此時聲は嫁方より贈
れる小袖、嫁は聲方より贈
れる小袖を着して出づ、
「三三九獻」 げ三三九度
に同じ婚禮の祝盃
「あから」 は酒の俗語、
飲めばあかくなるゆゑなる
べし、

「饅頭蟹」

の語面白し

て下さんせ。「ナ、サ身共もよい年をして。疑ひの悪口面目ない
天晴武士かな政右衛門殿。」此祝言は敵討の門出。武士道も立ち
家も立ち。よい嫁を迎へられた。扱くくめでたい婚禮。我
等もともくお取持と。始の腹立打てかえ。一度に顔の色直し
「お心が解けたれば。彌替らぬ政右衛門が。後妻のお後や。二世
かけて此方の男。今夜から抱て寐るぞや。コレ女房共くと。
いへどお後は欠交り。乳母もういなうと。やんちや聲。是は娘
とした事が。嫁入早々往んでたまる物かいの。三々九獻まだ濟
ぬ。殿御の盃戴く物ぢや。イヤあからはいや。乳母あれほしい。
あれとは。ム、お餽かへ。さもしい奥様では有るぞ。イヤく
道理ぢや道理ぢや。かわいひ女房に何惜からん。併一は過る半
分は身が預る。是が夫婦のかためぞと。持せばほくく饅頭蟹
「ホンニ忘れた。嫁君の御持参のお道具。と簞笥の引出し廣蓋に

「市松人形」は暑していち
まともいふ、三月雛などに
用ふる小供人形

「濱松の音はさぐんざ」

二十四孝桔梗が原の段にも
「さぐんざ」諷ふ悦びなど見
え、當時流行の小歌にて目
出たき時などによくうたひ
しものと見たり、委しく
は別記を見よ
「そもじ」はそなた婦人
の語

「富士の郡山とけて涙」
とかけたりしは小便のこ
と

「女房共にしゝやつて」
とは噴飯、しゝは小便のこ
と

盛りなら
盛竝べたる玩弄物の。市松人形風車。七つに成る子に。殿を持
せ濟した。しやんく。濱松の。音はさぐんざ。座はかはらね
ど我夫を。夫といはれぬお谷の心。思ひやつて居るはいの。そ
もじとは産さぬ中。ほんの娘の此後と。見かへさした繼母が。
聳殿に悪性根付たと。恨でばし下さんな。ア勿體無事ばかり。
わたしが縁の切れるは。爺様へ不孝の言譯。政右衛門殿何時迄
も。あの子と添ふて下さるが。家の爲志津馬が爲。わしや死ぬ
る迄去れて居るが。嬉しいわいのと明し合。親子の貞心三國一。
思ひは富士の郡山。とけて涙を汲かはす。酒盛に入りしめく
と。夜も更渡れば稚子が。乳母もう寝やう。と乳さがす。「サ、
此お子はいの。七つに成る迄。乳啜へる子が有るものか。殿御
の手前も耻なされ。イヤ大事ないく。是からが新枕。秘共床
を取れ。身も追付寐る。コレお乳母。女房共に尿やつて。寝さ

「切腹なされて下されい」
とは滅法な頼み、此上の無
心なかるべし
「いつば」 はいへば、臺
詞の語、謡曲にも見むたり

してやりやと。痛はり心付く。に。乳母のお藏が抱かゝえ。寢所
に伴ひ入りければ。政右衛門。宇佐美が前に手を突き。改めて
五右衛門殿へ御頼。申上たき様子有り。「サアく役には立たず
と。身共も力に成度い。何なり共遠慮なふ承らう。どうかく。
ハア御深切忝し。近頃申兼たれ共。「其元様には明日。切腹なさ
れて下されい。其仔細といつば。明六時。櫻田林左衛門と立合
仰渡されし。此勝負に拙者負まする。サア知れて有る林左衛門
が手の内。打てぶち伏せるは合點なれど。勝てば御前の御意に
叶ひ。是より一家中の師範仰付られ。お暇が出ぬ時は。助太刀
の望が叶はぬ。御前において政右衛門。物の見事に打負け。そ
れを落度に知行差上。浪人して思ふ儘。小舅の助太刀致す所存。
時には。拙者が劔術を風聽なされた其元様。負た我等が耻より
も。見損ふた御耻辱。よもや生てはござるまい。腹なされにや

「蟲負」は引きたすくるこ
と、ひきを延べたるにて、
蟲負と書くは常字なりとい
ふ。
「五臓」は心、肝、肺、脾、
腎の五つ

「死ぬるを常の武士氣質」
義と見て命の無心に應ずる
此如き人もありしなるべし

成りますまい。これ迄厚ふ御蟲負下され。様々御恩に預りし。
恩を仇と申さうか。腹切て下されと。申し出すは五臓の血を。
一時に吐よりも苦しけれ共。舅の敵が討ちたさ。志津馬に本望
を遂げさしたい計に。斯様の不届を申上る。御赦されて下され
と。鬼を欺く政右衛門。わつと泣たる眞實に。感じ入つて。「ム、尤
々。命進上申す。何よりも安い事。只残念なは林左衛門めに。
耻顔かゝせんと思ひしに。却つて此五右衛門。面目を失ふて相
果るは悔しけれど。貴殿が本望とげたれば。骸の上で身共が耻
も。其時雪ぐ暫しの無念。誠有る侍の爲に。皺腹一つが役に立
てば。身に取て大慶くと。死ぬるの常の武士氣質。「アレ聞て
か。主人に預るお命を。我々に下さるゝ。有がたいとお禮申せ。
女房共。といはれぬ表。親子とも又云はぬが孝行。勝べき勝負を
負るも義心。耻辱を取て御最期も。侍同士はお情けと。互に禮

「八つ、七つ」 調をと、
 のへたり
 「式禮、默禮」 はいづれも
 會釋
 「性急武士の短夜」
 くのきたり
 「大内記」 の事は總解を
 見よ
 「さぶり流」 は佐分利猪之
 助重隆が、富田流の妙旨を
 得、更に工夫を加へて開き
 たる鎗術の流、關ヶ原の戦
 に、勢州津の城に立籠りし
 人なり、なほ別記を見よ
 「切先刃金はなけれども鎗
 を削る心の眞劍」 一上二
 下雷撃突進の状見るが如し
 「數は帳面に」といへり、
 帳面は、とはりの表と、もの
 を記する帳面とかけたり、
 「牌腹」 はふこ腹
 「俯伏しに面目なふ」 面白
 くいひたり味ふべし

義の中／＼に。涙催す八つの袖。時計の七つせはしなく。「アン
 早勝負の刻限近し。身は先へ登城致す。用意有れ政右衛門。貴
 殿のお暇出るを相圖に。身共が切腹。御邊は直様鎌倉へ出立。冥
 途の出立早參る。御苦勞。後刻と。式禮默禮。性急武士の短夜
 や。明る間を待つ最期の門出。いさんで御前へ「時過て早明六
 つの。知せの太鼓。朝日輝く大廣間。大内記殿上段の褥に着座。
 近習の武士。各見物晴れ勝負。政右衛門は犬の竹刀。櫻田は豫
 てより。好む所のさぶり流。長柄を持て待かゝる。双方呼吸の
 透間なく。先を取んと挑み合ふ。切先刃金はなけれ共。鎗を削
 る心の眞劍。打合ふ數は帳面に。見る人々も息を詰め。暫く時
 を移せしが。豫て期したる政右衛門。櫻田が鎗先を。あしらひ
 兼たる手の狂ひ。竹刀がらりと卷落され。鎗にひばらをウンと
 計。がはと倒れて俯伏に。面目なふこそ見えにけれ。勢ひ込で

「生兵法云々」 生兵法
大傷のもと

「肩で風切る櫻田と唐木は枯れし云々」 姓の木によりて、櫻田が傲慢唐木が恐縮の状、よくいひたり
「大内記」これで逐「云々」
大内記は頗る武事を好みし人、實際かゝる見分けのつく位な腕前ばありしなるべし、總解を見よ

林左衛門、「ナント何れも御覽じたか。影で廣言は誰もいふ。まさか勝負にかゝつては、生兵法が役に立つ物ではない。此様な拔作を。お取持なされた。五右衛門殿。何と今御合點が参つたかイヤハヤ天晴のお目利くと。嘲哂譏りも覺悟の前。御前に向謹で。不鍛練の政右衛門を推舉致せし不調法。恐れながら申譯と。云もあへず肩衣反ね退。差添に手をかくる。「ヤレ待て五右衛門。あれ留よ。御意ぢや。切腹先待たれよ。と近習の聲く。ハツと計り。暫し控へて平伏せば。櫻田林左衛門。唐木政右衛門。兩人共是へ参れ。ハアハツと一度の答さへ。肩で風切る櫻田と。唐木は枯し萎れ枝。見すぼらしげに蹲る。「ヤア政右衛門。只今の勝負。大内記是にて遂一に見届。其方が致し方。神妙に思ふぞよと。仰にハツくと計り夢見し心地。一座の不審。「イヤ其方共は。今の立合を何と見た。尤勝負には政右衛門負た

「批判」 は批評の意

「弓を袋にし大刀を鞘に納む」 馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つの意

「亂舞」 は能の間に舞ふもの

れ共。始よりつく／＼見るに。身構へ。太刀捌き。よつく鍛し
誠の達人。林左衛門が中々及ぶ所ならず。彼が心を察するに。
新參の身を以て。古參の者に恥辱をあたふるは。武士の情にあ
らずと。わざと勝を譲りしは。劔術計か。心迄奥床し。頼もし、
併し乍ら。是迄遊藝を樂しみ。武藝に疎き大名と。噂に云れし大
内記。劔術の批判。覺束なし共云ふべきが。弓取の家に生れし
身が。武藝を知らぬ様有らんや。然れ共。弓を袋にし。太刀を
鞘に納むるは太平の掟。今足利一統に治つたる此御代。靜謐の
世に弦を引。鏃を研。鎧よ。弓よ。とひしめくは。上への恐れ。
家衰微の基。爰に思ひはかつて。茶の湯。亂舞に日をくらせ共。
心に捨ぬ劔術武藝。よく知て居る。身共が眼相違有らじ。「政右
衛門を取持し五右衛門。身が爲に天晴忠臣。誤りと思ふべから
ず。又林左衛門事は。怪我の勝をそれとも知らず。いかめしく

「したゝかな目」　はひと

い目「大廣間」とかけたり

「書院」は客殿のこと、白

書院黒書院などは區別する

爲めの名稱なり、強ていは

ゞ表に裏ともいふべきか

「御座を御太刀持」とかけた

「ぐわらり違ふた胸算用」

難有迷惑の次第

罵るは。我藝の我手に見えぬ不鍛練千萬。知行くれるは國の費。
暇を遣はす。勝手に屋敷を立退べし。と案の外成る御誕意に。
林左衛門一句も上らず。尖き殿の御賢慮に。恐れ入たる一家中。
「御前に叶はぬ林左衛門。早立めされ。とせり立られ。したゝか
な目に大廣間。一人すこゝ立て行く。」重て政右衛門にいふべ
きは。新參ながら其方。武藝の鍛錬感じ入る。貳百石の加増申
付る。黒書院にて改め盃。今より一家中の師範と成り。彌忠義
を勵んでくれよ。と最と懇に仰せ有り。しづく御座を御太刀
持の。小姓引連れ入給へば。近習の面々さゞめきわたり。「去と
ては政右衛門殿。けしからぬお首尾。おめでたいく。イヤも
うお羨しう存じます。我々もあやかる爲。お盃が戴きたい。詰
所に相待居まする。扱くく。お手柄く。と挨拶悦び請る
程。ぐはらりと違ふ胸算用。二人は顔を見合す計り。只うつと

「コリヤマアどうと腰もぬけ」とかけたり

「溜息次の間」とかけたり

「人や菊の間」とかけたり
「簾中」は貴族の妻の稱
秋草に「貴人の妻を御簾中
といふ事、御簾の中になは
しまして、輕々しく人に見
え給はぬ意にていふなるべ
し、されど古書には此稱見
及ばず」

りと手を組で。政右衛門殿。五右衛門殿。是ではお暇は願はれ
まい。サア／＼身共も。折角切かけた腹がひねに成つた。コリ
ヤマアどうと腰もぬけ。一度に溜息次の間の。襖あらはに妻
お谷。肩にかゝりし柴垣が。喉に懷劍突詰し。母の自害に稚子
の。お後も跡におろ／＼目元。二人驚き。何故の此生害。「イヤ
のふ。是は覺悟の上。唐木殿の頼もしい心底を聞く上は。此世
に用のない體。未來へ參つて。娘お谷が勘當の訴訟。今日の様
子を見届でと。此廣間のお次迄。隠れ忍んで委細の譯。思ひの
外の立身で。お暇の出ぬは是非もなし。此上ながら姉も妹も。
やつぱり此方様の女房と思ひ。敵討には行れず共。心の助太刀
を影ながら。志津馬が力に成てたべ。兄弟共。さらばよと。顔
を見上見おろして。盛の梅と苔の櫻。跡に残して息絶る。コレ
のふ是れと取付て。泣聲人や菊の間より。大内記殿の御簾中。

「刀箱打明け申さぬ心の底」
皆縁の語

「三世の縁」

主従は三世

久方御前立出給ひ。「改て殿様の御錠意。政右衛門が今日の仕方定て様子有べしと、御窺ひなされし所。心の底に望有て。わざと我手練を隠し。主を謀りし趣。殊に御座の次の間へ女を引入れ。御殿を穢せし科によつて。お暇を遣はさるゝ。去ながら。暫しも扶持し置れし家來。浪人の糧に盡るも不便なれば刀一腰。お暇の印に下さるゝ。殿様御秘藏の信國の名作。敵討の餞別とおつしやられぬ。賣代なして世渡りの。助にせいとの御慈悲。有がたう頂戴仕やと。小姓に持せし刀箱。打明け申さぬ心の底しろし召れし御恵み。エ、相果し志津馬が母。今少し生延はり。此御錠意を聞くならばと。とゞめ兼たる有がた涙。御簾中も御落涙。父にも母にもおくれたる。其稚子は手廻りにて。養ひ育る三世の縁。殊更姉は只ならぬ。お腹に持し大事の身。假の親分五右衛門の屋敷で。介抱如才なう。本望とげて立歸り。元の

「つどく」に ば都度々
々と書く、一つくくの意

主從對面を待て居るぞとつどくに。仰も重き亡骸は。宇佐美
が屋敷で野送りの。供にひかへし若黨武助。此世の名殘。御殿の
名殘。始の妻と後の妻。生れぬ子にも引るれど。返すぐも大
恩の。御前を拜し立出る。世の有様こそ「ものうけれ。

伊賀越道中双六

沼津の段

沼津の段口

「東路」は京より東國へ通ふ道筋、今の東海道、
 「沼津」は駿河國駿東郡の南端にありて、海道屈指の驛次なり、
 「富士見白酒」は同國元市場の名物にして、沼津あたりにてもこれを賣る、もと池田伊丹等にてする、富士見酒より出でたるにはあらざるか、別記を見よ、
 「稻村」は稻の積みたるをも、藁のつかれたるをいふ、
 雲を蜘蛛とかけ、其縁にて「陰に巢を張り待ちける」といへり、面白く書きたり。雲は雲助とて、昔街道のものの陰などに待かけて、旅人の籠などかつぐ者逃亡

東路に。爰も名高き沼津の里。富士見。白酒名物を。一つ召せ
 駕籠にめせ。お籠やろかい参らうか。お駕籠くと稻村の
 影に巢を張待かける。蜘蛛の慣ひと知られたり。浮世渡りは様
 々に。草の種かや人目には。荷物もしやんと供廻り。泊りを急
 ぐ二人連。立場と見かけ立どまり。「コレハしたり。大事の用を
 とんと忘れた。大儀ながらわしが寄た所迄。一走往て來てたも
 と急ぎの用事走り書。さら／＼と書認め。早ふ／＼と手に
 渡せば。主に劣らぬ達者もの。心安兵衛逸散に。元來し道へ引
 かへす。稻村影より。「旦那申し。お泊り迄参りませうかい。
 申し旦那様。どうぞ持して下さりませ。今朝から壹文も錢の顔
 を見ませぬ。どうぞお慈悲。と云かけられ。「イヤ／＼わしは。

無籍の徒、所も定めず宿もなく、雪のたゞふぶが如き意なりと、
「浮世渡りは様々に云々、」世渡りの種々なるをいふなるべし、草に苦をかけたるにてもあらん
「立場」は昔人夫籠かきなどの、杖を立て憩ひしところ
「太義」は御苦勞の意、もと重き義より轉ず、
「急ぎの用事走り書き」よくいひたり
「達者」はもと上達したる者のことより、すこやかなるをいふ、
「今朝から一文も云々」頗るあはれ
「吉原」は駿河國富士郡にある海道驛次、
「年寄の止しにせい」は年寄だからとて、止さな

今夜は夜越に行く。サ、そこがお慈悲でござります。と頼かけられ是非なくも。「サ、そんなら吉原迄何ぼちや。エ、お前様もわたしは頼で持のちやもの。好い程に下さりませ。サそんならやらしやれ。年寄の止しにせいでの。そんなら持たして下さりますか。エ、忝い。サアお出なされませ。ヤツト任せは聲計り一肩往ては立留り。」ヤ今日は結構な天氣ぢやなア。ヤツトまかせ。二肩往ては息を繼。旦那申し。向ふの立場に鱈の名物がござります。ヤツトまかせ。と杖する度に追従口。荒田に下りし白鷺の。餌嘴みをするにとならず。見るに氣の毒。「コレ親仁殿ちつと持てやりませうか。ア、それくく。あぶないく。イエく勿體ないく。ア、氣の毒な足元。最前から見て居るに。氣しんどでならぬ。是はわたしが足の癖でござります。旦那のかげで。今日も内入がよござります。モウこなたも幾年ち

くて。
 「旦那」はもと梵語、施主と釋す、これより轉ぜしなり。
 「ふげ田に下りし白鷺の云々」よく譬へたり。ふげ田は深田の古語、荒田と書きしは當字なるべし、
 「氣しんど」は心苦しの意「きつい」はひどい
 「滅相」の語は、もと佛典より出づる由、和訓栞にいへり
 「しんどが利になる云々」其道の人々に問合せたれど詳ならず、筆を面白くあやなして書けるなるべし、前後より推すれば「駄賃が貰へまいか」との意なるが如し、なほ自考あれど、疑しければ記さず、心得の方あゆば、御教示願ひたし。蒔蒔を「こんやく」とよむは

や。七十に手がとゞいてござります。ア、ソレ／＼。合點
 の行ぬ足取。お氣遣ひなされますな。若い時は小相撲の一番も
 取りました。ヤットまかせとな。といふ下道の爪先上り。木の
 根に躓きひよろ／＼。見やしやれ。エ、苛い事をしたの。
 親指の蹴かいたか。ヨシ／＼早速に癒してやろと。用意の藥取
 出し。付ると其儘。「何んと如何ぢや。痛は止るが。コレハ結構
 なお藥でござります。痛はとんと癒りました。サア／＼お出な
 されませ。イヤコレ／＼。荷はおれが持てやる。旦那様滅相な。
 イヤサ駄賃はやる。氣遣ひさしやんな。此方の足元。最前から
 浮雲ふて／＼。荷を持方がやつと氣樂な。咄しもつて行ませう。
 サア／＼ござれと先に立つ。平作は千鳥足。しんどが利に成る
 蒔蒔の。砂に成るかと思しさに。小腰屈めて。申し旦那。一肩
 やりませうかい。イヤ／＼是で大分歩行よい。ア此方の足元。

[illegible]

とて、色白く枝葉菊に似て
香氣あり、世間多く臺だち
たる嫁菜の花を稱するは誤
れり、

「世話」の語はせわし(忙)
より出で、世話とかくは當
字なりと、

「尾羽」をお葉といひて
「打枯れし松影」とつづけ
「伴ひ入るや西日影」とかけ
たり。尾羽うちかれし」ば
零落れてみすばらしきない
ふ、もと應より出でたる語
なりと。

「門の柱に印しの笠云々」小
さき住居の狀、いひ得て妙、
「親父の馳走娘の愛云々」
愛と藍との二字に調をと
のへ「薄くとも」といひて
「お茶一つ」とつづけたり妙
味ふべし
「こぼれかゝりし藜屋葺」
よくいひたり、藜に笑を含

たいのふ。ハイどなたも左様におつしやります。自慢で作つて。
置ましたれど。近頃は手入が悪さに。いかふ田地が荒ました。

何が身に構はず賃仕業。貧乏は苦にもせず。それはく孝行に

してくれます。それで私が年寄ての蜘蛛助も。せめて三文なと

肩休めと。餘り彼女がいちらしきでござります。コレ父様。始

めてのお方に其様なさもしい咄しを。ホンニさうぢや、ハハハ、

ハハ。イヤおよね。今日は大きな怪我を仕てな。コレくく

は見よ。爪が起てある。ア薬もあれば有ものぢや。彼方様の薬

きつい妙薬。ありや何と申す薬でござりますへ。此薬は大切な

い物。第一金瘡には。其場で治る妙薬。武家方には尋ねれ共。

金銀づくでは手に入らぬ妙薬と。語れば娘は猶ほたく。「父様

の命の親。一日や二日で。お禮は言ひも盡されず。ならふ事な

ら。今宵は爰にお逗留遊ばして。「ア、娘何言ふぞい。こんな内

めり
「せうなげに咲いた杜若」
はあばらやに出来た美人の
意、美女を杜若に比喩ふる
こと多し「よい床へ」とは誰
も思ふべし、名句、せう
なげは大阪にて流し尻のど
ぶないふ、もと「せうらぎ」
が「せうなぎ」に轉じ、更に
かく轉じたるにて、下水ど
ぶなどのことなり
「自憐に作つて云々」 杜
若の語をうけていへり、頗
るうまし
「さもしい咄し」 はみすば
らしき咄し、もと「さびし」
の轉なるべし
「金瘡」 はきりきす
「ほたく」 は愛敬づくる
狀
「虱より外身に云々」 面
白し
「しなつこらしう」 はしな

に泊まして。肴は干鰯が一疋なし。虱より外。あなたの身に付物
はない。イヤ／＼不自由は仕付て居ます。娘御が彼の様に。し
なつこらしういはしやるので。何うやら爰に根が生た。大事な
くばいつそ泊て貰ふかいと。目の鞘拔し商人も。上手な娘の饗
應に。ころりとなればお枕と。油氣はない眞身の馳走。是も一
樹の笠舎り。尋る軒の目印宛に。内に入り。「旦那是にござりま
すか。サお立なされませんか。ホ安兵衛か。早かつたく。其
方は其荷物を持て。吉原の鍵屋で宿を取りや。日和が知れぬ。
早ふ行や。雨具の用意は吉原の。鍵屋をさして急ぎ行く。お米
は立て門の戸を。引立んとする所へ。平作殿内にかと。ぬつと
這入は。原の町の古道具屋。「エイ市兵衛様。御苦勞によふお出
イヤ此方も商賣づく。昨日此方の言しやるは。急な入用錢三貫
道具諸式を。値にして取てくれといふことなれど。代物見てか

やかにやさしきないふ
「根が生えた」動さ得ざる
ないふ

「目の鞘わけし」はわけ目
なきないふ「目の鞘はつす」
といふに同じ

「油氣はない」はつやをつ
けぬないふ

「樹の笠舎り云々」雨
やどりを「笠宿り」といひか
へて「尋ねる軒の目印」と

つづけたたり「一樹の陰の雨
宿り」これ白拍子の謡ひ出
でたる句なりと、後にいふ
べし

「用意は吉原」とかけた
り

「吉原」は駿河國駿東郡に
ある海道の驛次、沼津の西
一里廿餘町、

「駄賃を出して合はぬ」
さもあるべし「放しにくい
佛壇」老人必ずこれないふ

らのと。手附に三百進しんぜて。残りのこの錢持ぜにもちて來た。駄賃だちん出して
は合あぬ仕事しごと。値ねが出來たら。此方こなた様が荷になふて來て下くださるか。時とき
にと。道具どうぐといふは。見え渡わたつた此通このとほりか。こりや聞きたとはき
つい相違さうゐ。マア。第一だいいち。放はなしにくいと云いはしやつた故ゆゑ。見込みこみ
思おもふた佛壇ぶつだんが。こりや百ももが物ものはかない。デモマアちよと置おて見み
よ。二つ土竈つちい。鍋釜なべかまかけて。百二十ひゃくにじゅうと入いれい。古疊ふるだいま八疊はつでうで三百よ。
鼠入ねづみいらずの膳棚ぜんだん百五十文。流盤はりりは役やくに立たぬ。是これ十六文。破障子やぶれしやうじ
一枚まい十二文。縁ふちの取とれた角行燈かくあんどう八文。大略あらましこんな物もの。家いへぐち毀こぼ
つても壹貫いっくわんが物ものはない。といふて手附てづけの三百は飛とんで仕廻しまてもう
有あまい。御推量ごすいりやうの通とほりでござります。仕様事せふことがない。此疊このたみまく
つて往いなう。コレ若わかいの。そこ退のいて貰もらひましょと。疊たたみはたぐ
上げかける。「申々御尤ごもつとなれど。今夜こんやの所ところを御了簡ごれうけんと。親子おやこが詫わづ
る氣きの毒どくより。ひよんな所ところへかゝり合あひ。コレ道具屋どうぐや殿どの。わしは

「物はか」はものほか
「二つ竈鍋釜かけて」

面

白し味ふべし

「はしり」は流し

「家ぐち」は家ぐるめ

「煤拂にお茶屋」のたとへ頗る上出来

「ちと多けれど」 虫のよき男

「まん」は巡、仕合などの意

「貧乏神」は其家を貧しくするといふ神、繪に濫團扇をもてるは、濫き意を寓せるものか

「箒でお上槌て庭云々」

箒柄などは、貧乏神を追ひ出す道具、今も卯槌て柱をたゞき、此神を拂ふことあり、又頭をびよこ／＼下げゐるを、槌で庭をうつといふ藁の出ぬ前はぼろの出ぬ中槌をうけて藁といひたるな

今夜泊つた客。是は難義な所に泊り合した。とんと煤拂に茶屋

へ往た様な。どうで埃はかづかにやならぬ。手付はわしが返し

ましよ。疊は此儘置いて貰ふと。奇麗に捌く貳朱一つ。是は結

構な旦那殿。ちと多けれど。爰迄來た賃。次手に疊も引直し。

まん直しに平作殿。貧乏神の居ぬ様に。箒でお上。槌で庭。藁

の出ぬ前お暇と。躓き廻つて立歸る。親子一度に手を合せ。忝

い共面目ない共。嬉しいと術ない涙が。混交に成て。お禮の詞

も出ませぬと。破れ疊に喰付けば。「ハテ今のは宿錢。高で知れ

た親子の世帯。家財を賣代なさうとは。よく／＼差詰つた。難

義な事が有るのでござんせう。いとしや。苦勞さつしやるの親仁

殿。此娘御より外に。もう子供衆はないかいの。ハイ此お米が

上に。男の子が一人有たれど。二つの年。養子に遣ましたが又

其親の手を離れ。今は鎌倉の屋敷方へお出入。よい商人に成て

り、かれこれ取合せて、巧に書きたる句なれば、注意して見るべし

「こんせう」はござんせう
「外はもう子供衆云々」

事情かく問はざるを得ず、問ひて驚かざるを得ず、

「立派になつたから」思ひ切つた」とは、平作老爺が

物がたき氣質、賞すべし
「かたし」は一本の意

鎌倉八幡宮 は鶴岡八幡「氏地」げ氏子に對して

神の鎮守したまう領内をいふ、

「守り袋」は守り札を入れる袋、これに父母の名己が

生年月など書き入れてた

「今日が命日」 此命日にめぐり合はしめたる妙

「水手向花の立方云々」昔しは仕入れし娘なるを知

居るとの噂。それ聞てとんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。

ハテ一旦人に遣たれば。捨たも同然。我子ながらも義理有るもの。

今其躬が身上が好いとて。尋に往て。箸かたし貰ふては。

人間の道が濟ませぬ。今出逢てもあかの他人。子といふは此娘

一人。ム、それも尤。其兄貴は今幾歳位ぢやの。ハイ斯うツと

恰當今年廿八。鎌倉八幡宮の氏地の生れ。母の名は豊と書付。

守り袋に入れて遣ました。其後此お米を産で。母も相果。則今日が命日で、孝行な娘が水手向。花の立方御覽じやつて下さり

ませと。何心なき咄しの合紋。一々胸にこたゆる十兵衛。思ひ

合せば覚え有る。扱は産の親父様。血を分た我妹が貧苦の有様。

有合せた路用の金。なま中親子と名乗ては。受ぬ氣質を何とが

な。金の遣たい屈託に。胸を痛て。「コレ親仁殿。何んと物は相

談ぢやが。此娘をわしに下されぬか。コ、奉公に上ますのか。

る
 「合紋」は符合の意
 「屈託」は困りわづらふな
 をいふ、屈辱又屈著など書
 くが、正しとりへど詳なら
 ず、
 「利發」は恰爾發明の略、
 「上々の羽二重」これ英
 服屋十兵衛のほめ詞「呼び
 迎へる日限は云々」いひや
 う頗るうまし
 「あのお方もういなして」
 お米急に一變す
 「あだなめすさた」はみく
 びりすきだ、あたは思みに
 くむ時添ふる語
 「我が」は汝かの意、一人
 稱を二人稱に用ふるは、淨
 曲作者の常
 「能ふ親切に惚れさしやつ
 て」「ゆるりとちどこまつ
 て」「主ある池へ云々」にも
 いへぬ妙句

イヤイヤまだ女房のない男。利發な娘御。商人の鼻には。極上
 々の羽二重地。得心して下さるなら。仕拵へはこつちから。旅
 商人の事なれば。呼迎へる日限は。未だ何時共定められぬ。嫁
 入の拵へ料。爰に少々持合す。是置いて往きます。得心かい
 の。如何でござんす。コレよい女房。面目ないが最前から。わし
 や此方様に惚たわいのと。しなつきかければ。ついと退き。「父
 様。彼のお方もう往なして下さんせ。いかに貧しう暮して居る
 迎。あだ蔑め過た。阿呆らしいと。打てかはりし腹立顔。「エ、
 嗜め。よい女房。と云はれるが。何の夫れ程腹の立つ事。我が
 嫖致がよい故ぢやと。おりや嬉しい。イヤ申し貴方様。能ふ御
 深切に惚さしやつて下さりました。ジャガ此お米は女房といふ
 てはやられぬ譯がござります。ム、そんなら御亭主が有のか。
 是は。イヤ實は只今のは眞の座興。主の有る人共存ぜず麗

「在所者」は田舎者

「伽にし」ては相手にして
「辻堂の雨舎り」小さき家の
たとへ御燈をうけて書けり
「どんざ」は籠かきなどの
着る、厚き絆纏の如きもの
「主のある池」をうけて
「用心には網」といへり、諺
に「用心に縄張れ」

相申た。眞平御免に預りませう。コレ娘御。機嫌直して貰ひま
しよ。アノ痛入たお詞。ほんに思へば在所者を。おなぶりなさ
るを眞受にして。お耻かしやと莞爾と。笑ひに心打解て。咄し
に紛れてすつぷりと。日の暮て有るに氣が付なんだ。「三日月様
が上つてござる。好い月夜で行燈は入らぬ。御燈明を伽にして。
辻堂の雨舎り。お客様も最うお休。足延すと壁につかへる奥座
敷。緩りともぐかまつて御寝なりませ。私は此臺所。ユリヤ娘
は。其方に寝い。旦那様はお堅いけれど。時のはづみでは。主
の有る池へ踏込なさりよも知れぬ。用心には網を張れじや今夜
はおれが股引をはいて寐や。寒けれど彼方には。わしがどんざ
を裾になと。追風もてくる鐘の聲。いとしんくと聞えける。

伊賀越道中雙六

沼津の段切

「秋の螢と消ひ残る」身の上と燈火とにかゝれり、秋の螢は光をとるへて、物すこきまであはれなるもの、溪琴の句に「燈火微、人影稀月露看猶滴、流螢落又飛」を「ふつと消ゆる」を「氣のつく」とかけたり「天の與へ」取らざれば其殃を受けん「印籠」はもと印を入るゝもの、今藥を入れて印籠と稱するは違へり、藥を入れるゝは藥籠なり、なほ別記を見よ、

「情ない氣に云々」此場合平作が、實の盗みと推せしは無理ならず、

沼津の段切

お米は一人物思ひ。心にかゝる夫の病氣。我手で介抱する事も浮世の義理に隔られ。秋の螢の消殘る。佛壇の灯もほそぐと。嵐にふつと氣の付く娘。「奇妙に治つた父様のあの疵。今でも敵の手がゝりが知てから。あの病氣では思ひも寄らず。ム、と心で黙頭。胸をする。灯の消たるは天の與へ。夫の爲と。拔足し足探り寄。印籠取上立退く足。躓く音に目覺す十兵衛。思はず高聲何者と。裾を捉へて引とむれば。わつと泣入る娘の聲。平作も恟りし。起上つても眞暗がり。お米く。と云つゝ探す竈の埋火。付木にうつし顔見合せ。「娘ぢやないか。旦那様か。何故に此有様。」エ、何の因果で此様な。情ない氣に成たぞいやい。コリヤ此親は。其日暮しの者じゃけれどな。人様の物を直

「介病」は病氣介抱の意なるべし、聞きなれぬ語、

「才覺」は工面の意

「我身の瀬川に身を投げて」

なか盗もと。思ふ氣は出さぬはいやい。エ、親の顔迄穢しおつ
たと。わつと計りに泣居たる。十兵衛は氣の毒顔。一金銀を取た
といふではなし。是には譯の有さうな事と。問はれてお米は顔
を上げ耻かしながら聞て下さりませ。様子有つて言替せし。夫
の名は申されぬが。わたし故に騒動起り。其場へ立合手疵を負
一旦本復有つたれど。此頃は切りに痛み。いろく介病盡せ共
効なく。立寄方も旅の空。此近所で御養生。長しい間に路銀も
盡。其貢に身の廻り。櫛笄迄賣拂ひ。最前もお聞の通り。悲
しい銀の才覺も。男の病が治したさ。先程のお咄しに。金銀づ
くではないとの噂。燈火の消しより。アノ妙藥をどうがなと。
思ひ付しが身の因果。どうぞお慈悲に是れ申し。今宵の事は此場
切。お年寄れしお前に迄。苦勞をかけし不孝の罪。今日や死ふ
か。翌の夜は。我身の瀬川に身を投てと。思ひし事は幾度か。

とかけたり、お米は瀬川と名乗りて、吉原に全乗を極め、志津馬と深く契りしなり、瀬川は吉原松葉屋の名妓にして、評判高ければ取りて作れるなるべし、二人ありて、一は奈良の者、亡夫の仇を討てり、一は下總の者、書畫を善くし、常盤津文字太夫を耻かしむ、なほ別記を見よ

「東青ち」は氣丈なり。意氣地は達引の意

「心の目算」十兵衛よく讀めたり

太夫」は最上なる遊女の稱、原本洞房語園に「太夫名目は京都より始る、其の上の名なり、慶長頃まで、遊女共小舞亂舞をなし、一年に二三度づゝ、四條河原に芝居を構へ、能太夫舞太夫、皆傾城が勤めしなり、

死んだ跡でもお前の歎きと。一日ぐらしに日を送る。どうぞお慈悲に御了簡と。東育ちの張もぬけ。戀の意氣地に身を碎く。心ぞ思ひやられたり。歎きの端々つくぐと。聞取る十兵衛「コレ姉御。そんなら此方さんは。江戸の吉原で全盛の。松葉屋の瀬川殿ぢやの。ハイテモ能ふ御存じ。すりや瀬川殿の夫の爲に。ムウ。と心の目算思案を極め。イヤ太夫殿。夫の手疵を治す藥ほしいは尤。それ聞ては進ぜたい物なれど。是は人の預り物。此事は意ひ切らつしやれ。今此方衆の咄しの通り。わしも又恩を受た。サ其恩を受た人の爲に。いづれの寺でも苦しうないが。石塔一つ寄進が仕たいが。何と世話して下さるまいか。夫れは御奇特。結構な寄進でござります。何時なりともお世話致しませう。私も來年は鼻が年忌。勸むる功德共に成佛とやら。是非お世話致しまするでござります。どうぞ今度の下り

自ら傾城の總名となりける
と見ゆ、

遂に親父の氣に合ふやう

「石塔の密進」 と出で金を與へんとす、仕方どこまでも妙

「奇特」 は感心

「二物、荷物」 調を合す

「水入らず」 は親子など親しき中をいふ、俚言集覽に

「此は親しき者の中に、跡き者の間雜するを、油に水のまじりたる如しといふ、それにうち反して、親しき者ばかりの集會をかくいふ」

「此印籠、此書付」 いか

に驚きし、

迄。違はぬ様に頼みます。兼ての願ひに。書付も此内に委しう

ござると。金一包取出し。「コレ必ず頼んだぞや。親子の衆。最

早夜明に間もなし。随分無事に親仁殿と。立出れば平作も。

必お下り待まする。姉御さらばとばかりにて。心に一物。荷物

は先へ。道を早めて急ぎ行く。跡に親子は顔見合せ。金取上て。

「コレおよね。随分大事にかけておきや。夜明迄は間も有る。和

女も休みや。と水いらす。見廻す傍に落たる印籠。「ア、是は今

の旦那のぢや。定て尋てござるで有ると。云にお米が手に取て。

此印籠。はどうやら覚えの有る模様。ハテ合點の行ぬ。それか。

是か。とよく々眺め。「ホンニそれよ。こりや澤井又五郎が。

常々持し覚えの印籠。ハテ不思議なと平作も。金取出しよく

見れば。「金子三拾兩。此書付は鎌倉八幡宮の氏地の生れ。稚名

は平三郎。母の名はお豊。コリヤコレ。我子に付て置た書付。

「理を非に曲げ」 ては無

理にの意

「どの様な事があつても云々」 己に死を決せり

「拔道なと子故に迷ふ三惡道」 子ゆゑに命を捨てに行く拔道、これ即ち三惡道、よく書きたりの三惡道は地獄、畜生、餓鬼、の三道

そんなら今のお方は。我が爲には兄様。ナ、我子の平三で有たかい。そんなら最前からの深切は。それとはいはず此金を。貢でくれた石塔代。不思議の縁と親と子は。暫し呆れて居たりしが。お米は印籠手に取て。裾端折て駈出す。「コリヤ待て娘。コリヤどこへ。何處へとは父様。此印籠を持て居る。其兄様は敵の手がゝり。追かけて又五郎が所在を尋ね。志津馬様へ。尤ちや尤ちやが。我ではないかぬ。年寄たれ共此平作。理を非に曲て言はして見せう。我も續いて跡から來い。どの様な事が有てもな。必出るなよ。敵の所在聞く迄は大事の場所。木影に忍んで立聞せい。必とも鹿忽すな。合點か。北海道は廻り道。三枚橋の濱傳ひ。勝手覚えし拔道をと。子故に迷ふ三惡道。轉けつ轉びつ走り行く。跡にお米は身拵へ。續いて出んとする所へ。折柄來かゝる池添孫八。「瀬川様か。孫八殿。好い所へござんした。今夜

爰こゝに泊とまつた客きやくで。敵かたきの手筋てすぢが知れさうな。詮議せんぎの爲ために吉原迄よしはらまで、爺と。

様やうが行ゆかしやんした。イヤ忝はづかない。シテ其行先そのゆくさきは。吉原迄よしはらまではよも

行ゆくまい。何角なんかくの様子は道みちにて聞きんと。瀬川せがはに續つづく池添いけぞみも。足あしに

任まかせて。「したひ行く。實じつに人心ひとこころさま／＼に。町人ちやうにんなれ共ども十兵衛じへいゑ

は。武士ぶしも及およばぬ丈夫じやうふの魂たましひ。夜深よふかに立たちし獨旅ひとりたび。千本松せんぽんまつにさしか

ゝる。ヲ、イ／＼と。杖つゑを力ちからに息いきすた／＼。「申し／＼旦だん那樣なさま。

ヤレ／＼お早い足元あしもと。フウ今呼いまよだは此方こなたか。惶おはたずしう何なんの用よう。イ

ヤ只今ただいまのお金かねを戻もどしに參さんじました。石塔料せきとうれうと名なを付つて。大枚だまいの

金子三拾兩きんす さんじふりやう。其日暮そのひぐらしの蜘蛛助くもすけに。下くださるにも譯わけが有ある。又請またうけま

するにも譯わけが有ある。けれども此金このかねを請うけましては。さる人ひとが立たた

ぬ義理ぎぢがござります。是これをお返かへし申まします代かはりに。貴方あなたにお頼たのみ

がござります。お聞きなされて下くださりますか。ハテ一夜ひとよさ泊とまつるも

何なんぞの約束やくそく。様子やうすに因よて頼たのれまい。物ものでもない夕闇ゆふぐみの。夜よの

「丈夫の魂」 は男らしき

氣性

「千本松」 は沼津の海岸

にあり、駿河灣を見晴らし
て風景頗るよし、

「大まい」 は多額の金に

いふ語、もと餅銀より出づ
と、後にいふべし

「物でもない夕闇の」と
かけたり

「固唾を呑む」は氣を凝し居るにいふ

「流勞」は流浪、艱難の意

「廊」は女郎町の稱、色道大鑑に「曲論とも書く、廊の一字をも、くるわとよむ郭とも書く、城郭の心なりいづくにても、傾城町のいかまへを、くるわといふなり」
「蜘蛛助が手に叶はぬ云々」よくいひたり、あはれなり

「血筋と義理の云々」血筋の情と義理との二道を分けて頼み、とり分け血筋の愛着に迷ふといふ意、名文味ふべし。道分石は分れと

聲しるべ。跡より窺ふ池添瀬川。片唾を呑で聞居たる。「シテ其頼の様子は。ハイ仰つて下さりませ。此印籠の主の所在を。承はりたうござります。是を尋て知たい計に。さまぐの流勞致す人。それ故娘も廊を出て憂難難。是が知れると本望成就。娘につれて私迄」サ、サ、サ、此上の悦びはござりませぬ。二拾や三拾のはした錢で露命をつなぐ私が。死る迄安樂に暮される程の三拾兩。其金銀にかへてのお願ひ。七十に成て蜘蛛助が。手に叶はぬ重荷を持。それはまだ休みもする。子の可愛ひといふ重荷は。寐た間も休まぬ「一生の。苦痛を助る藥の名。お前様も親御が有れば。子故には愚痴に成る物ぢやと。思し召しやられて。願ひを叶へて下さりませ。コレ申し旦那様と。血筋と義理の道分石。わけて血の緒の三界に。踏迷ふこそ道理なれ。親の心を察しやり。「ム、左様有らう。心底至極尤ぢやが。是計は

に立てたる、道教への石。
血の緒は血筋。三界は佛語
にて、欲界色界無色界の事
なれど、こゝは輪廻又愛着
などの意、

「男づく」は男の意氣地
「心の掛籠一重明けぬ」さ
とるに任せて蓋明ても、義
理の爲めは一重はづさぬと
は、よくいひたり、面白く
書きたり、

「藥の持主」と問ひかけ
られて「其病人とは大敵藥」
との答へ、頗る妙「此持主
の名をいへば云々」道理あ
るさとしに、二の矢はつけ
ず「さう聞きまして云々」の
答、これより外にいでざる
べし、こゝ對談の呼吸上々
の出來

どうも云はれぬ。おれも頼れた男づく、其方の人が大切なら此
方にも又大切。譬へ又所在を聞ても、命がなふては本望は遂ら
れまい。其方の内に落して置いて。主のない印籠の。其妙藥で疵
養生。達者に成た其上では。望の叶ふ時節も有らう。親仁殿。
サア左様ぢやないかと心の掛籠。一重明けぬ十兵衛が情の詞。
サ、それ程御慈悲の有るお方。迎ものとなら其藥の持主。イヤ
サコレ。悪い合點。此藥の持主は。其病人とは大敵藥。三拾兩
の其金。敵の恩を受まい爲。戻したではないかいの。此持主の
名をいへば。敵の藥で疵本復。恩を請てはまさかの時。鈍が鈍
らうぞや。矢ッ張拾ふた藥にして。心措なふ養生さしたが。よ
さうに思はるゝと。聞て平作感じ入り。エ、さうちやあつた。
エ、お前様は。恐ろしい發明なお人ぢやの。左様聞ましては。
申し様もござりませぬ。左様なら。もう。歸りましよ。旦那様

「泣く音とむる響（ロ）虫云々」とかけたり、場合にかなひて面白し

「子故の闇も二道に」

おさらばと。云つゝ探つて十兵衛が。脇差拔取。腹へぐつと突
立て。「ヤアくく。何としたく。コリヤ自害か。何故に。
誰を恨で。勿體なやとろうく。涙。驚く娘。聲に手當る池添が。
泣音とむる響虫。草に喰付き泣く計り。平作苦しき目を睜き。
俺や此方の手にかゝつて。死るのぢやはいのく。ハテ此方と
俺とは敵同士。志津馬殿に縁の有る。此親仁を殺したれば。頼
れた此方の男は立。コレく。此上の情には。平作が未來の土
産に。敵の所在を聞して下されいの。外に聞く者は誰もない。
今死ぬる者に遠慮は有るまい。不思議に始て遇た人。如何した
縁やら。我子の様に思ふもの。何の此方に。引氣取らす様な事
此親が。「サア此親仁が致しませうぞ。是が一生の別れ。一生の
頼み。聞ずに死では迷ひますはいのく。コレ拜ますく。旦
那殿と。子故の闇も二道に。わけて命を塵芥。須彌大海にもま

人には死して義理を立てさせ、一人にて敵の在所を聞きて、義理を立てさせんとす。分けて命を塵芥よくつづけたる。

「須彌大海」は恩の深高なるをいふ。

「どに誰か聞いて云々」十兵衛さといれり。

「相良」は人吉のこと。肥後國球磨郡中央にある一都會にして、熊本を去る南二十七里餘、同地の人今なほ又五郎ゆ、落ち来る筈なりし由語れりと、別記を見よ。

「吉山」は今の豊橋、三河國渥美郡にありて、豊川に沿ひ、東參第一の都會なり。

「智識」は徳高き僧。引導は死者を冥途へ導くといふ僧の偈。

「十念」は淨土宗にて、念佛を十遍授けて、結縁せしむることなれど、只念佛の意に見よかるべし。

「小石を拾ひて白刃の金云々」又小石を當てて火の出すをいふ。彌八が機轉の情けに、稻妻のちらりと見しが、親子一世の別れとあばれにもはかなし。

さつたる。誠の親に始て逢ひ。名乗もならぬ浮世の義理。孝行

の仕納め。何處に誰が聞て居まいものでもなければ。十兵衛が

口からいふは。死で行く此方様へ餞別。今際の耳に能ふ聞つし

やれ。又五郎が落付く先は九州相良。道中筋は參州の。吉田で

逢たと人の噂。エ、忝い。アレ聞たか。イヤ、誰も

ない。聞たは此親仁一人。それで成佛仕ますはいの。名

僧知識の引導より。前生の我子が介抱受け。思い残す事はない。

早う苦痛を留て下され。親子一世の逢初の逢納め。「親仁様。兄。

エ、顔が見たい。顔が見たいわい。南無阿彌陀佛。

南無阿彌陀佛。と唱ふる十念十兵衛が。堪へ兼ねたる悲

歎の涙。始終窺ふ池添が。小石拾ふて白刃の金。合す火影は親

子の名殘。跡に見捨て。三重別れ行く

伊賀越道中双六

新關の段

「藤川」は三河國額田郡にあり、岡崎の東南二里、東海道の一驛なりしが、今頗るすたる、芭蕉句あり「こゝも三河かむらさき夢のかきつばた」石に刻みて驛の西端に建つ、新關などの事は聞及ばず、とも幕府領なりしゆゑ、人民頗る威張れりと、
「人はいへど影の郷」
人ごとといへば影がさすといへる諺より書けるなるべし影の郷は間の宿といふ程の意なるべし
「内證は白齒の娘」 清淨
無垢、
「水の出花や云々」 色香
味ふべし
「佛をだしに」 かゝるやか

新關所の段

藤川の新關と。人には云へど影の郷。一村籠る松影に。茶屋の娘のお袖とて。芳紀は二八の跡や先。また内證は白齒の娘。雪氣厭はぬ寒空に。水の出花や煎じ茶の。佛をだしに參詣人。黒谷の上人。鎌倉へ下向の道。山中の法僧寺に今日で三日の御逗留。御符御札のお底にて。啞が物云ふ聾が治る。塞のお祖母が禮參り。御禮參りの三人が。茶屋の床几に腰打かけ。何と太郎兵衛。きつい人群集の。扱皆聞しやれ。御符のお底で奇妙な事がござる。吉田の宿の搗栗屋といふ炭屋の子が。疱瘡で目が潰れ。何が一人子の事故。夫婦の衆が發心して。罪亡しに西國に出る所へ。上人様の御立寄。何か御符を戴くやら。聞しやれ。其夜から目が明ましたといの。それから吉田中がひつくりかへ

ら多かるべし

「黒谷の上人」 黒谷は京都

名、高きより取用ひたるな

「山中の法僧寺」 は法藏

寺なり、藤川の東一里にあ

り大寶元年行基菩薩の開基

にして、法相宗なりしが、後

淨土宗となる、徳川家康公

幼少の時、此寺に寓にして

書讀を學ばれしと、其用ひ

し机、草紙かけの松等あり

其外寶物頗る多し、今殿堂

寺域、見る影もなく擁護せ

り、なほ別記を見よ

「御符」 は御札の事なれ

ど、後に「嶋の焚た御符」と

あれば、御供（神よりいた

ぶく洗米の包み）の意にい

へるが如し、されど寺院よ

り御供を出す事もあるまじ

ければ、かた／＼をかしく

おもはるれど、かゝる事は

し。山中が泊り故。毎日の參詣人。有難い事ではないか。ハ

テそりや其筈いの。炭屋の子なら。黒谷様に御縁が有る。ハ、

、。こちらも往で縁の有る。鼻が焚た御符をば戴きませう。

と打笑ひ。我家／＼に歸りける。父の教を守らざる。其罪科の

降積る。雪氣の空も厭ひなく。姿を扮す和田志津馬。敵の行衛

知れされば。空しく過る光陰の。矢竹に心關所前。「コレ姉様。

最前より此茶店で。待合す體の人は見えなんだか。イエ／＼左

様なお方は見受ませぬ。然らば暫し。と腰打かけ。「姉様、此遠

目鏡は往來の慰みか。イエ／＼慰みではござりませぬ。わたし

が父様は。此關の下役人。若切手なしに拔道を通る人が有らう

かと。吟味の爲の此目鏡。と聞て志津馬が心の當惑。差當つた

切手の用意。ハテ如何がな。と思案顔。お袖は一心志津馬が

顔。テモ好い男と思ひ初。言たい事も娘氣の、口へ出兼る茶の

作者の常にて、かまはざるべし

「吉田」 は今の豊橋、豊川の南岸にありて、岡崎を去る東西八里、昔より驛次にして、岡崎と共に國內の二大都邑なり、舊松平氏（大河内）の城下「西國」 は三十三ヶ所順禮

「鼻の焚た御符」 とは飯

のこと、うまく晒落たり

「父の教を守らざる云々」

志津馬酒色に溺れ、父友人の諫めを用ひず、奸悪なる

又五郎を友とし、遂に家傳の重寶正宗の名刀を質入れ

し、これがため又五郎に、父を討たるゝに至れるなり、

「光陰の矢竹に心關所前」

よくかけたり、光陰は矢の如し。矢竹は一筋の意、

「鉢」 は様子の意、

花香。顔を眺めて汲む手元。脇へ流すも氣もそゞろ。茶碗計を

手に持て。差出す心の思はくは。汲で知れかし目遣ひも。相手

に藝氣が有ればこそ。「是はきつい御馳走。餘り茶に福が有る。

然らば今一つ。迎もの事にほんまの茶を。いくつもく呑たい

と思はぬお茶の捨詞。お前故なら何度でも。入花を上たいと。

何と言寄る方もなく。顔は上氣の初紅葉。男の潔粹一森に。戀

の出花と見えにけり。志津馬も扱はと心付。我に心をかけしこ

そ幸。切手の手がゝりと。心で黙頭きすり寄て。「コレお娘。頼

たい事が有る。何と聞てくれる氣かと。思ふた壺へ和らかに。

云かけられて返答の。詞に詰るが女子の情。何と返事の云様も

わたしもお前に頼が。カどの様な事なりと。頼むと有れば引は

せぬ。エ、忝い。わたしもお前故ならば。何の様なお頼でも。

厭ひはせぬと。寄添ば。「それ聞て落付た。何を隠さう我身の上

「切手なしに拔道」 昔關

所の手形なく、間道によりて拔道せし者は、捕へて法に處せしなり、

「言たい事も娘氣の云々」

茶につきて娘氣をよく寫したり「弄出す心の思はくは汲んで知れかし」の語最も妙

「相手に藝氣のあればこそ」

志津馬大に藝氣あり故に事容易になる

「餘り茶に福ある」 節

分の時、茶の釜に豆を入れこを汲あてたるもの、福ありといへるよりの諺なるべし、

「いひかけられて返答の」

川柳に「くどかれて娘は猫にものないひ」

「袖は人目の關の門」 と

かけたり、

「暮六つ」 は今の午後六

今夜中に此關を通らねば。我一命にかゝる事。こなたの覺えし

拔道を。何卒教へて貰いたい。死でも忘れぬ。コレ頼むと。色

で仕かける我身の大事。じつと締むれば締めかへし。耻しいや

ら嬉しいやら。抱付てはしめかはす。袖は人目の關の門。「暮六

つからは通路ならず。それ迄に私が働き。若間違へば。わたし

がお供し立退ん。必氣遣ひ遊ばすなと。思ひ合たる他生の縁。

二人が望は二道の。一筋道を急ぎの道中。状態刀に括り付。通

りかゝればお袖は呼留。「お飛脚様お休みと。いへば奴が立どま

り。「呼かけられて姉様に。耻かゝしてよいものか。まだ八ツに

は間も有れば。一ぶくせいと。腰打かけ。「ヤレくしんど

や。申しお客様。御免なされと。いへば志津馬も何氣なふ。お

飛脚はどれからお立。イヤ下拙は鎌倉扇が谷の四つ辻切通し。

夜前濱松泊り。日が短くて漸爰迄。と聞くより志津馬は心當り

時、
「他生の縁」 は前生の因縁、佛教の語、
「二人が望は二道の一筋道な」 よく書きたり、志津馬は拔道お袖は戀路、これ二道
「八つ」 は午後二時
「扇が谷」 は相州東鎌倉にあり、
「濱松」 は遠江國數智郡にあり東海道風指の驛次
「白齒娘のお初穂」 誰しも好物
「一目見るより濃茶となつた」 より茶つくしと洒落たり頗る妙、
「もう飯よりも好物だてや」 名は實をあらはすもの、
「目鏡のちやり」 讀者なして噴飯せしむ、頗る上出来、

だまして問んと傍に寄。「扱く早い事。私共は何としてく。
エ羨しい足元と。咄しを機會に茶の出花。一目見るより餘念なく。お袖が傍にぐにやと成り。「コリヤ忝い。白齒娘のお初穂。一口吞ます氣はないか。一目見るから戀茶と成だ「エ、奴殿。惡ちやり置んせ。ちやはくとちやゝ入まい。こちやずつと眞のこつちや。コレイノく。そつちや向くまい。どうちやくア、去とは貴公も。顔に似合はぬやつし方。名は何と云ます。身共が名は助平。イヤもう飯よりも好物だてや。コレサお娘。どう仕てくれる。エ、ちやらく」と。そんな事より此様な。面白物見る氣はないかと。目鏡の傍へ突やられ。助平は差覗きハアコリア面白い。と眺め入り。「テモ大勢人が見える。ハア向ふに見えるは。ア、あれは。おらが仲間の頭だ。コレ頭。何ぞ用はないか。何ちや金比羅様の挑灯も有る。ハテ川が見える。

「切米」・は舊幕時代、身分卑き侍の扶持の稱（知行に對す）扶持米を金錢に換へて渡すあり、
 「尾籠」・は無禮の意、もとゝ（鳴濤など書く愚の意）のあて字なるをびろうと音讀せしなりといふ、
 「澤井殿の御家來」・はわらいとこで名乗りしもの、鳴呼これを憤むこと色にあり

何ぢや。藤屋の二階で客が樂しみよる。ヨゝ味い事く。ハア彼の女は。見た様な。それだく。ヤわりやおきのでないかと。一目見るより血相かへ。ヤ儕はく。ようもおれに退狀おこし其處に樂しんで居るな。コリヤヤイ。云かはした事忘れはせまい。旦那へ願ふて奉公引し。女房に持と思やこそ。春からも一歩遣。三步やり。四歩遣る。女房ぢやと思やこそ。おらが切米打込んで遣たぞよ。コリヤ其折。おらに何と云ふた。お前と夫婦に成て。夜も晝も。樂しもといふたぢやないか。それに何だ。我見る前で尾籠千萬。其男と抱れて寝るか。よくもおらを欺したな。鎌倉で人も知たる。澤井殿の家來澤井助平。もう了簡が成らぬわい。と駈け出せしが。「ハアく今のは何所だ。何んだ何んにも見えない。コリヤどうだと。言ふにお袖がさし覗き。アリヤ吉田の茶屋の二階。爰から一里も有る所。腹立なさるだ

「如何様いへば一理ある」

前の一里に應ず、有頂天涯
實際は五里なり

「耳とう」 は耳のそばに

て、トツと大聲を發する事

にて、よくする戯れなり「聲

に耳とう」は何の感じもな

かるべし

「現」は夢中の意、

「一心不乱」はもと佛語

阿彌陀經に「執持名號一

心不乱云々」

「口中を契る」は口を吸

ふこと、接吻、

「古木の如く鯢張り返り云

々」登りつめたる奴風巾云

々「何ともいば味ひあり、

しやちばりてのつけに倒る

ゝ狀、見るが如し、

「結ぶの神の此切手」句よ

し、結ぶの神は月下氷人な

ど書き、男女の縁を結ぶ神

と稱す、これ神代の産靈の

けが損。もう了簡なされ。如何様言へば一理有る。遠方から悋

氣するは。聾に耳とうするに同じ、とは言ながら殘念と。又差

覗き現に成れば。是幸。扱は澤井の家來よなと。志津馬は邊に

氣を付て。狀箱の封押切。一通奪取。元の如くに直すのも。知

らぬ助平一心不乱。打眺め。「エ、アレ口中を契りをする。こりや

もう勘忍ならないと。お袖が腰を力草。「エ、放して下さんせ。

何と是が放されう。ハアくと。古木の如く鯢張り返り。横に

どつさり朽木倒し。登り詰たる奴風巾。糸目の切しごとくなり。

傍に落たる紙入の。中より出る關所の切手。見るにお袖は飛立

思ひ。嬉しいやら怖いやら。結ぶの神の此切手と。志津馬に渡

せば懷中し。「我身の難義は遁れたが。かうして置れぬ奴殿。コ

リヤ虫腹か癩癩病か。コレ顔へ其水吹かけたと。言ふにお袖は

狼狽て。沸返たる茶釜の茶。天窓へざつぷり打かくれば。恠り

神を俗にむすぶの神と讀みしより出來しなりと、

「生れついて悴めが虫早く云々」

泡瘡子に瘡の虫、時々の號張りには、親父の苦勞思ひやらる、かゝる筆は半二の特色、其妙味ふべし悟るべし、

「七つ」は午後四時、

「南無三寶」は失敗などの時發する語、三寶の加護を仰ぐ意より出たるなるべし、三寶は佛法僧、

「水氣取られし河童奴ふならく」とは頗る面白し、

ふならくは、よろしくしたるをいふ、鮎をかけたるなるべし

「手がゝり白齒娘」とかけたり

「紙乗物」は女中の乗物

氣の付助平が。邊り見廻し起上り。さも苦しげに聲顫はし。「ア

どなた様か忝い。生れ付て悴めが虫早く。時ぐ勃る泡瘡子

に。湯がかゝつて助つた。と咄せば二人は顔見合せ。をかしさ

隠す計なり。時も違へず關所には。打拍子木に助平が。「一つ二

つと指折て。「ム、コリヤ七つの時がはり。大切の此狀箱。一時

も早くお届申さん。關所の切手と。紙入の内を搜せど。「ハテめ

んよふな。南無三寶。跡の茶店で落したか。ドリヤ一走り。と

立出れど。水氣取られし河童奴。ふならくと池水の。泥埃に

逢たるごとくにて。元來し道へ引返す。お袖は跡を見送りて。

此間に早ふと。茶店の道具を門内へ。運ぶ片手に顔眺め。見飽

ぬ目鏡の戀男。志津馬は一心敵の手がゝり。白齒娘が手を引

岡崎「さして歸りける。鎌倉の奥女中。お里歸りの道中と。人

目に見せる紙乗物。關所の前へ昇居る。家來お傍へ立寄て。「お

「兜頭巾」 は俚言集覽に
 「失火焼亡の時、騎馬の士の着る頭巾なり、鉦は羅紗にて、一枚あるは二三枚のかされ鉦あり、金糸などにて繡して、美麗なるが多し」と見ゆ、用心の時かむるものなり、
 「昨日にかはる勢も云々」
 古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵は今日の頼となる」
 「木にも聲にも心置く」 落人薄の穂に憐づの意、
 「無足」 は無駄の意前に解せり、
 「蛇の目の眼入」 名さへをそろし、入股の大蛇なるべし、
 「人喰馬」 は無道の惡者
 「千疋」 は二兩二分

關所で候へば。暫く是より御歩行と。聞くとひとしく戸を開き旅姿に身を扮し。兜頭巾に目計出し。昨日にかはり勢も。淵瀨と澤井又五郎。邊り見廻し。「コリヤ駕籠の者。大儀で有た。是より早く歸てたもれ。林左殿は。何してござるな。あれへ御出でござります。お旦那にはお先へお通りなされませ。ヲ、木にも萱にも心置くは。世話人の志。無足にせぬ我心底。譬我を付狙へばとて。何程の事あらん。見付次第に返討。わいらもちつ共氣遣ひすなと。家來引連れ打通る。此海道を住家とする。蛇の目の眼入。人喰馬に櫻田が。手に入り顔に先に立。「コリヤ蛇目。今咄した事。男と見込で頼むぞよ。何で有らうと。見付次第に合點か。エ、親方。氣遣ひさあんな。此蛇の目が見入れたら。一寸も動かしやせぬ。ハテサテ氣味のよいやつと。紙入より取出し。金子千疋手に渡し。當座の褒美納て置き。エ、忝

「門内さして入相」
けたり、

とか

「うろく眼に助平か」
運のわるき男、

い。馬士に千疋とは。仕合せよしの此蛇の目。何で有らうと見付たら。皆撫にする一と鰐と。祝ふ幸い先林左衛門。晩の泊りで何かの事。牒し合さん。ササ来と。門内さして入相の。鐘諸共に關の門。門はつしとしむる音。宙をかけつけ政右衛門。關所の前へ立寄れば。門戸かためて出入もならず。暮時でわからねど。うしろ姿は林左衛門に違ひなし。スリヤ又五郎を同道に極つた。エ、付込た敵を取逃せしか。口惜やと。顚敵をなして身を悶へ。門内を白眼付け。無念涙にくれ居たる。「チ、それよ。志津馬と爰で出合ふ約束。但し先へ入込だか。何にもせよ出合ふ所は一筋道。今夜中に此關越えねば。最早敵は手に入らぬと。行つ戻りつ思案を極め。兼て聞居る拔道は。慥に竹の林の中。押分行けば川傳ひ。探り廻りし眞暗がり。うろく眼に助平が。是も窺ふ拔道を。すかし見れば雲突く様な大男。恠り

「三角に眼を見開き」 眼
 に角立てるをいふ、
 「山を食する猿松」 猿松
 は罵る語、猿は山に棲むゆゑかくいひたるなるべし、
 「熊手」 は熊の手の如き
 鐵刺ありて、柄を付したる
 捕手の道具
 「逃るを追はず」 これ兵
 法、

驚き身を忍ぶ。探り當りし政右衛門。竹藪押分け忍び行く。とつくと見届け助平が。状態腰にくゝり付。味いゝと拔道の。跡を慕ふて。「急ぎ行。不敵かな政右衛門。天に一命擲て。目ざすもしらぬ眞の闇。降来る雪の道踏分。裏道づたひ一丁計り。行くよと見えしが。關所の内に聲高く。「忍びの鳴子の音するは。裏道を越える曲者有り。と呼はれば。それ遁すなと捕人の人數。兼て用意の高挑灯。人數を配つて取巻しは。危うかりける「次第なり。政右衛門は事共せず。三角に眼を睜き。「山を食する猿松め。皮引はいでくれんずと。大刀引ぬき待かけたり。それ遁すなと組子共。一度にかゝる四方詰。イヤ小癪なと振ほどき。付入る所を宙にて切取。飛くる熊手を受流し。切立く切立れば詞には似ぬ組子共。跡をも見ずして逃ちつたり。逃るを追はず政右衛門。道の案内は此挑灯と。勝手は覚えし杣道の。足跡し

「高たか手て小こ手て」
は後手に小
手を高く縛り上ぐるをいふ

るべにしたい行く。跡あとにかくれて助平すけへいは。道の勝手かつては方角はうかく知ら
ず。うろつく折柄をりから。取とて返かへす組子くみこ共ども。それと言いふにも及およばざこ
そ。高たか手て小こ手てにくゝり付つけ。狼うろたへ狼たへ奴やつこと夢ゆめにも知しらず。組子くみこの頭大かしらだい
音上おんじやう。「強敵かうてきの曲者くせものを。組子くみこ仲間なかまへ生捕いけどうたりと。引立ひたたてこそ「急いそ
ぎ行く。

伊賀越道中双六

岡崎の段

「九つの鐘てより」 とか
けたり、夜の九つは子の刻
今の午後十二時、
「名に負ふ眼八」 案内よ
く知るべし、
「駄荷」 は馬に負はする
荷物、
「あたふた明けて」 とか
けたり、紋切形
「心も關の忍び道」 とか
けたり政右衛門が拔道せし
事、新關の段を見よ、
「理不盡」 は無法の意、
もと理を盡さず押してする
こと、類聚國史「不與解
由狀依理不盡」返却者云
々」
「弱腰」 はおびしぱりと
も稱し、腰のほそきとこ
ろ、蜂腰これなり、

岡崎の段

引立て入にける。既に其夜もしんくと。遠山寺に告渡る。早九
つのかねてより。内の案内は知たる眼八。裏から忍んで納戸口
思はず蹟く明殻の。駄荷の葛籠を幸と。あたふた押明忍び込。
鼻息もせず窺ひ居る。斯とは人も白雪の。道も厭はぬ政右衛門
心も關の忍び道。遁れて急ぐ跡よりも。數多の捕人が見え隠れ
慕ふ足音氣轉の唐木。兩腰そつと道端の。雪搔集め押隠す。透
もあらせずばらくく。腕を廻せと追取巻く「ヤア子細もいは
ず理不盡に。繩かゝるべき覺はないと。云せも果す双方より。
捕たとかゝるを引ばづし。苦もなく首筋一掴み。一振ふつて右
左。弱腰蹴するて狗投。隙間を得たりと二番手が。腕がらみを
振ほどき。ほぐれを取て眞逆様。頭轉胴骨雪道に。打付られて

「はぐれ」 はづるゝこ

「十手」 は捕手の道具、

陳の陳元〇の傳法なりとい

ふ、

「脾腹」 は横腹、

「當」 はあて身とて、急

所をつきて氣を失はしむる

やはらの術、

「關破り」 は間道により

て、關所を拔道するをいふ

「丸腰」 は刀をさゝぬを

いふ、

「慮外」 は無禮に同じ、も

と思ひの外の意、魏書に

或生慮外云々、

「身に覺ぬないにもせよ」

幸兵衛うまく利わしたり、

「死活のいけ」 は當身に

て氣絶せし者を、復活せし

むるやはらの術、

「お役目御苦勞」 いたみ

入った御挨拶、

適はじと。入替つたる三番手。打込十手かいぐり。脾腹を丁

と眞の當。勵しき手練にさしもの組子。左右なくも寄付ず。跡

退去りする計なり。見兼てかけ寄る捕手の小頭。「ヤア上意によ

つて向ひし我々。手向いなすは關破りの浪人者に相違はない。

腕を廻せと詰かくれば。ヤレ僥忽もお役人。急用有て此ごとく

夜道を急ぐ旅の者。丸腰の某を。關所を破りし浪人とは。身に

取て覺えぬ難題。外を御詮議なされよと。ちつ共恐ぬ丈夫の振舞

始終を見届幸兵衛は。戸口をかけ出で押隔憚りながらお役人へ

申上る。關破りの御詮議半ば。深夜に一人歩行の旅人。御疑ひ

は御尤。併此者は鎌倉飛脚。子細有て此幸兵衛。能く存じ罷有

れば慮外の段は御用捨有り。無難にお通し下さらば。有がたき

仕合し。かばふ詞に政右衛門「ウゝさ言ふ此方は何人。といふを

打消し。イヤサヨリヤ身に覺えないにもせよ。お役人に慮外の

「威儀を正し」 はあたら
なとふること「禮儀三
百威儀三千」

「昨今なれど」 は見知り
て間もなきをいふ、

手向ひ。ア、不届至極と叱り付。しづくと歩み寄り。倒れ伏し
たる組子共。引起して死活のいけ。「いづれもお心慥にごさるか。
お役目御苦勞千萬と。苦い挨拶氣の付く捕手。幸兵衛猶も威儀
を正し。「承はれば。關所を破りし科人は。帶刀の浪人者。彼は
町人此丸腰。憚りながら人違へ。斯やうな儀に隙取る中。彼の
曲者を取逃さは詮なき事。早くお手當なされよと。云れて實
にもと捕人の小頭。「ふウ其方が存ぜしと。申す詞に相違も有ま
い。是よりは山手へかゝり。彼曲者を詮議せん。家來參れと引
連て。元來し道へ引返す。影見送つて政右衛門「ハ、ア危ふき
場所を遁れしも。全く貴公の御厚志故。がお禮は重ねて。心も
せけば失禮ながら。お暇申すと立上るを。暫しと止め。「昨今な
れど。折入て。お尋ね申す子細もあれば。見苦しけれど拙者が
宅へ。暫時ながらと老人の。詞に是非なく政右衛門。然らば御

「柔術」は素手にて人を捕ふる術、其起因に種々の説あれど、慶安中歸化せし明人、陳元〇より拳法を受けたる福野七郎右衛門等が、工夫を加へて起倒流を起せしに創まると、別記を見よ、「神影」は新陰の書かへ、上泉伊勢守、愛洲惟孝の陰流を學びて、神陰流を創む、柳生宗嚴これを受けて、新陰流を開く、又右衛門は宗嚴の門人なり、總解及別記を見よ、「心にくし」はおくゆかし、「相格」は相好と書くを正しとす、佛氏に三十二相八十種好の説あり、大智度論に「相好自莊嚴」願つきの意、「指南」は教授又師匠の意、昔支那の成王の時、南

免と打通れば。門の戸引立て主の幸兵衛。傍近く差寄て。「多勢を相手に今の働き。感心の餘り役人を欺き歸し。難儀を救ふは身共が寸志。それに付ても不審きは貴殿の柔術。正しく拙者が流義に同じき神影の極意。手練せられし旅人はと。訝かる色目。此方も不審「神影流の極意なりと。見極られし御老人。ハテ心憎しと双方が。ためつ。すがめつ見合す顔。「ム、お別れ申して十年餘り。相格は替られしが。生國勢州山田にて。武術の御指南下されし。要様ではござりませぬか。サ、御詞で思ひ出した我勢州に有し節。幼少より育上し庄太郎で有ふがな。成程く。然らばあなたが其方か。是はくと手を打て。盡ぬ師弟の遠州行燈。搔立く打眺め「サ、稚顔に見覚え有る庄太郎に相違ない。ハテ健に生立しな。ハア先生にも御健勝で。サ、サく。無事の對面。互に満足。去ながら。ア、思ひ廻せば過行く月日。

方の越裳氏の使者、來りて
白雉を獻じ、歸路に迷ひし
かば、周公指南車を作りて
其國に至らしむ、これ指南
の語の起りなり、其車の製、
上に木偶ありて、如何に廻
轉すれども、常に南を指す
といふ、

「盡の子弟の遠州行燈」

とかけたり、遠州行燈は丸
行燈、物類稱呼に「江戸に
ていふ丸行燈を、加賀にて
まほし行燈といふ、津の國
にてゐんちやんどんとい
ふ、これは遠州行燈の訛な
り、小堀遠州の物數寄にて、
つくり始め給ひしとなり」
「山田の神職云々」 伊勢
の神宮に、荒木田の姓ある
に思ひつきて書けるなるべ
し、又右衛門は伊賀國荒木
村の農夫の子なり、
「一を聞て十を知る」

其方は山田の神職。荒木田宮内が忤なれ共。幼少の砌父母に離
れ。孤となる不便さに。手鹽にかけて育つる所。稚立より武藝
を好むは。末頼もしく思ふより。門弟共へ稽古の次手。一手二
手と教ゆる中。一を聞て十を知る。頓智といひ器用といひ。十
五以下にて鎗術。劒術。鎖鎌。躰術。柔に至る迄。諸歴々の弟
子を追捕。神影の奥義を極むる無双の達人。何卒大家へ仕官致
させ。親の氏をも繼せんと。心頼みに思ふ中。未熟の師匠と見
限りしか。家出致して十五年。便なければ折に觸れ。此庄太郎
は如何なりしと。雨につけ風につけ。思ひ出さぬ事もなく。夫
婦打寄其方が噂。「シテ只今の住所は何國に。有付とてもあらざ
るか。と。師匠の慈愛に政右衛門。思はずはつと手をつかへ。」親
にも勝る大恩の。師匠を見限り家出せしと。御疑ひは去る事な
れど。常く武術の御講釋。小耳に覺ゆる其中に。一派に心を

極めてさときをいふ、論語「問也聞一知十、賜也聞一知二、これより出でたり」
 「鎗術」は武藝小傳に大己賈命の廣矛、中大兄皇子の長槍の類にて、上古はほこといひ後世はやりと稱し、戰國以來其術に精しく流派頗る多き由を記し、大内無邊(寛文三年十月死)の無邊流を始め、二十餘人の小傳と流義とを載せたり
 「劍術」は全書に武藝槌經津主の二神に始り、日本武尊、源義家、爲朝、義經及常陸鹿島の神人の長(關東七流)等これに精しき由を記し、飯篠家直が天真神道流を始め、五十餘人の小傳と流義とを載せたり、なほ別記を見よ、
 「鎖録」は其起因未だ考へざるも、徳川の初世なる

凝さんより。諸流に渡り修行をなすこそ。此道の心がけと御教訓。心魂に泌み渡り。十五歳にて國を出。普く諸國を遍歴し。武術を磨く武者修行。天運に叶ひ。然るべき主取も致せしかど。生れ付たる好色者。亂酒に主人の機嫌を損じ。只今は元の浪人。便るべき方もなければ。若上方に有付もやと。心ざして參る所思ひがけなく先生に。面目もなき對面と。うかつにそれと身の上を。言はぬ底意は白髮の母。様子聞てや一間を立出。「チ、庄太郎か。テモ成人しやつたの。連合の目鏡に違はぬ武藝の上達。器量を見込んで頼みたい。子細が有ると聲をひそめ、其方の家出仕た時は。三つ子のあのお袖。もう十七に成はいの。縁有て許嫁の其聲殿を。親の敵と付ねらふ者が有る故。まさかの時の後楯。力に成て下さらば。餘の人千人萬人にも。勝つて嬉しう思ひます。チ、いかにもく。庄太郎と知らぬ先。難義を見兼ね救ひ

「如し」 追て記すべし、
 「柔術」 は柔術の一種
 「やばら」 は柔術に同じ
 「心魂」 はきもたましひ
 の意、
 「遍歴」 はめぐりある
 こと、
 「底意は白髮」 とかけた
 り、
 「器量」 は才能の意、
 「後楯」 は心頼みないふ
 「假名」 はこゝは本名と
 いふに同じ

しも。其義を頼まん下心と。師匠の詞聞もあへず。政右衛門摺
 寄て。「ウム其付狙ふ敵の假名は。ヲ、聲といふは上杉の家來。
 澤井又五郎といふ侍。付狙ふは和田志津馬と聞た計。面體は知
 らね共。高で知たる若輩者。幸兵衛が片腕にも足らぬ相人。ガ爰
 に一つの難義といふは。彼奴が姉聲。唐木政右衛門といふ奴。
 音に聞えし武術の達人。譬へ五十人百人加勢有るとて。政右衛
 門には及ばぬく。まだしも唐木に立合んは。其方ならで外に
 はない。何とぞ聲に力を添。助太刀頼む庄太郎と。餘義なき頼
 に政右衛門。先生に内縁有る。又五郎殿に力を添れば。少しは
 師恩に報ずる理り。いかにも助太刀仕らふ。サ、此上は澤井殿
 の隠れ家へ。御案内とせき立つ唐木。忍びの眼八。蓋押明て差
 覗く。影をちらりと見付る幸兵衛。心付ねば。「ヤレく嬉しや。
 庄太郎の今の詞。聞たからは千人力。ドレく聲殿へと。立上

「壁に耳」は秘事もれやす
しとて、多言をいましむる
語、もと詩經より出づと、
「咄しの蓋は取らぬが云々」
「今もいつた咄しの蓋云々」
と諷しの謎、幸兵衛中々の
才物なり、
「一物あるきの小助」
かけたり、
「庄屋」は前に解す
「とんきよ聲」は間の抜
けた大聲、頓怯など書く
「不肖」は不仕合せの意
もと親に肖ざる愚か物、と
いふ義より轉ぜしなり、
「ばをり」は、ばふり(上
へ放りかけて着るゆゑ)の
轉訛にて、羽織と書くは當
字なる由、秋草に見ゆたり
「海老錠」は丸形の錠、
こゝの謎よく出来たり、
「雪道」とはぬ高足駄云々
頗る逞しく書きたり、凜乎

るを。「ハテ扱いらざる女の差出。又五郎殿の行衛は知らぬナ。
ハテ壁に耳有る世の諺。それと慥に知らね共。云聞すには折も
有ふが、うかつにそれと明されぬ。咄しの蓋は取ぬが秘密と。
何處やら一物歩行の小助、門の戸叩て。「申し」。庄屋殿から
急な御用。只今御出ととんきよ聲。「ハテ又關破りの詮議で有ふ。
いやといはれぬ役目の不肖と。云つゝ羽織引かけて。たしなむ
大太刀差こなす。腰もかがみし海老錠を。葛にしつかと。「コ
リヤ女房。今も云た咄しの蓋。戻つて来る迄明ぬ様。心におろ
した此錠前。十合點かと詞の謎。聞く女房も解やらぬ。雪道い
とはぬ高足駄。さす傘の骨組も。人に勝れし岩丈作り。歩きを
先に幸兵衛は。心を。残して出て行く。「戻らしやる迄寐られも
せまい。糸績ながら咄ませう。ハア今に御上根な事。マア火
にお當りなされませ。私も是から下男同然に。お遣ひなされて

たる風姿思ひやたる、

「岩丈」 はしつかりと丈

夫なるをいふ、岩熱、岩重

岩乘、五調、強盛など、種

々に書けり、

「上根」 は根氣のよきこ

と、もと佛語「上根機」

「國分」 は薩摩より産す

る煙草の名、多く出水郡よ

り産し、最も上品なり、服

部も同國かよくも知らず

「底に劔の葉拵へ云々」

煙草にかけて書けり、心の

底に劔を磨きで、敵の機子

を聞出すといふ意、

「肌も郡山」とかけたり

婚禮の段参照

「蒲團」 はもと蒲の葉を

圓くあみて、作れる敷物の

稱なりしが、今は衾の事と

なれる由、秋草に見ゆたり

「いんのこく」 は夜子

供を眠らす唄、犬の子の

下さりませ。何のいの。此方様は大事の御客。マア煙草吞でゆ

るりつと。寢轉んだがよいわいの。イエ／＼勿體ない師匠の内。

ホンに此煙草は何處から參つた。ソリヤ親仁殿が旅戻りに。貰

てござつた上方煙草。ハアあなたのお口に合のなら。服部が國

分か。此天氣に斯して置たら濕りましよ。留守事に刻で見ませ

う。幸い爰に切臺庖丁。底に劔の葉拵へ。敵を聞出す煙草の小

口。葉巻手早くきり／＼と。大の體を小廻りの。奉公振も哀れ

なり。外は音せで降雪に。むざんや肌も郡山の。國に残りし女

房の。思ひの種の生れ子を。抱てはる／＼海山を。たどり／＼

て岡崎の。宿より先に日は暮て。何國を宿と定めなく。がはと

轉ればわつと泣く。子をすかす手も冷氷る。雪の蒲團に添乳の枕

いんのこく／＼に。友さそふ犬の聲／＼。夜廻りの番が見付

る小挑燈。「ヤイ／＼軒下に何で寐るのちや。きり／＼往けと呵

音傾なり、此故事別記を見よ、

「坂東順禮」は坂東三十三觀音を巡拜する順禮、

「うさん」は怪しき者な

いふ胡論の轉か、

「爪はづれ」は襪はづれ

と書くべし、身のこなしを

いふ、態度などの意、されど大抵うち見たる所の美なることに用ふる如し、

「尋常」はしなやか、す

なほなどの意、

「白眼んだ眼うつかりと、

細目にあくる云々」夜廻

り初めの言葉に似もやら

で、ぶれりとなりし狀と、

政右衛門が戸を細目にあけ

て、覗くとをかけて、面白

く書きたり、味ふべし、

「悪いところへ切りかけ云

々」煙草の縁にて書く、

味ひあり、

られて。ハイくく。私は秩父坂東廻る順禮。癪でお中を痛

めます。あつとの間置しやつて。順禮でも幽霊でも。在の中

に寐さす事はならぬく。意地ばるは猶胡散者。棒いたぐな

と挑燈突付。見る爪はづれの尋常さ。白眼んだ眼うつかりと。

細目に明る戸の隙間。内から覗く夫婦の縁。思ひがけなき女房

お谷。ハツと恠り差合せ。包む我名の顯れ口。悪い所へ切かけ

た煙草の双金。胸を刻むと人知らず。「フウ見た所が小盜する風

俗共見えぬ。此雪に乳呑子かゝえて難義ぢや有る。何所ぞ後生

氣な所を頼んで。泊て貰はしやれ。エ、見れば見る程比合な好

い女房。一人寐さすは残念なれど。此方も寒氣にとぢられ。瘦

畑の鬼灯で。あつたら物を見逃す事と。眩き歸るも頼みなき。

人の詞もせめての頼み。火影を力戸口に這寄り。幼い者を連た順

禮でござります。お情に今宵一夜さ。お庭の端にと計にて。癪

「瘦煙の鬼灯で云々」 物の寒氣に萎縮して役に立たぬをいふ、ささるべし、
 「南無三寶」 は失敗などの時に發する語、前にいへり、
 「滅多」は無闇の意、語原詳ならず、
 「ろくな者」 はまろく(圓)な者の略にて、正しくとのひたる人をいふ、ろくでなしはこれに反す、
 「法度」は捷ての意より、轉じて禁制
 「やばらかにいふて引出す糸車」の句味ひあり
 「來いと言たとて云々」岡崎地方にては第二の句を「行かりよか佐渡へ」とうたへり、

に苦るしむ息切の。聲に主は涙もろく。「いとしや癪持さうな。門中に寐てはたまるまい。泊てしんじよと立て行く。南無三寶と裾引留めア、是は又御鹿相千萬。此お觸の嚴しい中。殊にお役柄の此内。何所の者やら知れもせぬに。滅多に引入れ。後の難はどうなさるゝ。急度止しになされませ。夜中に一人歩行く女子。碌な者ちやござりませぬ。戸を明すと。追往したがおござります。いか様のふ。親仁殿の留主の中は用心が肝心。コレコレ旅人。いとしけれど一人旅を泊るは御法度。御城下の中は軒下にも。寝る事はならぬ程に、宿はづれの森の中へ。往て寝やしやれと和かに。言て引出す糸車。來いと云たとて行れる道か道は四十五里波の上。「ハア何處へ行ても一人旅は。泊てくれう様もなし。はるくの海山も。此子の顔を旦那殿に。見せたいと思ふ精力で。産落すから此已之助。漸忌も明くや明かず。國

「身はならはし」 ば身の
常となるをいふ、新古今「里
はあれぬむなしき床のあた
りまで身はならはしの秋の
風吹く」

さるべき家に生れながら
「星の光を燈火と」思ふて眠
る稚兒の、顔を見る世の心
根、まして雪に凍はて命と
頼む、乳房の張らぬに至つ
ては、身もよもあらぬな
るべし、

「觀音」 は救世菩薩とも
稱し、三十三身に現じて、
機に應し物を利し給ふ佛と
いへり、千手、正、馬頭、十
一面、準胝、如意輪を六觀
音といひ、これに不空索
を加へて、七觀音と稱す、
内には燃ゆる苦患の思ひ、
外より攻むる水の氷、眞に
「水火の責苦」
「哀れ白雪の積り重なる旅

を立てついに一夜さ。家の下で寐た事がなけれや。身はならは
しと山寺の。鐘がなれば寢る事にして。星の光りを燈火と。思
ふて寢入れど今夜のくらさ。氷の様な此肌で、寢苦しいは道理
ぢやはいの。殊更癩で乳は膨らず。雪に凍え雨にうたるゝ。つ
らさは骨にこたゆれ共。旦那殿や弟が。敵を尋る辛抱は。まだ
くく斯様な事では有まいに。其艱難にくらべては。雪は愚
劍の上にも。寢るのがせめて女房の役。氣は張詰ても此癩の。
重るに付ては二人の身に。勞れの病が起りはせぬか。萬一悲し
い便やなど聞たら。何とせうぞいのふ。頼み上るは觀音様。弟夫
の武運長久。我子の命息災延命。未練な事ぢやが私も。此子を
夫に渡す迄は。生て居たい死ともないと。傍に夫の有ぞとも。
知らぬ不便さ喰しばる。喉に然湯内外に。水火の責苦雪霰。子
を濡さじと抱しめく。天道哀れ白雪の。積り重なる旅勞れ。

「勞れ」 とかけたり、味ふべし

「身は濡羅の目はどみたり」雪にぬれまみれ、目まじしなるをいふ、

「非人」 は乞食、昔罪人の罪ゆるされて、檢非違使廳に使はるゝ者を、放免とも非人ともいふ、これより出でし名なり、

「比翼とかはす女房」 契りの深き女房といふ意、長恨歌に「在天願作比翼鳥」なほ琴責の段を見よ

癢と寒氣にとじられて。アツと一聲氣を失ひ。挫うと倒れし物音は。肝にこたへて南無阿彌陀。南無阿彌陀佛も口の内。今のは何ぞと主の母。戸を引明れば。ばつたりと。身は濡鷲の目は暈みたり。「こりや眩暈が來たのぢやはいの。エ、窘らしや。如何せうぞ。夫れよ幸ひ此氣付と。とつかは文庫に用意の藥。」ア、申し。そりや御無用になされませ。なぜにいの。こりや親仁殿の道中で。持しやつた結構な氣付。サア其結構な氣付を。非人同然の者に吞して。それでも氣の付ぬ時は。かゝり合に成ますぞへ。此儘にして放り出して。お仕廻なされませ。ぢやといふて、どう見捨に成る物。アレ可愛や。乳を搜して泣わいの。せめて此子を殺さぬ様に。奥の火燵で温めて遣ませう。風に當じと寝卷の繻絆。あかの他人は慈悲深く。比翼とかはす女房を。慘う引出し戸を引立。奥口見廻じさし足し。勝手は見置く釜の

「何と、飯柴」 とかけた
り、椎柴とはいへど、飯柴
といふは知らず、飯を炊ぐ
よりかく名づけしか、椎柴
の轉訛か、

「けぶらい」 はそぶり、
けは氣、ぶらいはぶりの延
語にて「けぶり」ともいふ

「人參」 は藥用として貴
重せしもの、我國にも産す
れど、朝鮮及支那廣東の品
名高し、

「熊の膽」 は熊の膽より
製し、胃及氣つけの妙藥と
す、最も苦し、

前。附木の明り見咎めて。人は何とか飯柴を。そつと隠して門
の口。伏たる妻に氣を付る。柴の焚火の煖まり。嚙しめる齒を
押割て。雪に濕す氣付の一滴。耳に口寄せ聲微め。お谷といふ
も憚りて。心の内で呼生る。夫の誠通じてや。うんと一聲氣が
付たか。コリヤ女房。ハア、マア、政右衛門殿かいの。とい
ふを押へて。コリヤ何にも云な。敵の所在手がりに取付たぞ。
此屋の内へ身共が本名けぶらいでも。知らされぬ大事の所。其
方が居ては失望の妨。苦しく共こらへて。一丁南の辻堂迄。這
ふてなり共行てくれい。吉左右を知らす迄。氣をしつかりと張
詰て。必死ぬるな。サア早ふ行くと。夫の詞は千人力。「觀音
様の御引合せ。お前に逢たは人參熊膽。エ、忝い。忝いが坊
んは何處へ。氣遣ひすな。坊主は奥で寢さして置た。ソレ、
向ふへ來る提燈。見付けられな。早ふくとせり立つれど。此年

「人目を暗き夜」 かけたり

「だんない」 は大事ない

「夜と共咄さう」 は終夜

咄さう、

「金打」 は昔武士、誓
をかへじ漏らざしといふ證
に、刀の刃又鏝など打合せ

月の悲しさと。嬉しさ凝じて足立たず。杖を力に立兼ねる。兎
やせん側に脱捨し。薦に積りし雪の儘。着せて人目を暗き夜を。
ほかへ戻る達者親仁。「ナ、お歸りなされましたか。ナ、庄太
郎。寒いに門に何して居る。イヤお歸りが遅い故。お迎ひに出
かける所。ナンノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴の燃さし。
非人共が業で有る。不用心なと。見廻す提燈。イヤ私がと取る
拍子。態とばつたり。「コリヤ麗相。だんないく。きつい風で
すでに道で取られうと仕た。まだも好い所で火が消たと。言ふ
もこたへる疵持つ足。天氣も大方上り口。庭から足拭く下駄直す。
師匠思ひに機嫌顔。「イヤ馴染程結構な物はない。是から緩りと
夜と共咄さう。彌最前頼んだ事。違變はないの。是はお師匠共
覺えぬ諄いお尋。心元なう思し召すなら。鈍刀でない魂を。只
今金打。ア、コレ何のそれに及ぶ事。及ばぬとおつしやつても。

しないふ、後には刀を少し
抜きて、かちと音さしてを
さむることなす、女は鏡
を用ひしとぞ、
「鞘があらう」
は隠し隔
て、あらう、

「せわれ」
を倅と書くは
倅の字を誤れるなるべし、
別記を見よ、
「戯鬼」
は小供をいふ
食を求めて止まざる意と、

「小柄」
は鞘に添へて差
す小刀、
「擦りが戻る」
は氣象の
にふるをいふ、

お頼なさるゝ本人の。又五郎の所在。御存じないとおつしやる
は。お師匠の詞に。鞘が有らふかと存じられ。頼まれるに力が
ない。ナント左様ぢやござりませぬかと。探る心の奥より女房。
稚子抱走り出。「コレ親仁殿。最前行倒れの順禮が。抱て居た此
乳香子。今肌を明て見れば。守りの中に此書付。和州郡山唐木
政右衛門子已之助と。書て有はいの。ヤアと幸兵衛立寄て。誠
にく。シヤア好い物が手に入たぞ。敵の倅を人質に取て置け
ば。此方に六分の強み。敵に八分の弱み有り。又五郎殿の運の
強き。其餓鬼随分大事にかけ。乳母を取て育てるが。計略の奥
の手と。悦び勇めば政右衛門。ずつと寄て稚子引寄せ。喉笛貫
く小柄の切先。幸兵衛驚き。「コリヤ庄太郎。大事の人質何故殺
した。ハ、ハ、ハ、此倅を留置。敵の鋒先を挫かうと思し召す。先
生の御思案。お年の加減か。こりや些と擦が戻りました。武士

「血祭」は軍陣に牲の血を以て、軍神を祭ることより、其手始めに殺すをいふ

「手ぐすね引く」は身搦へして敵をまつことくすね

は藥練又誠糸結とも書き、松脂に油を交へ煮たるものにて、弓の弦などに延くものなるゆゑ、それを延きて待つ如く、用意して敵の来るを待つをいふとぞ、

「鯉口」は鞘の鏢にあたる所、其形によりて名づく「居合腰」は居合といふ刀を抜く際の腰つき、林崎重信の創むる處と。

と武士との曠業に。人質取て勝負する卑怯者と。後ち後ち迄、人の嘲り笑ひ種。少分ながら又五郎殿の。お力に成る此庄太郎。人質を便りには仕らぬ。目指す相人政右衛門とやら云ふ奴。其片われの此小倅。血祭に差殺したが。頼まれた拙者が金打と。死骸を庭へ投捨たり。幸兵衛手を打。ハ、ア尤。其丈夫な魂を見届たれば。何をか隠さう。又五郎は奥へ來て居るわいの。祖母聶殿を起しておぢや。コレく又五郎の片腕に成る。頼しい人が來たと。云ふて爰へ呼でおぢや。スリヤ澤井又五郎殿は。此内に居さつしやるか。フワシテ外に連の衆でもござるかな。イヤく供もなし。たつた一人。奥底なふ咄してたもと。打明け語るは思ふつぽ。何條知れたる又五郎。手取にするは安かりなんと。手ぐすね引いて待つ大膽。志津馬は女房が案内に。又五郎が片腕とは。何奴なり共只一討と。鯉口くつろげ居合腰。

「相逕」は相違の意、庭逕とはいへど、相逕といふ語は未だ聞かず、
「三寸俎板見ぬく」するどき眼力ないふ、世話盡に「三寸見通し」

氣配り目配り。互にきつと。「ヤア。こなたは。くくと一度の仰天。幸兵衛むんずと居直り。「唐木政右衛門。和田志津馬。不思議の對面。満足で有らうなと。先がけられし二人より。思ひがけなき女房が。心どきまぎ不審顔。「ナント老人の目利。よもや違ひはせまいがの。今宵澤井又五郎と名乗來る年配格好。聞及びしとは拔群の相逕。扱は却つて付狙ふ志津馬か。但し餘類の者か。肌赦させて詮議せんと。態と一ばい喰た顔。三寸俎板見ぬいたれど。我弟子の庄太郎が。政右衛門と云ふ事を。知たは漸くたつた今。骨柄といひ。手練といひ。適又五郎が片腕にせん物と。頼めば早速承知仕ながら。又五郎が所在を根を押して聞たがるは心得ずと思ひしが。子を一決りに差死し。立派に云放した目の中に。一滴浮む涙の色は。隠しても隠されぬ肉身の恩愛に。始てそれと悟りしぞよ。澤井にさせる恩はなけれど。

「百姓」
は庶民といふ
義より、農夫の稱となる。
書經に「平百姓」

「娘お袖を。城五郎方へ奉公に遣た時。筋目有る人の娘。末くは我一家の。又五郎と娶合せん。ナ、いかにもお頼申すと。つい云た一言が。今更引れぬ因果の縁。其後娘は奉公引て歸りしかど。今落目に成た又五郎。見放されぬは侍の義理。かくまふ幸兵衛。ねらふは我弟子。悪人に與してくれと頼みに引れず。現在我子を一思ひに殺したは。劔術無双の政右衛門。手ほどきの此師匠への云譯。去とては過分なぞや。其志に感じ入り。敵の肩持片意地も。「最早は限り。只の百姓。町人も侍も。替らぬ物は子の可愛さ。此方は男のあきらめも有る。最前ちらりと思ひ合す。順禮の母親の。心が察しやらるゝと。悔めば門に堪へ兼て。わつと泣く聲内よりも。明る戸直に轉び入り。敢へ亡骸を抱き上。「コレ已之助。物言てたも。母ぢやはいのく。夕べ迄も今朝迄も。憂い辛い其中にも。てうち仕たり。藝づくし。

「侍の子に生れしぞ」 千

代萩に「武士の胤と生れたは、果報か因果かいちらしや」箱根靈驗記に「ほんに武士程世の中に、はかない者が、あるかいのふ」武家時代の武士の義、随分悲慘の事もありしなるべし。

「したり黒星」 ばうまく
當りたるをいふ、もと弓より出でし語、

爺御によふ似た顔見せて。自慢せうと樂んだ物。逢と其儘差殺す。慘たらしい父様を。恨むにも恨まれぬ。前生にどんな罪をして。侍の子に生れしぞ。こんな事なら先刻の時。母が死だら憂目は見まい。佛のお慈悲の有るならば。今一度生返り。乳房を吸ふてくれよかしと。庭に轉びつ這廻り。抱しめたる我が身も。雪と消べき風情なり。志津馬涙押拭ひ。此上は包まん様なし。逆もの事に眞實の。敵の有所を。何が扱。此方も隠しはせぬ。有様は此幸兵衛。最前庄屋へ呼れた時。又五郎に逢て來た。ヤアすりや敵は庄屋の方に。心得たりと駈け出すを。政右衛門引とめ。愚く。「我々爰に有ると聞て。暫時も此地に足を留ふ様がない。はや五六里も行過て。もふ爰に敵は居ぬ。此行先も用心して。海道筋へはよも行まい。道をかえて落たと見える。親仁様。何と左様でござらうがな。したり黒星其通り。

「藥師堂の山越に中山道へ云々」岡崎の北邊、裏六供といへるに、傳教大師の作といへる、有名な藥師堂あり、この裏手より山島越へに、飯田(信州)へ通する信州街道に出で得べし作者岡崎の事を、見るか聞かして書きしなるべし「思ひ切髪墨染の袈裟に」よくいひたり、よくかけたり「そぎ尼」は貞丈雜記に「昔はよき人は尼になれども、髪を残らず剃落す事なく、髪を短くきりて、禿になりしなり、之をそぎ尼といふなり」これにて明かなり「染め違ふたる鉢漿付けを」身を墨染にせずして、齒を墨染にすべく、志津馬と契りしないう、元の白齒と墨染」とかけたり此前後巧みにあやなして書けり、注意して讀むべし味ふべし。鏡

迎も非道の又五郎。天道の御罰にて。どうで討るゝ者なれ共。此岡崎で勝負さすれば。肩持ねばならぬ幸兵衛。藥師堂の山越に。中仙道へ落したは。城五郎へ一旦の情。又五郎との縁も是迄。思はぬ方便が縁に成。志津馬殿と言かはした。娘が身の果不便やと。見れば籬の小影より。思ひ切髪墨染の。袈裟にかはりしそぎ尼姿。「お袖か。サ、出かしやつた。悪人の又五郎に。假にも女房と名の付た。其間違が和女の不運。可愛や盛りの黒髪を。「アコレ申し。もう何にも申しませぬ。顔は見ね共許嫁の。男持つのがうるさゝに。屋敷を戻つた其時から。尼に成る氣で袈裟衣。今日一日に氣が替り。染違ふたる鉢漿付けを。元の白齒と墨染に。染直ても剃しても。思ひ初た煩惱の。心が元ぬ佛様御赦されてと身を反向け。泣ぬ氣を泣く親心。又五郎にも志津馬にも。縁を離れたお袖道心。袖振合も他生の縁。子に別れた

襷を付くるは元服とて、妻
となりたるしるし、其はじ
めいつとも分られど、いと
古き事なるべし貞丈雜記に
も「此頃（一條天皇）専ら
かれつけたる事見にたれば
其治めは猶久しかるべし」
と見ゆ。

「泣かぬ氣を泣く親心」

泣くべきを泣かぬ、娘の殊
勝なる氣をくみとりて泣く
これ親の情、古くよりいふ
句なれど穿ち得て妙、

「袖振合ふも他生の縁」

袖の觸れ合ふも、前生の縁
なくては出来ぬといふ、佛
家の語、

「切手」 は關所を通る手

形、よき切手を貰ひしもの
「父母の恵も云々」 順禮

歌「父母の恵も深き粉川寺
佛の誓ひたのもしきかな」
より書く、場合にかなひて
味ひふかし、

「半蓋」 は小形の長持、
馬士の眼八かくれ居れり

順禮に。菩提の爲のよい道伴。關役人の我娘。關所くも切手
入らず。中仙道への案内者。勝手に連て行れよと。娘に敵の道
引を。道子故に踏迷ふ。未來の契り鉦撞木。涙で渡す父母の。
恵も深き觀世音。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀。我子は冥途の道
しるべ。志津馬。唐木も恥合ふて。悄れる表武士の禮。師弟は
内證敵同士。此儘歸るは卑怯者。返せと一聲切付る。得たりと
請る半蓋に。馬士の胴切重切。まつ其通りの手柄を待つ。またお
手の内は狂ひませぬ。ハ、ハ、ハ、ハ。やがて吉左右くと。笑ふ
て祝ふ出立は。侍なりけり。

伏見の段

「胴の間」は船の胴にあたる間、これは伏見大坂間を通ふ、三十石の渡し船なり、「水菜」は京都にて壬生菜といふ山城壬生の産を上品とす、水菜は壬生菜の訛なるべし、「世話な素焼」とかけたり、素焼は釉をかけぬ焼物「そこ」に夕日程なくく「れ竹」とかけたり吳竹は伏見の枕辭、新千載に「吳竹の伏見の田ぬのかりの夜に思ひさらでやもりあかすらむ」吳竹は吳の國より渡來せる竹と稱し、幹細く節繁く葉細長く、杖又籠細工などに用ふ、「何と志津馬」とかけたり、「介抱如才撫さすり」とかけたり、如才は如在と書

伏見の段

「男共」コレ胴の間へお蒲團は入たかな。ハイ艦の間の四人様。水菜は爰に置まする。コレ船頭衆。此荷物破物ぢやぞ。ソレ氣を付て貰はふと。世話を素焼の土産物。積より早く押出して。舟を見送り御機嫌よふ。お下りなされとそこく。夕日程なく吳竹の。伏見の里の船着場。軒を並らべし舟宿の。客に絶間もなかりけり。世の憂を。何と志津馬は此處彼處。敵の行衛尋ね兼。心氣勞れた眼病を。いたはる瀬川も諸共に。暫しは爰に宿りして。北國屋が奥二階。手を引連てそろくと。梯子を下しも黃昏の。人なき隙を幸と。邊り見廻し。「イヤ申し志津馬様。二階計もお氣詰り。月の夜すがの川景色。見やしやんすのが目の養生と。介抱如才撫さする。心遣ひぞわりなけれ。

くが正しく、もと論語より出で、意義の轉ぜしなりといふ、

「わりなけれ」は詮方なし、

「主人上杉公急病にて御死去」これは池田忠雄公の此事件中に突然逝去されしを思ひつきて書けるなり、

總解を見よ、

「萱に心奥口へ」とかけたり「薄の穗に怖づ」といふに同じ、

「痙癖」は按摩のこと、

もと頸筋より肩へかけてこの病の稱なるも、これをもみ直すといふより、按摩の手術の稱となり、更に按摩の事をいふ

イヤモウ何ぼう養生しても。渉々しうもない眼病。見かけに替りなけれ共。今日此比は此様に。和女の顔さへわかり兼ねる。ぶらく月日を過す中。主人上杉公急病にて。御死去遊されし由。御存生の中に。敵も討ぬ残念。頼に思ふ政右衛門殿。武助諸共引別れ。大坂へござつた故。此伏見に逗留するも。若や敵のヲ、是はしたり。思はず知らず大きな聲で。コレ／＼誰も聞ては居なんだかと。萱にも心奥口へ。聞え憚り差寄て。ひそく咄す店先へ。志津馬に連て孫八が。忍ぶ姿の按摩取。頭巾すつぼり船着の。宿屋／＼の門口から。按摩よござい。ヲ、孫八殿。コレ／＼瀬川様。去とは物覚えの悪い。我等按摩取の勤兵衛。必麓相仰しやるなと。云つゝ差寄り小聲に成り。若旦那のお供仕て。二三日以前から。此伏見に逗留して。思ひ付た按摩痙癖。毎日／＼此船宿。入込で氣を付れど。さして是はと申す様な。

「無いにこそ」
は必ずあ
るの意、

「お持合せの彼毒忌」
何
の事やら、

手がゝりもござりませぬ。夫れは左様と若旦那。些とお目はよ
ふござりまするか。チ、孫八の心遣ひ忘れはせぬ。某迎も此程よ
り。歩行はならず。出入の旅人に。心を付けて窺へ共。敵の行衛
知ざる故。次第に重る眼病は。口をしさよと計りにて。打しほ
るればお道理と。瀬川も涙孫八も。共に目をすり居たりしが。
「ア、去迎はお氣の弱い。何の神佛様が無いにこそ。アレ天道が
正真なれば。御孝行な心が届て。御本復も本望も。今の中でご
ざりましよ。其様に思召すは。養生の大きな毒。ヤ毒の次手に
瀬川様。兎角病人は介抱が大事。お如才有るまいけれど。お若
い同士。何よりかより。お持合せの彼毒忌が肝心でござります。
ハ、ハ、ハ、ハ。ヤ是から上手の宿屋を廻つて。後程お見舞申しま
せうと。云ひつゝ立て表口。出るより早く聲張上。「按摩疫癰鍼
の療治と。覗く隣の八百屋の店。奥の間よりのかく」と。出る

「櫻田林左衛門」は櫻井甚左衛門、總解と見よ、
「導引」も按摩に同じ、揉みて血の運りを導くといふよりの稱、

「歴々」は立派の身分をいふ、もと目立ち顯はるゝ意より轉ぜしなり、

「兵法」は吉備眞備之を唐より傳へ、小幡勘兵衛を以て中興の祖となすといふ別記を見よ、

「劍術」の事は岡崎の段を見よ、

「天が下廣しといへども云々」櫻田に大に吹く、

「高木風に倒るゝ習ひ」俗に「出る杭はうたるゝ」といふに同じ、例證擧ぐるに違あらす、

は櫻田林左衛門。「ア、旅勞れて殊の外頭痛がする。幸の導引。

一つ頼まうかい。ハイ／＼左様ならお座敷へ。イヤ／＼表を見

るも又氣ばらし。苦しうない。爰で爰で。成程それも宜ふござ

りましよ。ヤ旦那。御免なされませと。庭から直に店の間へ。

上る孫八櫻田も。互に夫れと面體を。知らねば何の氣も付ず。

「イヤコレ療治人。身は随分きついが好。遠慮なく揉でくりやれ

さ。ハイ／＼ア、きつう凝てござります。然してマア見受まし

た所がお歴々様。骨組と申し丈夫なお産れ。嘸お力も強かるな。

ア、兵法とやら。劍術とやらも。定て抜てござるぢや有るな。

フム我達が目にも左様見えるは尤々。天が下廣しといへ共。某

に立合ん者は恐らく覺えない。成程左様に見えます。左様し

てあなたのお國は。何國で何方へお出なされます。ム、身共は

西國方の者成るが。智謀劍術勝れし故。高木風に倒るゝ習ひと。

「漂泊」は流浪の意、

「僭上」はもと上を凌ぎ
犯す事なれど、こゝは身分
にもなき高慢するをいふ

「甲斐も長い」とかけ
たり、長しいはながしの延
語なり、
「病む目より見る目」は
其本人より傍て見て居るも
のゝつらきをいふ諺、眼病
の場合よく叶へり、

傍輩の讒によつて。浪人して長くと漂泊せしが。サア身共程
の達人がおらぬは。國の弱と有て此度歸參を仰付られ。先知の
上に過分の御加増。古郷へ歸る曠の道中。數多有る供廻りは。
別宿に控へおれば。跡荷物の揃ひ次第。明晝船にて下る積りと。
口から出次第僭上を。隣の店に漏聞く志津馬。「アレ瀬川。あれ
を聞きや。同じ武士の身の上でも。衰へると榮えるは。是程に
も違ふ者か。心を盡して尋搜す。敵には廻り逢ず。困窮の上此
眼病。よつく武運に盡たかと。悔むに瀬川も共涙。「ほんに思へ
ばおいとしや。沼津でお別れ申してより。お跡をしたい尋ね逢
ふ。甲斐も長い日は立てど。是ぞと思ふ手がゝりも。ないを
苦にして此様に。ほんに悲しい病む目より。傍で見る目の私が
心。推量して下さんせと。啣ち歎くを此方には。聞耳立る櫻
田が。兩耳びつしやり。「ア、コリヤ何とする。放さぬかやい。

「南蠻流今宮流」 炮術の流義なるゆゑに「それで壘にする」といへるなり、此流義一ニ炮術の書に見當られど鐵砲は南蠻より傳へたるもの、しかして流派に流派を生じて種々の名稱あれば、ありしやも知らず、又洒落にてもあるか、なほ尋ねて後に記すべし
 「心は清き清水焼」 とつゞけたり。清水焼は慶長年間茶碗屋久兵衛なるもの五條坂にて業を營みしが始めにて、寛永の頃野々山仁清出で、大に起れりといふ。
 「詞の五音」は音調のこと、「めんない千鳥」は目隠しの遊戲をいふ。
 「天照大神の天の岩戸開き」とは、孫八先生よく洒落たり、天の岩戸の事は大神神

ア、お前様も辛抱のない。斯う致して引きかねば。お頭痛が直りませぬはい。ハテ仰山な按摩だな。シテニリヤ何といふ流じやぞい。是は南蠻流の隣の。今宮流でござります。ハア聞えた。それで聾にするのじやな。ハ、ハ、ハ、ハ。コレ瀬川。したが其様に案じてたもんな。此宿の亭主が引合せて。隣に逗留してござる眼醫者。竹中贅宅老の加減の藥。湯煎に立て洗てたも。アイと云つゝかい立て。勝手へ入て汲で出る。夫に盡す貞節の。心は清き清水焼。白湯に振出し差出せば。始終聞居る林左衛門。詞の五音心得ずと。延上つて差覗くを。ちやつと兩手でめんない千鳥。「ア、コリヤくく。何とする。目が見えぬはいやい。又是も今宮流か。イエくく。斯致して置まして。ト一時に手を放すと。何とお目がはつきりと成て。よござりましょがな。是を名付て天照大神。天の岩戸開きと申します。何を馬鹿なとを。

御弟素盞鳴尊の暴行を壓ひて、天の岩戸に隠れ給ひしかば、世の中常闇となれりこゝに於て八百萬の神、天の安河に會して談合の上、岩戸の前に神樂を奏し給へり、大御神少戸を開きてすき見し給ふを、引出しまゐらせたれば、再び明くなれりといふ、如何なるしれ者にや「日の木は岩戸神樂の昔より女ならで夜の明けぬ國」申すも恐れ多き事にこそ、

「きさく」 は氣の輕きをいふ、源氏大鏡などに見たる「きやうさく」の語より出でたりとはいかず、

「芝居」 の稱は慶長年間出雲のお國が、五條河原に芝居して演ぜしより起るといへど、其以前よりありし事にて、能にても舞臺に對

したが氣淡な按摩取。シテ其方が名は。何と云ふぞい。ハイ私
は板屋勘兵衛と申しまして。此間大坂から登りました。貴方もお
下りなされたら。外を差置。芝居へお出なされるで有う。ア面
白い事でござります。コレ則爰に持てをりますが役者の番附。
お慰に御覽じませ。ムウナニ是が役者の番附。ハイ。大坂土産
に何を貰うたナ。申し。役者の番附日傘でござります。「ムウナ
ニ日傘。チエ日傘。シテそちが假名は。板屋の勘兵衛。チエ板
勘兵衛。ナニ板勘兵衛。ハ、ハ、ヤ是からお下をやりましよが。
横にお成なされませぬか。イヤ、下の療治は後程頼む。料物
も一所にくれふ。中々氣淡な男め故。長旅の鬱氣を散じた。
さらば是から夕飯の。宿屋の知行に有付ふ。勘兵衛後にと櫻田
は。刀提げ立上り。一間へ入れば孫八は。上の町へと急ぎ行く。
道摺違ふて何處かは。飛脚と見えて門口から。「ハイどなたぞ。

して、見物の居る所を芝居といひしなり、義殘後覺には相撲にも見物の所をさして芝居といへり、後歌舞伎の稱となる、委しくは千兩幟にいふべし、

「大阪土産に何貰うた」

子守り唄より書く、

「假名」は本名に對して

かりの名のことなれど、只名前といふ程の意に用ひたる事多し、

「板屋の勘兵衛、ナニ板勘兵衛」頗る面白し隨分手

きびしき療治なるべし、

「料物」は實錢のこと

「夕飯の宿屋の知行にありつかふ」前の「前知の上

に云々」の語をうけて、味

ひあり、

「川口」は大阪西區安治

川河口の稱船舶舳を啣ん

頼んませう。是れのお客林新五様へ。大坂からの此狀と。聞よ

り志津馬は覺えの替名。「シ、是は」。即ち拙者林新五。直ち

きに請取ました。ハイお返事をなされるなら。追付取に参りま

しよと。云捨飛脚は立歸る。「コレ瀨川。唐木殿よりの此書狀

何事ぢや讀でたも。早ふくに封じめ解。覺束ながら押開く。

襖の内より林左衛門。差足拔足表口。戸脇に隠れて立聞く共。

心付ねば。「テモ扱も政右衛門様のお氣の付た。私でも讀る様に

假名交りの此手紙。ナニ。彌御無事と存じ候。然れば。敵

の落足止めん爲。大坂川口の出口くは。門弟共數多付け置。

油斷なく手當致し。我等事は武助諸共。尼が崎兵庫の邊りに待

受候間。其地にて替りし事も御座候はゞ。早速御知らせ下さる

べく候。此由申し入度。早々以上。スリヤ政右衛門殿には。大

坂を立て。兵庫の邊りへ参られしか。此方よりも委細の譯。返

で出入し。櫓頭兩岸に林を
なして、西國より大阪へ入
る咽喉なり、別記を見よ

「尼ヶ崎」は攝津河邊郡
にあり、名所圖會に「城下
は大阪より三里にして、川
邊郡の產物市店を出して、
交易の商人多し、南は船路
泉州紀州につゞきて、小船
の泊りによし、西は播磨備
前に通じて、山陽道の咽喉
なるべし」と見ゆ、

「兵庫」は全國武庫郡に
あり、今合して神戸といふ
横濱と相對して、我國の二
大貿易場より、別記を見よ
「一僕さへも内證の」とかけ
「薄いをくろめる云々」とつ
ゞけたり、筆頗る味ひあり
意は一僕さへもなき内證の
貧しさを、黒め隠して黒き
木綿の居士衣を着たりとい
ふこと。居士衣といふもの

書に委しく申送らん。コレ瀨川。爰は端近奥の間で。太義なが
ら書てたも。飛脚の來ぬ中。サア早ふ。アイと瀨川は夫の手を
引連れ這入る後影。とつくと窺ひ。扱こそく。和田志津馬に
相違なし。踏込で討放さうか。ハテ如何はせんと右つ左つ。思
案半ばへひよつかく。一僕さへも内證の。薄いを黒める木綿
の居士衣。見るから藪井の竹中贅宅。療治仕廻ふて戻り足。夫
れと見るより。「チ、是はく隣座敷のお侍様。コリヤ端近にこ
ざりますな。チ、昨晩ちよつと。御意得申た贅宅老。サ是へく
と片脇へ。招き寄て聲をひそめ。「今朝も申すごとく。隣家に逗
留致して居る。若侍がアノ眼病。貴殿が療治召るゝに付。折入
て頼みし密事。彌御承知下さるゝや。イヤモ御大身のあなた様
のお頼。お禮物さへ慥ならば。先は過分。然らば打明お咄し申
す。子細有て某始め。別宿に逗留致す。組の者共へ仇有る奴と

別になしと僧侶の話なり、十徳などの事なるべし、
 「敵井の竹中贅宅」とつ
 ぐたり、面白し。敵井は下手な醫者を嘲る稱、野夫の意なりと、別記を見よ
 「御意得申した」はお伺ひ申した。
 「大身」は高祿の者の稱
 「お印し」は金をいふ
 「百疋」は昔の一分、今の廿五錢、
 「牛を馬に乗かへた」は劣つたものを優つたものに
 かへるをいふ諺、
 「五臓」は心、肝、肺、腎、脾、の五つ、
 「ちやくと」ばちやんと
 「生ず覺はなけれども云々」獨り贅宅のみならず匙一本で人殺しの罪科を免かるゝ醫者、世間に多かるべし、此事既に風來が皮肉

夜前より心を付けるに。身共が推量些共違はず。彼が實名知たる上は。討て捨んと思へ共。彼者に力を添る劍術無双の曲者有る故。我くが手にかくる時は。却て此身の所在も知れ。帶紐解て夜が寐れず。サア頼むと云は爰の事。何卒貴公の働きにて。毒藥を藥と偽はり。彼奴が眼の見えぬ様に。何と手段は有るまいか。此事成就致しなば。一廉お禮を仕らふ。先頼の印と懷中より。金子の包取出し。些少ながらと。手に渡せば。「ヤアコリヤ金子五十兩。テモ結構なお印じやな。隣の病人治したとて。高く貳朱か。能ふくれて百疋は覺束ない。ほんの是が牛を馬に乗かえたと申す物。後共云はず只つた今。我等が秘方の毒藥を。差が相圖に兩眼より。五臓へ染込む腐り藥。ちやくと用意致して置た。コレ刀入らずに仕廻ふて取るは。此贅宅が手の中に有り。エ、早速の得心。満足致た。必手ぬかりなき様に

の筆に上りしが、川柳にも
「殺したと醫者殿腹でおも
ひけり」

「物にかゝりの掴み頬」

金をつかみしと、してやら
んといふつらつきとをいふ
なるべし「上べに見せぬ塗
骨の」とはよくつづけたり、
何喰はぬ鹿爪らしき状いひ
得て妙、

「活薬師」は名醫の稱、

薬師は法薬を興へ、衆生の
病苦を救ふといふ佛、これ
にたとへたるなり、

「めんよう」は不審の意、

面天など書く、例の常字な
るべし、

「そこひ」は外見に異状

なくして、瞳子動かず、物
見ぬ眼病、

イヤモお氣遣ひなされますな。生す覚えはなけれ共。殺す事な

ら此方が得物。委細はあれから御覽じませ。いかにもよきにと

打點頭。喋し合して店の間の。障子引立窺ふ櫻田。何でもしめ

たと贅宅が。物に懸りの掴み頬。上べに見せぬ塗骨の。扇はち

隣の店。「ヤ贅宅でござる。御見舞申すと。聲に志津馬は一

間を出。ナ、是は御苦勞千萬。扱お歸りを待兼ました。ナ、さ

うでござらう。晝から御見舞申す筈が。御存じの流行醫者。あ

そこからも竹中。爰からも贅宅様。活薬師ちやと持囃して。漸

只今罷歸つた。何と晝の洗ひ薬で。さつばりとよからうかの。

イヤさして替つた事も。ハテめんよふな、アノ薬でよい筈ぢや

が。ドレ、今一度診て進ぜうと。行燈引寄せ灯明りに。ため

つすがめつ。隙し見て。「コリヤ内瘡立ちやはいの。是なら洗薬

では行ぬ筈。コリヤ取て置の點薬を出さずは成まい。コレ大切

「醫道は仁術」 病苦をす

くふよりいふ、醫は仁術の語よく用ひらるれど出所詳ならず、孟子に仁術の語はあれど意異なり、

「命を斷つ匙の刃金の點藥」

よくいひたり、ものすこし

「藥膜眩せずんば云々」

書經に「藥不眩眩」厥疾

不瘳孟子にも引けり、こ

れより書く、眩眩は目まひ

のするほどひどくきくをい

ふ

「すつばく破素の骨頂」

つゞけたり、「素破の骨頂

納めた頼付」はうまく素破

な藥ぢや程に。うつかりと思はしやんなや。氣遣ひ召るな。今

の間に本復さして進ぜふと。こてく取出す藥箱。一ア、是は

よいお方に。かゝり合して拙者が仕合せ。此お禮は本望を。イ

ヤ追付本復致したら。急度致すでござりましよ。ハテ心遣ひさ

つしやるな。醫道は仁術。人を救ふは醫者の役ぢや、サアもそ

つと此方へ寄らつしやれと。片手に睚押明て。比ふ件の毒藥は

直に志津馬が命を斷。比の双金の點藥。忽毒氣廻ると見え。ア

、嚴ふ此目が。ヲ、痛む筈。しゆむかしゆむで有るがの。少し

の間ぢや。忪えさつしやれ。藥めいげんせざる時は。其病治せ

ずと申して。一旦動かねば藥は利かぬ。追付兩眼明らかに。此活

藥師が治して進ぜる。ドレ其間一服致さうと。煙管取上げすつ

ばく。素破の骨頂納た頼付。志津馬は苦痛堪えがたく。「申し

く。是迄の御藥とは違ふて。五臓迄も泌渡り。いかふ苦しう

王ありて第六天部に居る由
見ゆ、人に災害を興ふる極
惡人にたとふ、

「したり顔」はしてやつたりといふ顔付、

同苗志津馬。無念に有ふな。ヤナニ某を。和田志津馬と知た此

「小賢しい蚊蟻蛉侍」
小癩なへば侍、

は

「目界」は眼識、見るこ
とにつきていふ、

方は。ヲ、澤井又五郎に力を添ゆる。伯父の櫻田林左衛門。其方連が又五郎を。討んなどゝは及ばぬ事と。聞より扱はと這寄く。敵の片われ遁さじと。刀の柄に手をかくるを。襟がみ攔んでぐつと捻付。「ヤア劔術無双の此櫻田に。刀向はんとは。小賢しい蚊蟻蛉侍。捻り殺すは安けれど。某始め又五郎が。所在を知られては一大事と。贅宅に申し合せし身が計畧。眼も見えぬ分際でも。見事親の敵を討つか。相手は大敵其上に。城五郎殿のお心付にて。劔術勝れし侍。數多付添ふ又五郎。所詮叶はぬ事だとあきらめ。首でも縊つて死ばれと。惡口雜言脚にかけ。踏付られて無念の齒ぎり。「エ、侍の有まじき卑怯未練の此仕業親の敵の又五郎に縁を引たる其方が。土足にかけられ。手向けもならぬは。此眼が見えぬから。ヤア口惜や無念やと。拳を握り男泣。見るに瀬川が氣は狂亂。「目界も見えぬ志津馬様に。慘

「鼻明かす」は裏をかい
て馬鹿を見するをいふ、小
倉之色紙明星茶屋「うりも
のかと思ふて、うかと泊り
鼻をあく、念入れて宿るべ
し」

ひ辛い大悪人。天道様の明かな。お目には是がかゝらぬか。「孫
八殿は何してぞ。神も佛も恨しやと。聲を限りに泣叫ぶ。一エ、
やかましいわい。コリヤ眼の見えぬ計ぢやない。毒氣が五
臓へ廻るが最期。追付ころり。百兩の褒美がほしさの仕事ぢや
わいやい。ヲ、贅宅が働きにて。此志津馬めを仕廻ふて取。待
伏ひろぐ政右衛門め。鼻明すのが此方の方便。荷物の内に忍ば
せ置し。又五郎にも落付せ。うぬらが苦痛を肴にして。一献汲
ふ。ハレ好い態と踏飛し。驅け行く鎧をしつかと取。「すりや差
敵の又五郎は。ヲ、身共と一所に昨日より。是に逗留致し居る
はい。エ、忝い。今こそ敵の所仕が知れた。志津馬様嚙御本望
と。ぬつと出る池添孫八。主従一度に身繕ふ。「ヤアくくくコ
リヤ。儕眼が見えるな。贅宅こりやどうぢややい。ヲ、目醫者
と成て入込し。此贅宅が本名は。孫八が兄池添孫六。志津馬様

「俗姓」は本名に同じ、
佛名の法名に對していふ、

「船装束」は船頭姿をいふ、

と言合せ。明らかな兩眼を目病と偽り。儕が俗性敵の行衛を知ん爲。首尾よふ參つた櫻田殿と。云はれて恠り。「ヤ、ハ、ハ、スリヤ又五郎を見出さん爲。言合せて有たよな。此上は一味の者へ。告知せんと驅け出る。敵の加擔人逃さじと。拔手も見せず主従が。劇しき手練の働きに。さしもの櫻田叶はじと。旅宿をさして逃込だり。ヤアいづく迄もと孫八志津馬。驅入らんとする奥の間より。とつこいならぬと吳服屋十兵衛。かけ隔て支ゆるを。血氣の志津馬が切先に。肩先すつぱり切下られ。うんと倒るゝ其隙に。奥を目がけて驅入るを。「ヤレ暫くと聲をかけ。濱邊に繋ぎし笠舟より。船装束を其儘に。武介引連政右衛門。しづくゝと歩み出。「手に入た敵なれ共。爰では討れぬ仔細有り町人ながら義心有る。十兵衛が此深手。非道に組せし先非を悔志津馬が手にかゝりしは。本望ならんと有りければ。手負はむ

「小倉堤」は山城の紀伊

久世二郡に跨る、巨椋の池の堤道なり、池は周囲四里に餘れり、

「伊賀越」は大和の奈良より伊賀を越えて伊勢に通ずる街道、

「鳥羽港」は志摩國志摩郡にありて、伊勢の山田を去る東三里許、熊野浦と遠州灘との中間に立ち、伊勢の海の門戸をなす、これ等の道筋は皆歴史によりて書けるなり、總解を見よ

「九州相良」の事は沼津の段を見よ、

「寸志」はいさゝかの志「吳服が冥途の晴着」面白し

「島山政家」は持富の子にして持國の養子なり、義就と家督を争ひて應仁の亂階をなせし人、餘計ながら、

つくと起上り。「ナ、御推量の上は我所存。今更くどく申すに

及ばず。又五郎始め一味の者共。西國へ落失ては。御本望の妨

げと。政右衛門様の計略にて。最前の似せ飛脚を。誠と心得裏

道より。小倉堤を伊賀越に。志州鳥羽の港より。大廻しにて九

州相良へ。落失んとの言合を。「お知らせ申して相果るが。志津

馬様へのせめての寸志。町人なれ共敵の端くれ。又五郎に頼れ

た。一つの命を兩方へ。わけて願ひは此上ながら。ナ、瀬川が

事は政右衛門が。刀にかけて志津馬に添はす。ハ、武士の鑑の

政右衛門様。其御一言は。吳服屋が冥途の晴着。サアく片時

も早く追着て。此年月の御本望。はやくくと氣をいらつ。手

負に取付く妹が。歎くを制して政右衛門。「ナ、いかにもぼつ付

討留んは。我掌の中に有りと。志津馬が亡君上杉殿の御家門た

る。島山政家公よりする置れし。宇内公の石碑有る。伊賀路に

「上杉顯定」は鎌倉の管

領、山内家七代の主、永正七

年長尾爲景と長森原に戦ひ

て、討死せし人なり、其弟

房能府内の城に居たれば宇

内公の名はこれに思ひつけ

るか。こは穿は過ぎにても

あるべし、又伊賀上野の上

行寺は、藤堂家墳墓の地な

れば、これ等の事より作れ

るか、よくも知らず、

「初更」は戌の刻、今の

午後八時、

「手負を跡に三つ瀬川」とか

け「三途の瀬ぶみ」とつゞけ

たり、三つ瀬川は三途川、

三つ瀬のあるゆゑの稱なり

冥途の入口にありといふ川

十王經に見ふたり、

において本望達する物ならば。泉下にまします顯定公。靱負殿へ

の追善ならん。譬へ何百何十人。彼に力を添ゆる共。天理に背

く敵の介太刀。何條恐るゝ事有らじ。時は初更の戌の刻。先へ

廻つて伊賀越に。多年の本望今此時と。唐木が諫めに力足。手

負を跡に三つ瀬川。三途の瀬ぶみは敵の魁。さらばくを夜嵐

に。聲吹分る海道筋。跡を慕ふて。「急ぎ行く。」

伊賀越乗掛合羽 圓覺寺の段

總 解

伊賀越の淨瑠璃は。通常婚禮の段より後は。道中雙六を。其前は乗掛合羽を用ふることゝなり居れり。しかして乗掛合羽の中。圓覺寺の段は殊に有名にして。よく行はるれば。こゝに通解することゝなせり。

淨瑠璃は一部通讀すれば。往々前後取合はざる點を見出すことあり。これ數人の作者が。大略の筋立を定め。各自段を分ちて作りたるものを。通ずるやう續合せしによる。かゝる事に注意少き作者に對し。深く咎むるを好まずといへども。失は失とせざる可からず。まして異なる兩作の一半を割きて。續合するに至つては。撞着の箇所を生ずるは免るべくもあらず。殊に半二か完成せる玉

篇の一部分を飲み瓦礫を以てこれを補ふが如きは。斯道の人の文學に眼なきを表するは勿論。聞く人までも思ひやられてよしなきわざなれば。早くあらためたきものなり。

此淨瑠璃の原作は初代奈川龜助にして。近松東南が其まゝ淨瑠璃に仕組み。安永六年三月廿六日。北堀江座の興行に上せしものなりといふ。道中雙六より前の作なれば。半二がこれによりて作れる事論なけれど。文章などは到底比すべくもあらず。此段の如き。拙き筆と淺き思想とを以て。無闇に巧を弄したれば。如何にも作り物らしく。只混雜せしまでにて。いふに足らず。

圓覺寺の段

「入相のかれて覺悟」
と

かけたり、紋切形
「などか別れの悲しき」

古今集離別に「命だに心にかなふものならば何か別れのかなしからまし」

「謎」 は何にても意を寓して解かしむるをいふ、もと解かしむるに「何ぞく」と問ひかくるよりの稱、

「漂ふ笹尾船」 とかけたり、笹小船は、小供の水に浮べて遊ぶ笹船のこと、夫木集「うなぬ子が流れにうくる笹船のとまりは冬の氷なりけり」

「丹右衛門」 は笹川團右衛門に取れるなり總解を見よ、

圓覺寺の段

入や入相のかねて覺悟の命だに。などか別れの悲しきと。古

歌の心も身の上に。謎は解ても解かぬる。胸の思ひを押懸し。

詞此娘は何處に居やる。笹尾。笹尾は何處にと母親の。詞洩聞

一間より。夫に別れて便無。母諸ともに何時よりか。爰に漂ふ

笹尾船。薦々として立出る。詞ヲ、娘。其方に言て悦ばそふと

最前から尋ねて居ました。コレ離縁仕やつた丹右衛門殿。追付

御使者にござるといふ。ヲ、アノ母様の分別も無。私や忘れ

ふと思ふ物を。ひよんな事聞た故。懷うなつた夫の顔と。涙含

ば。詞エ、氣の弱人では有。コレ何にも案じる事は無い。元の

通り女夫に爲るわいの。エ、夫や眞實でござんすかへ。ヲ、眞

實ともく。可愛娘に何の腔。エ忝ふござんすと。いそく

「もや／＼」 は物思ひに

心の暗れぬをいふ（もやの
かゝる如くなるよりの語）

「そこをそなたが云々」

これ淨曲の紋切なれど、最
も鹿つべらしき役目の使者
に向ひ、かくの如き事を教
ふる母もなかるべく、又下
の如き挨拶をなす娘もな
かるべし、

「間も押へも我れ一人」

興奮劇ならんも、娘には似
合の酒量と見ゆたり、

「白刃の林に入る」 至極

の危険を犯すをいふ、白刃
はむき身、

「管領」 の稱は足利義滿
の時、斯波細川畠山の三家
之に任ぜしに始る、天下を

悦ぶ笑ひ顔。詞ヲ、嬉しいは道理々々。追付爰へ見えるで有ふ

が。此間からの煩悶で、顔付も悪かるけれど。其處は其方が面

白可笑う。久し振な御使者の口上。承はつたり。コレ別れたり。

ホ、ホ、ホ。チ、儕とした事が。ヤドレ／＼。其間に何角の用意。

コレ必心落し付。日比は固い駕殿を。和らげてたもいのと。堅

い育も子故には。粹を利用して奥へ行。跡に笹尾は只一人。詞彼

様に仰しやるからは。定めて深い御思案が。有ふと思へど落付

ぬ。胸は様々兎や角と。案じ煩ふ表の方。詞御使者の御入。サ

ア／＼／＼。最ござんしたわいな。エ、ヅ、トモウ。今日に限つて

粧も爲ず。此マア髻のばらつき様。逢て如何して斯言て。心ば

かりが急がる。胸は轟々有合ふ銚子。是幸ひと盃に。引受々々

間も押へも我一人。早入来る丹右衛門。白刃の林に入が如き敵

の中。數多の家來を彼處に残し。惶る色無く打通り。管領細川政

管領するといふ意にて鎌倉時代の執權と同じく第一の重職なり、

「細川政元」は勝元の子文龜四年臣の爲めに殺さる名をかりて池田忠雄にあてしなり

「にべも無き」は少しの

ねばりけもなく、無愛想なるをいふ、後に委しくいふべし、

「返答も改まつたる」と

かけたり、

「此御小袖では無いものを」

云々女のいひさうな事なり「しつけ」は下縫ひの糸をいふ、

「尾籠」は無禮の意、もとをこ（鳴瀬）の當字なりしを、びろうと音讀せるなりといふ、

「昵近衆」は幕府の直臣（旗本）をいふ、近習の昵近

元が使者。取次せよとにべも無。詞に今更返答も。改まつたる耻かしき。怖き嬉しき揉手に笑顔。詞ヲ、我夫では無い御使者様。是はマア御苦勞千萬に。マ能顔見せて下さんしたと。愛想に差出す煙草盆。御使者にも此間は。定めて御獨御寝なつて。嚙御淋しう。ホ、ホ、ヲほんにマア。エ、エ。嬖ども、氣の付ぬ大切な御使者の御役目。御勤成るゝ其時は。此御小袖では無物を。儕が些少の間屋敷に居ぬと。ヲ、そふして小袖の躰も其儘。ドレ、レ、取て上ませう。ヤア使者の前とも憚からず。立噪で尾籠千萬。昵近の者どもへ。嚴命の趣有て。差越れたる管領の使者。男たいした者は居ぬか。サア御寺の事故男は法度。女許りでござります。ヤア様々の戲言。使者の様子を悟りし故。會合したる昵近原。又五郎諸ともに。此處を落せしな。一つ穴の狐め等。括し上て一詮議。覺悟ひろげと立掛れば。笛尾はわつ

とは異なり、
「一つ穴の狐」 一つ穴の
貉ともいひて、同類のこと

「可愛く」 は鳥のなき
聲、「啼て暮々」とかけたり
「夜明、暮々」相應ず、ほめ
た文にはあらず、

「逢に相生の松こそ云々」
謡曲高砂「四海波しづかに
て、國も治まる時つ風、枝
もならさぬ御代なれや、あ
ひに相生の松こそめでたけ
れ」
「狂氣ばし」 のばし強
い、ひ入るゝ語、

と泣出し。詞餘りつれない丹右衛門殿。邪非道の弟に。組した
かとの御疑ひ。無理とは更々思はねど。義理有弟大事の夫。何
れを何と分かねて。心一つに取つ置つ。言ては怨み怨んでは。
一人明する夜明の鳥。可愛々と鳥さへも。啼て暮々何事も。
因果盡じやと諦めて。御側に置いて下さんせと。口説歎を。詞ヤ
ア又五郎をがばふ其方達親子。如何程泣ても叶はぬ事と。取て
つきほも障子の内。火影と俱に聲高く。詞運命盡たる此又五郎
繩打て城五郎殿の。身の分疏を立られよ。サ早くくと覺悟の
詞。イデ召捕んと駈行を。マアく待てと取絶る。笹尾を踏退
踏飛し。駈入んと爲る一間より。詞又五郎を御渡し申さん。聶
殿暫しと障子押明。逢に相生の松こそ。愛たかりけれと。謡ひ
祝して母鳴海。長柄の銚子三方携へ。靜々と立出れば。詞ヤア
我子の別れに取亂し。サ狂氣ばし召れしな。ヲ、狂氣とも見ゆ

「御乳の人」　ほうば、

「奥様」は、婦人は奥むきの事をつかさどるよりの稱枕草に「人の妻を奥様といふ事、古はなし、近世の稱なり」

「袖に」は、ふりつけ邪魔物にするをいふ、

「位牌」はもと儒家の位版（神主とも木主ともいふ）を、佛家にかり用ひたるものなりといふ、

「子を見殺すも世の義理と」これ義理と人情との衝突

るは尤。又五郎を手渡しする迄。サ改て一つの願ひ。マア。マア。御下に御下にと。押靜めて衿搔合せ。詞御話し申すも耻しながら。斯言妾は爰に居る。笹尾が爲には御乳の人。母御は産後の御煩ひ。今はの枕に御遺言。此子の事を頼むぞと。仰を請し此鳴海。夫より其方を大切に。育參らす其内に。又左衛門様の御手が掛り。産落したは又五郎。男の子とて御寵愛。私も鳴海と改めて。ハア、有難い奥様成。本の子が出来てから。繼子を袖にと言れぬ様。撫つ擦りて育上。ヤン好聲取たと奥様の位牌へ自慢心の嬉しさ。が所に思はぬ今度の災難。飽ぬ離別の其本は。血を分た子の又五郎故。憎さ悲しさ切なさは。言ても泣いても詮無悔。思ひ切て又五郎を手渡しする。詞心に免じて此娘と。元の通り夫婦と成。盃をして下され。子を見殺すも世の義理と。推量して此母が。願ひを何卒叶へてと。手を合すれば

「藁の上から」は生れた

てから、

「未來永々」はいつまで

もの意、佛經の語、

「因果同士の寄合と」

く用ふる語なり「因果同士が廻り來て」世界の因果がたまつて」

娘も涙。詞アノ母様の勿體ない。藁の上から御世話に成。苦に
 苦を掛て其上に。又も不便と思し召。義理有弟を目の前で。御
 渡し成るを是がマア。何と承らへ居られふぞ。詞イヤく其方
 を殺しては。冥途にござる奥様や。爺御へ何と言譯せふ。大惡
 人の又五郎は。未來永々勘當すれば。澤井の家も是限り。是も
 何故此母が。育がらじやと御先祖の。嘸や御恨み成れふと。思
 へば身も世も有れふか。身腹分ねど其方の孝行。我子は明日を
 知ぬ刀の錆。親も因果其方も因果。因果同士の寄合と。親子手
 に手を取替し。前後正躰泣涙。四の袂に淵なせり。不便と思へ
 ど少しほれず。ホ、切なる老母の願ひなれど。私ならぬ使者
 の役目。ム、夫なら如何でも此願ひは。罷ならぬ適はぬと。聞
 より鳴海は懷劔拔持。自害と見ゆれば娘は悲しく。詞マアく
 待て下さりませ。御命に替夫程に。思し召て下さるとは。餘り

「冥加恐しい」
は神佛の
罰恐しいふ意、

「無理、義理」
調なと、
のへたり、

「唐土珠厓の母子云々」

珠厓は支那廣東省海南島中の郡名、珠の出づるより名づく、此語は聞けど、出典は知らず、なほ尋ねべし

「事を准へし學」
はまれ

事といふ意、

「花も實もある」
は摘ひ

て美しく誠あるをいふ、

「變らぬ濃茶」
とかけた

冥加恐ろしい。私も一所に冥途の御供。親の御慈悲に殺してと。
縋り留れば母親は。チ、能言て賜つたなア。其孝行が又五
郎に。百分一でも有ならば。斯言歎は有まい物。コレ推量して
下され。得心も無益を。無理とは知と義理と云ふ。二字に
命を捨ねばならぬ。止めずと殺して下され。イエ、私を。イ
ヤ私をと。命惜まぬ母娘。最期を争ふ貞心貞女。感じ入て横手
を打ハ。誠や。唐土珠厓の母子。玉を携へ關を越。計らず國
の掟を背きて。サ其科は我也。イヤ我也と争ひしを。關守其義
心を憫み。二人を助し例も有。ム、ハア、く此上は是非に及
ばず。又五郎さへ御渡し有ば。夫なら母が此願ひ。ハテ盃こそ
は成ずとも。事に准へし學びなりとも。ア、忝い。花も實
も有今の詞。御主人への聞え有ば。盃は表立。ハテ如何がなと
思案の奥の間。チ、幸ひのアノ圍。夫婦の中も變らぬ濃茶。無

「母の涙の霰釜」 霰釜は外面に霰の如き形ある釜「自在の竹の千代」 自在は自在釣の略にて、爐の上に鍋釜を釣るもの、茶席にかゝるものあるまじけれど縁にて用ひたるのみ「柄杓のゆにし」 思ひの蓋置も明けては「泉の水溢し」とかけたり、皆縁の語、「島臺」 は前にいへり、一長柄は柄の長き跳子、

調法な母が手前。善は急げと搔立て。義理の娘を助んと。願ひ
適へば又一つ。眞身分たる子の命。今宵に逼る悲しさを。胸に
隠してとぼくと。圍へ這入る後影。伏拜む目に浮く涙。母の
涙の霰釜。自在の竹の千代までも柄杓の縁長かれと。親の思ひ
の蓋置も。明て言れぬ數々は。盡ぬ泉の水溢し。夜會に花は活
ねども。老の手前ぞ花香かや。心赦さぬ丹右衛門。坐敷の隈々
奥の間に。眼を配つて控ゆる坐席。詞ヲ、二人とも嘸待遠。サ
ア、今こそ願ひの通。島臺より長柄より。猶々目出度澁茶の
盃。其方が吞で聲殿へと。娘の前に差置ば。母様の御蔭故。嬉
しい悲しい此盃。シタガ暫しも隔た中。サ此儘では。ヲ、夫々
斯した場所なり。聲殿の疑有も無理では無。毒味と云例は無れ
ど。母が先へと手に取上。一口吞でサア娘。早ふくと隔無。
母の心に落付娘。押戴て口を寄。夫の前に差置ば。丹右衛門手

「千秋萬歳の云々」 謡曲

難波雪は豊年の御調物、ゆるすゆゑにやなく、に、いやましに運ぶ御寶の、千秋萬歳の千箱の玉を奉る」「南無三寶」 失敗の時などに發する語、前に解せり

「五臟六腑」 は肝、心、脾

肺、腎、の五臟と、大腸、小腸、胃、膽、膀胱、三焦の六腑、惱亂はなやみみだること

「紫霜石」 は砒霜石なる

べし、俗に砒石といひ、銀銅などの鑛を吹き分くる時出で、凝結するもの、劇毒なり、別記を見よ、

に取上。姑御の手前と申。服加減も嘸かしく。チ、愛度々々。是で母も落着ました。千秋萬歳の千函の玉を奉る。早九つの鐘の音も。耳を貫く丹右衛門。南無三寶時移る。約束の時刻延引せば。攻寄んと有主人の仰せ。猶豫ならずと立上る。膝もがつかりたちく。思はず後へにとつかと坐す。並居る老母笹尾も俱に。悩み苦しむ其有様。詞ア、ラ不思議や。熱氣盛んに燃るが如く。五臟六腑腦亂するは。ハテ心得ずと刀を杖。むつくと起立強勇も。忽變する其面色。ハ、ハ、ハ。チ、智殿苦しいか。泣事に滴されて。満真と一盃や食ふたな。ム、スリヤ我々に今吞せしは。チ、毒じやわやい。唯た一口吞でさへ此苦み。女夫に成が嬉しい迎。餘慶喰ふた今の茶に。調合した紫霜石。チ、悶くはく。コリヤ悶いても最叶はぬ。次手にはをと懷へ。指込手先に差出す御書。夫遣てはとよろばい。駈寄目先へ

「種が島」はもと鳥銃の稱、後には短銃をいふ。(天文年間葡萄牙人大隅國種が島につたへたるよりの稱)

「髪逆立て」激怒すれば髪逆立つものといふ。「壯士髪衝冠」なほ後にいふべし。

種が島。寄ば討んと身構へたり。扱は其御書を奪ひ取。又五郎を助ん爲。毒藥を以て謀りしよな。アレく聞ゆる鐘太鼓は。某が返答延引故。早攻寄る主人の性急。左有時には御家滅亡。心を碎きし甲斐も無。女童に誑かられ。不覺の最期を遂る事。よくく武運に盡しかと。夫の詞に女房が。俱に涙の聲を上。今の今迄實心な。母様と思ひしが。義理有聲や娘をば。殺して我子を助ふとは。義理も法も辨へぬ。慘い難面心じやと。恨みの數々算へ立。算へ立たる有様を。見るに夫は不便さと。恨に恨の老女めと。憤の眼に血を濺ぎ。髪逆立てはらくく。無念の涙は紅の。絲を亂すが如くなり。老母は心に笑を含み。ヲ命捨たもコリヤ。又五郎を助ふ計りじや。細言云ずと潔よふ。くたばれく。ヤア親子ともに。揃も揃ひし極重惡人。丹右衛門が死物狂ひ。又五郎が首取て。冥途の土産と駈行向ふへ。一

「觀念」は覺悟、あきらめなどの意、佛經の語、

「おこと」はそなた
「血判」は神文誓詞などの記名の下に、指を刺して血を捺すこと、最も至誠信實の意を表するなり、鹽尻に「佛書にはかゝる事多し」と見れば、もとこれより出でしか、

味徒黨の昵近武士。ばらぐと駈塞る。詞シヤ物々しき徒黨の奴原。冥途の先駈觀念せよと。多勢に屈せぬ手利の働き。縦横無盡に薙立く。暫し時をぞ移しける。只一人に切立られ。逃行く多勢を遁さじと。跡を慕ふて追て行く。娘は有合ふ刀追取。夫の讐と切付る。小肘取て引敷折しも。詞ホ、始終の様子見届たり。適れ老女心底見へしと。襖押開け城五郎。奥の間より立出れば。詞ヲ、申合した通り。まんまと首尾好此御書も。ホ、出かされたりく。頼みの如く又五郎も。人目を欺く女乗物。皆々付添ひ裡門より。ハ、重々の御情。死でも忘れぬ此上ながら。ヲ、言にや及ぶ。我大望成就するも。おことが健氣の勵故。最期の際に某が。所存残らず明して聞んと。懷中より取出す一卷。押開いて差出せば。兩手に取て讀下し。ム、叛逆徒黨の連判狀。紛を始め多くの血判。サレバサ。多年の本望達せん爲。我大望

「御教書」は將軍の下し文、委しくは後にいふべし

「應仁の亂に亡びたる云々」ふらい所へ持込んだもの、

應仁の亂は後土御門天皇の御宇にして、將軍義政の時なり、山名宗全と細川勝元との確執。斯波義廉は澁川義紀の子、宗全の女婿なれば、應仁の亂に山名につく、山水の畫に巧なりし人也、作り事なればいふに及ばれど、後の爲にも一言す「足利四海」は足利天下「引出物」はもと饗宴の時など馬を引出して客に贈りしよりの名にて、後には初對面など種々の場合に與ふる物にいふ、「小筒」は種が島にいふ

の柱と成るべき上杉家督安堵の御教書。盜置しも我術。冥途の土產拜見せよと。手に渡せば莞爾と笑ひ。一天四海を望に似合ぬ。僅一國一城の。上杉家督の此御教書。ホ、其不審尤々。何をか包ん某こそ。應仁の亂れに亡びたる。山名が一類斯波の義廉遺恨有る上杉一家。細川一類滅亡させ。其機に乗して旗上し。頓て足利四海をも。覆さんは瞬く内。あら心地好面白しと。勇立たる其所へ。昵近武士を切散し。立歸る丹右衛門。目指敵と小跳し。血刀打振駈寄を。鳴海は聲掛。ヤレ智殿。今城五郎殿の所存の程。聞て安堵召れしか。ハ、ア嬉しや本望や。今こそ婆が願の通り。御教書ばかりか連判まで。此方への引出物。ソレと投遣用意の小筒。狙ひは見越の松の枝。相圖の知せにばらぐと。現はれ出たる黒裳束。義廉覺悟と數多の捕手。筒先揃へて追取卷。見る義廉恟り仰天。ヤアくく。スリヤ我所存

「天なるかな命なるかな」
天命なるかなといふ意、

「四苦八苦」 は斷末竟の
苦み、佛經の語、後にいふ
べし、

を採らん爲か。ホ、上杉の家を亂さんと爲る國家の大事。母女
房と示し合せ。命を捨て謀りし故。再び手に入此御教書。ヲ、
夫故にこそ大事の聲殿。義理有娘此母まで。命を捨るは又五郎
が。縁を引たる御主へ云譯。ヲ、又日外御主人登城の折から。
鐵炮を打掛しも汝が所爲。サア速に切腹するか。異議に及ば、
家來の筒先。何とくと詰かくれば。無念の吐血血走る眼。進
退爰に究りしと。物をも云ずどつかと坐し。諸肌押脱氷の刃。
ぐつと突立息を續。ハ、天哉命なる哉。巧に巧みし多年の大望。
斯も一時に顯れしは。武運に盡たる此義廉。サア首取て手柄に
爲よと。眼閉たる健氣の最期。イデ介錯とよろばい。立寄
此方は母女房。心緩めば身も疲れ。今ぞ別の四苦八苦。見遣る
夫も直に往く。必未來でくと。涙溢さぬ武士の。忠義鋭き双の
光。南無阿彌陀佛彌陀佛の。聲も紛々責太鼓。物喧囂く聞ける。

染模樣妹脊門松及新版歌祭文

總 解

お染久松。今より二百二十餘年前。延寶七年九月廿九日の事とかよ。大阪東區東横堀瓦屋橋附近なる。油屋の丁稚久松といへるもの。二歳なる主家の幼女お染の子守をなし。誤ちて河へおとし入れ死せしめたり。主人折檻の爲め。久松を土藏の中に籠置きしに。縊れ死せりといふ。今なほ瓦屋橋に其土藏残り。野崎村(河内國北河内郡)にあり。大坂城の東北三里餘。有名なる野崎觀音のある所にして。歌祭文に觀音樣といへるはこれなり。余も遊びし事あり。別記を見よに久松の實家ありといへど。取調ぶるも甲斐なし。要するに事實斯の如く。頑是なき。丁稚と。無我なる幼女との出來事なれば。何もあるべき筈なし。さるを種々なる巷説の傳はるは。皆

淨瑠璃より出でたる事なり。

此淨瑠璃の初作は紀海音にして。油屋お染袂の白絞と題し。正徳元年四月八日。豐竹座の興行に上し評判を得たり。次に菅專助。染模様妹脊門松を作りて。明和四年十二月十五日。豐竹座の興行に上せ。近松半二。新版歌祭文を作りて。安永九年九月廿八日。竹本座の興行に上せ。いづれも大評判大當りを得たりといふ。作者の傳は後に載すべし。

こゝに染模様と歌祭文とを並べ載せたるは。讀者をして菅と近松との趣向文章を比較するに便せしなり。趣向は兩作いづれも面白く巧なれど。染模様の方一層巧を弄したれば。作り物めきたる所もあれど。悲愴極まる白骨のお文に合して。今死する男女を歎かしめたるは頗る妙。歌祭文の灸をすうる所なども上々の出来。文章は染模様は華麗にして。歌祭文は流暢なり。前者の初めは

よく書きたり中ほどに至りて巧に陥り。いまはしき筆を弄したれど。お染忍び出のあたりよりは頗る味ひあり。後者は總體に無事にして。意よく暢び老熟する所を見る。

染模様妹背門松

質屋の段

「大きな聲では」と大きな聲で賣あるく書出し、至極面白し、
「しめて、寢油しんとろくろり」よく書きたり、油汗に油の如くところけしならむ、
「祭文くどき」は、鈴木主水の如き心中のくどきぶし、祭文の名はもと中臣氏の祭文に起り、遂には俗間に種々なる祭文ぶしを生ずるに至れり、
「盧生が枕」は、盧生といふ少年が、邯鄲にて五年の夢を見しといふ枕、肝膽に邯鄲をかけたなり、肝膽を砕くは、ま心を砕く（昔支那の邯鄲に、盧生といふ少年あり、身の貧困を歎きしかば、道者呂翁一の枕を

質屋の段

詞此間大坂町々で。御評判の高い色事。此邊で大きな聲では申されぬ事。一人娘と子飼の丁稚。しめて寢油しんとろくろり。
ふしは則祭文口説。上下に致しとち本が六文。大きな聲では云れぬ事じやと。いふも高聲町々の。物騒しき大三十日。質店の帳箱を。盧生が枕肝膽を。砕く久松思ひ寐の。夢驚かす初夜の鐘。ふつと目覺し。詞ハア、嬉しや夢で有たか。したがあの賣聲は生玉で見た歌ざいもん。取も直さずこりや正夢。あれもやつぱり善六めが。拵へて賣すのか。引とらへてと立上りしが。詞イヤくく。留だてしたら身に覺が有故にと人の口。エ、憎いやつ。といふもこつちの得手勝手。所詮死との今の夢。人も世をも恨まいと。又今更に身の覺悟。詞ナフコレ久松くと。

出してこれに與ふ、盧生乃ちかひて寢につきしが、一睡の中に富貴榮華五十年の夢を見、覺れば主人が炊きかけし粟飯の、然せざる間なりしといふ、盧生の夢、邯鄲の夢などいへるは、此故事なり、本文は別記を見よ。

「初夜」は戌の刻、今の午後八時、

「嬉しや夢であつたか」

物おもひにはかなき夢を見、覺めて悦ぶは尤もとして置いて、質屋の帳箱に、しかも大晦日の初夜頃、とろ／＼とまぬらるゝは「しめて寢油」のおつかれかしこれど、あまり氣樂すぎたり、

「歌祭文」は前の祭文くどき、

「正夢」は事實と合ふ夢

思はず店へかけ出るお染。顔見合して 詞「ヤア久松。そなたの身には別條ないか。お前もおけがは。そんならそなたも。お前も夢を。ハアはつと計りにめい／＼が。さいこの夢の夢合せ。幾瀬の思ぞしんきなる。くゞり戸ぐわらりと久松殿。札は晝おこしておいた。布子下されッレ元利と。錢投出して受出す布子。詞「ヤレ／＼嬉しや。既にの事に一張羅を。遠い所へやらふとした。ア命有れば正月に逢てめでたい忝い。とかく命が物種じや。嬉しやめでたや。春の初にゆるりと逢ませふと。いそ／＼歸る辻占を。お染はいさみ 詞「アレ聞きやつたか久松。せんとも死ふと仕やつたを無理に留てけふが日迄。ながらへ居るもどふぞして。一日なりと夫婦じやと。いはれて死たいわしが心。ハテ一寸延れば尋とやら。氣をうき／＼と持やいのと。力付ても心根は。俱にしほるゝ目に涙。なみだながらに稚子を。裸にしたか

「生玉」 は大阪南區、生魂神社のある邊、

「最後の夢の夢合せ」 は

兩人とも後の心中の正夢を見しなり、夢合せばもと夢の吉凶な、うらなひ合する事なれど、こゝは見し夢を合せしなり、

「幾瀬」 はあまたの意、

十六夜日記「思ひ出づる部の事は大井川幾瀬の石の數も及ばじ」

「一張羅」 はかへなき只

一つの衣をいふ、もと一挺蠟にてともしかへなしといふ意なるが、かく轉ぜしなりと、余が故郷三河岡崎邊にては、今なほ「一挺蠟燭ともしかへなし」といへり、もとの残れるにや、
「遠い所」 とは質屋の流刑、

ぬくもりの。さめぬを持てど身は寒き。解わけがけの女房が

詞コレ丁僕殿。こんな小さい物は邪摩でも有し。又直打も有るま

いけれど。こな様の呑込で。どふぞ四百借てくだんせ。しらん

す通り。こちのわろの長煩ひ。親子三人がほんの居喰。正月が來

た迎。樂しみもない娑婆世界。ア、いやゝのく。いつそ死で

仕廻たら。此苦はとんと助からふ。ア、因果ときちかは死かね

ますと。涙にまじる水涕を。すゝり上ればこなたにも。身につ

まされて落かゝる。四筋の錢の目もわかず。渡せば戴きしほし

ほと。歸る姿を見るに付。どふでしねとの辻占かと。又涙にぞ

くれけるが。申しお染様。先度もいふてくどけれど。二人一所

に死ねば心中。恩と情の御主人や。清兵衛様へ義理立ず。わた

しは何ぞ詰らぬ事を。偽ながら書置して。死で仕廻が申譯。お

前はながらへ山家屋へ。嫁入をなさるれば。親御様へは御孝行。

「命か物種」の辻占は死

を覺悟の兩人を、輪廻に落はしむ。

「辻占」はもと辻に立ち

往來の人の無心にていふ詞を聞きて、事の吉凶をうらなへるよりの稱なるが、後には廣く何にても、占ひとなるべきやうの事に用ふ、

遂には辻占菓子^{うらな}の如きもの出來たり、

「一寸延びれば尋とやら」

物事少し延だすと長く延びるといふ諺、徒然草に「一時の懈怠すなばち一生の懈怠となる云々」なほいくらもあるべし、

「目に涙、涙なむらに」

とつゞけたり「溫もりの冷めぬを云々」質屋の置物、しかも大晦日あたりにば、かゝるなきがいくら

清兵衛様のお顔も立。世間にはつと立浮名も。人の噂も七十五

日。其中には沙汰も止。お前のお身も御兩家も。納るはつい今

の事。おなじみがひには折ふしに。只一遍の御回向も。外の干

部萬部より。嬉しう成佛致しますと。跡は詞も泣入れば。お染

は顔をふり上げて。詞ソリヤ曲がない胴慾な。高いも低いも姫

ごぜの。肌ふれるのは只一人。親兄弟もふり捨て。殿御につく

が世の教。それにまだく悲しきは。夕邊の風呂の揚り場で。

詞此腹帶をかく様が。見付けさんしてコリヤお染。其腹帶は何

事ぞ。詞とうから様子しつた故。度々のこは意見。爺御の耳へ

入れまいと。辛抱したかもふかなはぬ。情ない事してくれたと。

泣しみづいてのお腹立。そなたに案じさすまいと。今迄こうと

岩田帶。隠して居たがこんな躬で。どふ嫁入がなる物ぞ。一所

に殺してたものと。膝に打伏しやくり泣。久松はつと吐息つ

もあるべし。
「ときわけかけ」 ときはきわけかけ。
「因果とさちかは死にかれ
ます」 の辻占いよく
かなし、さちかは、大阪に
て、つまりくるしむをいふ、
「つまされて」 は引くら
べられての意「落かゝる四
筋の錢の云々」とつづけた
り、四筋は四百、
「人の噂も七十五日」 世
の評判も一時にして長から
ずといふ諺、東里新談に二
程全書「瀆浪既死、七十五日
而葬」とあるより出でたり
といへど、詳ならず、
「千部萬部」 の部は遍の
意にて、千遍萬遍といふに
同じき由、其道の人より注
意ありたれど、作者は矢張
多くの經文の意にて用ひた
るが如し（僧鐵眼が板行し

き 詞懷妊に成つてござるとは。露程もしらなんだ。そふした
御身にしたからは。千萬いふてもう叶はぬ。成程死ふとおつ
しやるも。無理とはさら／＼思はねど。親御様のお歎を。思ひ
やつて暫しの内。いづくになり共身を隠し。身二ツになり腹な
子を。成人させて下さるが。一所に死んで下さるより。百千倍
の眞實と。あどない氣にも血を分し。子と聞よりも不便さの。
涙に涕添にけり。臺所よりお染／＼と母の聲。それ／＼呼んで
じゃ。マア奥へ。あいと返事はしながらも。心は爰におきの船。
裾もほらく／＼走り行く。かくとは白髪しら梅の。折しり顔に咲
花を。手折つてきなく鶯の。鳴音は月日干蕪。年頭歳暮の禮を
かね。一荷に荷ふ藁舂は。久松が親野崎の久作。詞マ、親父様
せつろしい大晦日。殊に夜に入つてお出は。何ぞ急な用でも有
つてか。イヤいつもは年明てから禮には來ど。今年梅も早ふ

て黄髮山に藏めたる一切經は六千九百三十卷ありといふ。
 「曲がない。は愛想のなきないふ。曲はもと音樂の曲節より出で、種々の意に用ふ。
 「高いも低いも姫御前の云々」これ節操第一の語、しかも野合の果に用ふ、これ淨瑠璃界一種の倫理○ござはござんの略、婦人の敬稱、
 「親兄弟を振すて云々」嫁しては夫に従ふ婦人の教へ、貞節なもの。
 「お染此腹帯は云々」世間此手合の婦女随分多かるべし、余が新調に「母の前にうなたるゝ妹ものゝいはで襷足赤しなに聞くらんか」
 「泣きしみづいて」は、

咲。歳暮の禮を兼るに。春來はいな物と。どちらもはづさぬ様に。境目の大晦日。嘉例の生花。旦那様へ上ましてたも。此干蕪も又嘉例。皺のよる迄お出入をする様に。お家様への手みやげと草鞋とくくお上に上り詞コリヤ久松。此お家こそ金持で。きはの拂はいつでも一昨日。ちやんと仕舞てモウ正月の様なれど。おいらが在所は今頃が合戦最中。中々來られる譯じやなけれど。一時も早ふと氣をせいて來たはナ。いつがいつ迄鋤鋤取つても。よい果報も掘出されず。幸隣の與四郎が妹のおくめを。此中貰ふておいたも。おぬしが隙を旦那へ願ひ。連ていんで身上渡し。一枚敷を圍てなりと。おらは隠居する心。旦那へ禮は付たりじやと。落付顔に云ひ出すを。聞く久松は死神の付たる上に在所の。女房持つてはあれ程まで。思ふて下さる娘御へ義理立ずと。思ふ色目を押隠し。詞親父様何云しやる。わ

しどに泣くをいふ、涙に
ひたるよりいふなり、
「こふと岩田帯」とかけ
たり、○岩田帯は結肌帯の
轉訛にして、字をあてたる
なり、懷妊五月目にしむる
腹帯、別記を見よ、
「あどない」 ば子供ノ、
したるをいふ、
「心はこゝに沖の船」と
かけ「裾もほら／＼」とつ
づけたり、
「かくとはしら髪白梅の云々」の意は、かくとも知ら
ぬ白髪親父の久作が、春の
折知り顔に咲ひそめた、白
梅の花を土産に、手折つて
持つて来て、鶯の如く鳴く
音は盡きず、干蕪籬を云々
といふことなるべし、白髪
白梅と調をととのへ、梅の
縁にて「來鳴く鶯の鳴く音」
とつづけ、つきじな月日と

しが年はまだ七年。是から先が御奉公。留守預つたり此様に。
店の用にも立最中。そんな事云しやつたら。旦那様の御腹立。
もふ逢ずといんで下され。親父が禮にわせましたと。よい様に
いふておこ。サア／＼早ふとせり立つる。詞ハ、ハ、賢い様で
もまだ子供じや。縁付の事や親の跡立る事はナ。どこの山椒太
夫でも。悦んで隙くれるは。世間に何ぼも有る事。旦那はいふ
たら早速に。隙は扱置召おろしの上下を。貰ふて見しよと立つ
を引留め詞ア、コレいかにこなたが文盲な土百姓でも。相應な
義理と法とは捨られまい。八ツの年から爰へ來て。西も東も知
らぬ者を御夫婦のお世話になり。手ならひ算盤夜々は。四書の
素讀も習はして。親より深い御恩を捨。禮奉公もする筈を。年
季の内にとふ出られふ。イヤモ無法な人じやとやり込れば。久
作額に青筋立て。詞ホウ親方のおかげで。物讀したしるしか。

かけ、其縁にて干（星をか）
 く）かぶらといへるならん、
 かけ詞と縁の語とに執着し
 て自ら苦み、巧ならんと欲
 して拙きに陥れり、これ此
 種の作者の一大欠點にし
 て、近松出雲の如きも多少
 此病に罹らざるはなし、C
 「年頭歳暮の禮なかれ云々」
 の句面白し、
 「せつろしい」 は暮の押
 つまつて忙しきないふ、「節
 臘敷」など書けど、當字な
 るべし、
 「嘉例」 はよきまゝり、
 「御家様」 は主婦の敬稱
 「草鞋とくく」 とかけ
 たり、
 「さばの拂は」 は大晦日
 の拂ひ
 「今頃が合戦最中」 至極
 面白し、
 「よい果報も掘出されず」

さつぱりとした詰開。道筋が立つて面白い。おりやしる通明盲
 いろはのいの字は右からやるか。左からこしらへるか。其譯は
 しらね共。大恩受けた親方の娘御をそゝなかし。徒かはく學文
 はよも有まい。と思ふて居るはい。コレくそりやマア何を聞
 はつて。埒もない事云しやんな。ヤイくく。ぬかすなぬ
 かすなあらがふな。そふく噂聞た上。たつた今長堀の姉が所
 へ寄たれば。お家様から此御狀。久松に意見してくれと。コリ
 ヤヤイ大盜人の儕にな。まだお慈悲な内證で。頼んでおこさし
 やる心の内。有がたいやらおいとしいやら。儕をあら立たら片
 相手が。死るの生るのそれ悲しさの狀使。殊にれつきとした聳
 殿の。極つて有るお娘御。それを取込嫁入を。ちやゝ入れて變
 改させ。此跡式をしてやらふといふ。儕こりや悪工じやな。も
 し子に迷ふて。義理有る聳殿の縁を切。儕を娶せ花香もないな

黄金の釜を掘出せし咄、おもひ出されてよし「掘出す」の語「鋤鉄」にかゝれり、「死神」は人を死に誘ふといふ神、横死などせし者の霊と稱す、正しき書には見ゆすとぞ、「わぜました」はこれれました、和訓栞に「おぼする」の轉訛なるべしといへど、ばせた(走の意)の訛にてもあるべきか、「何處の三莊大夫でも」はどんな残酷な主人でもか意、三莊太夫は山椒太夫とも書き、丹後由良の人に於て、勾引されて其奴婢となりし、岩城判官の二子を虚使せし由、和漢三才圖會に見ゆ、後三條天皇永保中の事なりと、後に委しく記する時あるべし、「文盲」はあきめくら、

い。お氣にも染ぬ祝言させ。隣傍へ歴々の聲や舅の。行通ひ見る度々に。エ、むやくしい。娘一人を棒にふつたも。久松の犬めゆゑと。一生睨付けられて。何の手がらに成事じやぞいヤイ。六十に餘る此親はな。麥飯に五斗みそ汁。榮耀喰はよふせねど。在所住居の氣さんじに。腰屈る相手もなく。惡を勧める友もなければ。今日を眞直に暮すこそ人間なれ。外道な事じて榮耀がしたいか。ア、其様な根性とはしらず。コ、此足のあか切を見をれ。二三月の頃の餅の様に。ほつかく割て有と。此つめ此足袋が分相應。戴きおれとばたかく。たたく眞身のこは意見。惡口ぬかした此頃。ゆがまぬがまだふしぎと。又ふり上げててうくく。身の誤りと親の慈悲。骨身にこたへ詫涙。お染はかけ出で。コレくく久作殿。久松の業じやない。皆わしから起つた事。堪忍してやつていのと。押隔ればうらめしげに。

「四書」 は大學、中庸、

論語、孟子の素讀は讀方、

講義に對していふ、

「埒もない」 は無法の意

馬の埒なきが如き義なりと

いふ、

「長堀」 は大坂東横堀よ

り、東南兩區の界をなし、

西横堀を過ぎ、松島橋の下

にて、木津川に會する堀、

「れつきとんた」 も歴々

も同じ事、立派の意、歴々

は物のあらばれて見ゆるこ

と、これより來れるなり」

「ちやゝ入れて」 は邪魔

入れるをいふ、俗にちやち

や入れるといふに同じ、

「花香もない」 は何のか

うばしき所もなきをいふ、

「むやくしい」 は無益な

いかしたるなり、

「棒に振る」 は無駄にす

るをいふ、川柳に「梁ほど

詞ヲ、娘御様。よふ可愛がつて。かばふてやつて下さります。

忝いと云たいに。まだ足袋もはかぬぞよけれ共。儕は小さいから

結構な内に奉公して。樂に育たやつじや物。お仕着の木綿足袋

では。もし冷でもうけおろかと。唐物町三界へまはつて。大ま

いの錢六百出して。見たこともないこの革足袋。畜生の様な儕

に。はかそふとて買てはこぬ。親の意見の杖も穢。畜生の革で

拵へたたびが。エ、聞えませぬ。天にも地にもかけがへのない

此忤め。立身がさせたさに。八ツの年から御奉公。其大事の一

人子を。木の空へ上る色事。よふ教て下さりましたのふ。ひよ

つとでんどの沙汰になり。主の娘を密夫と。青細引でもかゝつ

たら。何と身も世もあられませふぞいの。それが不便さ氣づか

ひさ。一年に一度の元日も。打捨てお隙の願ひは。皆あいつが

可愛さから。其親の心もしらず。在所へいなぬと意地ばるも。

の木を棒に振る下手大工」
「五斗味噌」は糶五斗、大豆一斗、麴三升、鹽五斗を糶合はせて、作れるまづき味噌、三十日を過ぎて用ふべしと、昔は多く軍陣に用ゆ。
「氣さんじ」は氣樂の意「此足の赤ぎれを見なれ」これを見せしめにすべき青年、今の世に頗る多し。
「仕着」は主人よりうくる衣類をいふ、俚言集覽に「柳亭高屋氏曰く、召仕の男女にとらする服を、しきせといふ、四季施、仕着など書げり、昔の俗書に四季着と書きたるがあり、此字用ふるがよし」と見ゆ、さばしきいせの約りなるべし。
「唐物町」は東區船場にあり、三界にあたりまでの

大方おほかたこな様の腰押こしおしじやなと。慮外りよぐわいを申しますも。詰つまる所ところはあいつが爲ため。コレよいお子こじや。ふつゝりと思おもひ切きつて。おれは嫁入いりいする程ほどに。在所ざいしょへいねとたつた一口ひとくち。おつしやつて下くださりませ。お慈悲じひじや申まをしと手てを合あし。飜こはす涙なみだに洗濯せんたくの。布子ぬのこの糊のりも落おちぬらん。詞ことばア、コレく。旦那様だんなさまの居間いまが近い。まそつと靜しずかにくと。暖簾のれんを上げてお染そめが母はは。はつと驚おどろく久松親子ひさまつおやこ。詞ことば何なんにも驚おどろく事ことはない。様子やうすは皆立聞みなたちきした。子こを持親もつおやの心こころは一ツ。娘むすめに恨うらみ我子われがこに異見いけんも。皆子みなこに迷まよふ親おやの因果いんぐわ。詞ことばわしとても其通そのとほり。恨うらみつらみの久松ひさまつめ。憎にくい仕方しかたも立腹りつぷくも。もふかふ成なつては呵しかる段だんは退のけて置おき。主しうが家來けらいに手てをさげて。頼たのまにやならぬ娘むすめが事こと。詞ことば云號いひなづけの清兵衛殿せいべゑだん。元もとはお主しうの若旦那わかだんな。小ちひい時親御ときおやごに離はなれ。後見けんの太郎兵衛殿たろうべゑだん。御一家衆ごいつけしゆうやお町中まちぢゆうが。伯父分おやふんになされたも。本家ほんけを疎略そりやくにさせまい爲ため。二人有子供ふたりあるこどもの内うち。妹いものお染そめを本家ほんけの

意、もと佛語より出で、遠
 き處を經めぐるにいふ、
 「犬まい」 は多額の金に
 いふ語、もと餅銀より出で
 たりと、後にいふべし、
 「皮足袋を畜生の様な」
 もと足袋は革にて作り單皮
 踏皮など書きしが、後布に
 て作るも、其名を襲ひてた
 びと稱す、よくいひたり、
 「異見の杖」 ば、杖にて
 打擲するよりいふ、
 「木のそらへ上る色事」
 は、密夫をいふ、間男はは
 りつけの刑に處せらるゝと
 いふよりの事にて、久作が
 威し文句なり、
 「でんどの沙汰」は表面きの
 沙汰の意、世間一般の評判
 にもいふ、大阪の俗語なり、
 「青細引」 は罪人を縛る
 繩、
 「腰押し」 げ尻押し、

嫁にと。媒はお宿老様。其土智の清兵衛殿。男氣な生れ付。旦那
 殿やわしら迄。常々から大切に。伯父と敬ひ氣を付て。朝夕の間
 音信。分けて先度の太もめも詞身に引かけて世話の上。勘當する
 多三郎。女郎諸共預つて。何もかも一人の吞込み。お染が不義
 も知らぬ顔で。變改もさつしやれぬは。こちとが心を休る爲と。
 娘に疵を付けぬ了簡。其志を無下にして。嫁入の變改は。ならぬ
 が浮世の義理順義。爰の所をよふ聞分。詞是迄の縁と思ひ切り。
 どうぞ在所へいんでたも。久松頼む。わしが氣を推量してたも。
 此間も夜更てお染が寐間へ行。わつゝくどいつ異見すりや。泣
 て斗居る故に。もし煩ひでも出よふかと。云止ながらも得寐ぬ
 は。つき詰た氣でひよつと又。双物さんまい仕出そうかと。夜
 着にまかれて夜明迄。寒さこらへて寐ずの番。異見するのも聲
 びくに。氣の短かい爺ござや。内外の者にも知すまいと。火鉢

「洗濯の糊」こほき手織
着物は、質朴にして質素な
る田舎老爺の常衣よくいひ
たり、
「御宿老様」は御年寄衆
「順義」は仁義の訛より
字を當てたるなるべし、
「わついくどいつ」はわ
りつくどきつの音便、
「双物三昧」は双物騒をす
ること、三昧はもと佛語に
て、心を專にして他に移さ
ぬことなるより、何にても
其事に一途なるをいふ、
「てゝ御前」の語、通ぜ
ぬにはあらねど、餘り聞な
れず（昔は妻が夫を御前と
呼びし事あり）
「子が無うて泣く者はない」
子寶といはるゝ身にて
世間此の如き者多きは歎く
べし、
「じぐかんでやろ」は鼻

さへ取寄ず。震ひ上るも娘故。ちつとは聞分ない事かと。身を
投ふして泣吒は。二人は不幸と悪縁を。くやむにおもき身の罪
科。此儘爰で死たいと。聲をも上ず泣居たる。久作涙すゝり上
げ。詞ア、子になふて泣者はないと。譬にいふも皆此事。御慈
悲深いお家様のお詞。よもやいやとは云れまい。ふつゝりと思
ひ切るか。アイ。在所へいんで女房持つか。アイ。お主と親の
お慈悲の意見。何の否と申しましょ。お染様の事はふつゝりと
思ひ切り。すぐに在所へ歸りましょ。サ、出かしたく。よふ
いふた。ナそふするがお主大事親孝行。久松過分な嬉しい。サ
アくもふえい。泣止め。ヤレじぐかんでやろ。
サつんとせい。サアくお家様。私が方は片付ました。娘
御にも大誠乞いはしやる迄もない。久松が思ひ切るからは。娘
もいやとはいやるまい。向後心入れかへて。山家屋へいきやヤ。

かんでやる、何時までも子供の如く思ふが、親のならひとはいへ、現在戀の諫めをしながら、かゝる語を用ふるはあまり作り事めきて面白からず、
 「大誠乞ひ」 は必ずと固く誓はしむることならん、もと意狀乞ひ（過失ある者に書かしむるあやまり證文）より出でしなるべし、
 「戀に上下の隔もなく」これ千古の格言、
 「女の道を立通す」これ母が野合の娘の貞節をほむる語、淨瑠璃の外には見るべからず、
 「め・か・り・も・あ・る・ま・い」 ばどちらにしてもよろしくうといふ大阪の俗語「一二錢のところはめかりもあるまい」

アイく。ついあいとばかりでは濟ぬ。しつかりと返事仕や。
 義理をしつた久作殿の詞を。むそくに仕やると。わしやもふ生ては得居ぬと。覺悟の剃刀取出せば。詞ア、コレか、様勿体ない。久松の事はとんと是切。山家屋へ参ります。こらへて下され誤つたと。すがり歎けば。詞ヲ、よふ得心してたもつたのふ戀に上下の隔もなく。二人と枕はかはさぬと。女の道を立通す。娘を呵つて二人の夫。持すも世間の表向き。無理な親じやと。かならず恨でたもんな。諦めてと。膝に抱上抱しめて。聲を忍びの泣じやくり。ヲ、お道理でござります。去ながらかふしておいては。兩方に念が残る。久松めは今直に。在所へ連て歸りましよ。ヲ、ソリヤよい思案じやが。待て下され。常と違ふて大三十日。とかういふ内ニウ元日。今逝すもどふやら氣がゝりもふ一日二日にめかりもあるまい。春早々迎ひにござれ。旦那

「壓狀すくめ」は無理に
おしつけるをいふ、盛衰記
に「乞索壓狀」

「思ひきりのとう」とか
け「脊筋の紋の」とつゞけ
たり○桐のとうは紋所の名

殿へも譯いふて。隙もわしが貰ふておこ。いか様なア旦那様の
耳へも入れず。連れていぬるもマアぶ様。そんならきつう更ぬ
内。ハイお暇申しましよと。立上りしが。詞イヤ申し。壓狀す
くめに成つて手を切つた中。まだ生々しいナ此二人。晝は格別
夜通しの大晦日。御家内も草臥て。一しきりは睡となる。若其
間にナ。申しどふも。此儘では置かれませぬ。ぶ遠慮なれど藏
の鍵。お貸なされて下さりませ。夜の明ける迄藏の内。久松
は番さします。そうして置いて歸りませねば。此胸がく。ど
ふもたまりませぬ。成程そうじゃ。遠慮はいらぬ。ソレ藏へ連
れていかつしやれ。ハイ左様なら直にお暇。年明けたらば早々
に。お家様。何にも口へは出ませぬ。お禮はかうと伏拜く。
久松連れて中庭から。藏へ急ぐは假の牢。口には思ひ桐のとう。
脊筋の紋の見える迄。見送るお染が手を引いて居間へ這入れば

「夜の九つ」 は午後十二時

「鐘かうくと轟かす胸も板椽云々」 戀に心もく

らまざれ、忍出の狀頗るよく書きたり、味ふべし○「心は先へ飛石の、つめたさこ

ばさ云々」何たる妙句ぞ、「あやも涙」とかけたり「ひそめ、おそめ」の語相應ず、

「是まで忍び逢ふよさは月夜を恨み云々」 他に見るべからざるの名句、因果

九ツの。鐘かうくと轟かす。胸も板椽そろくと。忍出たる

娘氣は。戀路の闇のくら紛れ。心は先へ飛石の。つめたさこは

さ震はれて。膝もわななくやうくと。さぐり寄つたる藏の前

詞久松そこにか。つめたかろ。噓寒かるといふ聲も。齒の根も

合はぬ震へ聲。内にも夫と戀しさの。顔差出せど窓の網。あや

も涙の聲ひそめ。逢たかつたお染様。今生のあひ納め。今一度

お顔が見たけれど。心に任せぬ今宵の闇。是迄忍び逢よさは。

月夜を恨み闇の夜を。指をかぞへて待つた報ひ。かはす詞が暇

乞。詞様子はお聞なさるゝ通り。在所へいねば氣に入らぬ。女

房持つて百姓業。それ迄もなく大恩の。お主の家に疵を付け。

世間一ばい口の端に。呼諷はれてお情の。清兵衛様のお顔をよ

ごし。迎も生ては世の人に。顔見合すも恥かしく。死なねばな

らぬわたしが命。詞宵に見た夢の内。自害して死んだのは。も

「厚皮面」

は鐵面皮、

「おつとめ」 は看勤とも
いふ、看經のこと、
「しだら」 はていたらしく
の意、もと音楽のしだら拍
子より出でたりと、

ふ魂は飛んで出た。しらせでがなござりましよ。諄ながらお前
はながらへ。跡吊ふてといふ聲も。咽につまつてむせ返る。お
染は窓に延上り。詞ヲ、道理じやく。何の生て居られふぞ。
わしとても親々の。心に背く夫結。ふり捨て山家屋へ。譬いた
迎人の口。アレアノ山家屋の嫁を見い。可愛そふに久松が。思
ひ詰て死んだのを。見捨て直に嫁入は。大身代の山家屋で榮耀
がしたさじや皆慾じや。厚皮頬な女じやと。大坂中に指さゝれ。
人に憎まれ笑はれて。人交りがなるかいのふ。活耻をさらそふ
より。いとしいそなたと一時に。死んで未來の契が樂しみ。必
呵てたもんなんと。くどき歎くぞ道理なる。詞ア、コレ聲が高い。
佛前にも旦那の聲お勤が始つた。アノお聲が聞納め。長々お世
話に成つた上。恩を仇なる此しだら。お赦なされて下さりませ。
お染様スリヤどふいふても御一所に。どふも生ては居られぬわ

「奔走子」 はいとし子といふに同じ、父母の奔走し世話するよりの稱、
 「一蓮」 一蓮托生の意、
 「園原やありとは見ぬて云々」 美濃信濃兩國の境に園原といふ所あり、この杜に篠木とて、遠くより見れば篠に似たる木あれど近くよればそれに似たるものもなし、さればありとは見ぬて逢はれぬ意に用ふ、
 坂上是則「園原や伏屋に生ふる篠木のありとは見ぬて逢はれぬ君かも」これにて明なり、
 「白骨の御文様」 は本願寺八世の法主、蓮如上人の作、同上人五帖八十通のお文の中、大阪と共に二大名文なり、人間の無常を説きて悲憤極まる文なれば、同

いの。御尤もでござります。其お腹では。成程活ては居られま
 すまい。エ、悲しい事云出してたもる。五月こせば人の形。二
 人が中の奔走子。可愛や因果な腹に懷つて。月日の光りも見ず。
 闇から闇に迷ふと思や。身ふしが碎て。いちらしいわいのく。
 ナ、そうでござります。其子計かお前も。そなたも。此世の名
 残は眞の闇。所隔て死る共。未來は必一ツ蓮。連立つて参りま
 すと。内と外とに園原や。有りとは見えて泣計り。今を限りの
 暇乞。佛前には親太郎兵衛。看經の聲殊勝なり。詞アレく久
 松。夜明も近い元朝のお勤。これからが白骨のお文様。そな
 たやわしや腹の子の未來の引導聽聞仕や。それ人間の浮生な
 る相を。つらく觀するに。おほよそはかなきものは。此世の
 始中終幻の如くなる二期なり。詞お染様。お聞なされませ。ア
 ノお文に違ひはない。思へば夢の一期でござりましたな。朝に

宗凶事の時必ずこれを誦す
此お文の文句に合せて、今
死する男女を歎かしむる趣
向頗る妙、本文は別記に載
す見合すべし、
「腹な子の未來の引導」身
にしてみてかなし、
「浮生」は命のはかなき
をいふ、
「始中終」は一生をいふ
「桃李の粧ひ」は紅のつ
や／＼しき色をいふ、
「六親」は父子、兄弟、
姉妹、舅姑、婚媾、姻婭の
總稱、眷族は親族縁者殘ら
ずの群、
「あなかしこ」はあゝた
ふとしにおなじ、お文一通
の終には、必ず此語あり、
「今死する身の偽りを」死
ぬこそ人の誠なりけりとい
ふ古歌も當らず、

紅顏有つて。夕に白骨となれる身也。既に無常の風來りぬれば。
則二ツの眼忽に閉。一ツの息長く絶ぬれば。紅顏空しく變じて。
桃李の粧ひを失ひぬる時は。六親眷屬集つて歎き悲しめ共。更
に其甲斐有べからず。さてしも有るべき事ならねば。野外に
送つて夜半の煙となし果ぬれば。只白骨のみぞ残り。嗚あ
通りに。死んだ跡では爺様かゝ様の。歎き悲しみいま見る様で
おいとしい。ふ孝を赦して下さんせへ。早く後生の一大事を心
にかけて。阿彌陀佛を深く頼み參らせて。念佛申すべきものなり。
穴賢く。云合はさねど二人共。是が此世の別れぞと。わつと泣
出す其中にも。詞今死る身の偽りを。誠と思ひ親父様。寒かろ
けれど夜明迄。此藏に居てくれい。旦那に隠して夜明には。お
家が出して下さる筈。二日の朝は迎ひにくると。いそ／＼とし
ていなしやつたが。死骸を在所へつれていて。嗚や恨の諄を。

「さかい」 はからの意、
 「常住こはい顔して云々」
 父殿にとの語はあれど、心
 から嚴なるものなし、常住
 に佛語いつもの意、
 「のら」 は放蕩者をいふ
 野らにてらは助辞、のら猶
 などいふに同じく、しつけ
 なく放逸なるをいふなるべ
 し、草と書くは野らの義よ
 りあてたるなるべし、
 「めい」 は女わらはの約
 めらうの略にて、女といふ
 意、罵る時にも用ふ、

思へば悲しいくと。窓にくい付き。泣居たる。斯とはしらず
 坪の内。何やら物音氣づかいと。障子ぐはらりと親太郎兵衛。
 詞そこに立つて居るは誰じや。マイわたくしでござります。ノ
 ヲお染か此寒いに何して居る。サイナア。ヲ、それく。餘り
 炬燵の火がきつうて。上氣したさかいで。爰へ醒しに。ウ、ウ
 それでそこに居るか。アイ。それならマア。ちよつと爰へこい
 く。しる通先度のもやくから。内外の者や鼻が手前。子に
 甘いと云れふかと思ひ。常住こわい顔して居れど。心の内では
 おりや何にも。呵つて居やせぬぞよ。マア案じな。兄の草めも。
 清兵衛殿の世話で。とんと心入かへ。商賣に精出すといふ詫言
 で。年明けたら早々戻ると。いとゝやらいふ女らは。清兵衛殿
 の妹にして。われが嫁入と跡先に。こつちへ嫁に取筈に極た。
 又われもむちやくちやと。山家屋へいくはいやそふなれど。ス

「こそ」とやつた事も云々」 太郎兵衛中々の粹をきかせり、

「東堀」 は東横堀、淀川より分れ、東區今橋より南區道頓堀に至る、南北の大堀川、

「園八節」 は豊後が門人なる園八（京都の人にして鸞鳳軒と號す）の語り出でたる、淨瑠璃節の一種にして、當時流行せしものなり、園八死して跡を繼ぐものなかりしが、宮園千之これを再興し、後また絶えしを、明治七年興すに至れりといふ、

「灰寄」 は灰葬ともいふ骨上げなり、親父が閑居りしとも知らず、今讀みしお文にて懇々論すところ、あはれにもかなし、

リヤ義理の有る嫁入り。云いでも合點である。何かは置いて媒が兩方の町のお年寄。今更變改しては。此お衆の顔も立ず。本家を麓末にすると云れては。太郎兵衛人中へ顔出しがならぬ。われも自分の娘じや物。惚た者もある。こそくとやつた事も有る。それじやてゝ呵りやせぬけれ共。こふした譯じや程に。何もかも東堀へ流して。さつぱりと嫁入してくれ。同じ男を持たすなら。好た者に添しはせいで。むこい親じやと恨でくれな。イアモ恨る分は。何ぼ恨んでも憎んでも。構やせぬが。一筋な子供心で。埒もない事などして。園八ぶしとやらの道行に。語られる様に成つたらば。おりやモウ泣死にがなするで有る。ナ呑込だか。得心したか。今御前で戴た白骨のお文は。元朝と灰寄とに戴く段。あの通じや程に。生て居る間が花。死んで仕廻は美しい其顔も。はでな形も。只白骨のみぞ残れり。必々。アノ

「延紙」は杉原半紙の小形のもの、鼻紙に用ふ、
 「七ツ」は午前四時、
 「稻でもつめ」元日のわざり物、
 「鴛鴦の片羽の云々」相思ふ男女の惜みながら片々に別れ行くをいふ、鴛鴦に情しなかけたり、よき句なれば處々に用ひらる、
 「ならず者」は無賴の惡者、
 「死ぬるを高と身をかため」此場合は如何なるやさ男も強かるべし、
 「日比の意趣と切つける」たとんだ所で敵をうたしたものの○又兩人の死様あまり雜作なきゆゑ、巧みの手際は見えたれど、作物らしき感は免れず、
 「弓張」の語場合に應じてよく利きたり、

お文様を灰寄に。讀さぬ様にしてくれよと。こぼす涙は身に熱湯。只アイくと斗りにて。延紙のかずく泣つくす。詞サアく七ツでも有ふ。おれはそろく禮捧らへ稻でもつめと手をひかれ。鴛鴦のかたはの別れ路や。泣く音立ねどふり袖に包む涙は脇寒く。胸は冷せど是非もなく。伴ひ内に入にけり。いつの間にかは忍び入る。ならず者の源右衛門。善六も頼かぶり。耳語黙頭藏の引戸。めつきくところち放す。内には久松すかし見て。死るを高と身をかため。質の脇着拔放し。待共しらずしてやつたと。飛込善六待かけて。日比の意趣と切付ける。あつとのめれば源右衛門。悔りうろたへ逃出す。首筋つかんで聲清兵衛。引かづいてどうと投。盗人捕へた挑燈と。呼はる聲に家内の上下。弓張手燭とつさくさ。詞悲しやお染が自害したと。死骸を抱二親は。涙ながらにかけ出れば。清兵衛はじだん

「地だんだ踏み」は悔し
 き時など、足すりして地を
 踏みつくるをいふ、地鞠踏
 の轉訛なるべし。
 「おくて」は手おくれ、
 「まやし」はだまし欺く
 意、俗にまやかすなどいふ、
 こゝは渾者の意に見てよ
 し。
 「代官所」は代官の居る
 所、琴責の段を見よ、
 「泣は難波の川千鳥」浮名を
 云々」よく書きたり、
 味ふべし。

だ踏。詞エ、手延にしたが殘念く。嫁入つて來次第其形で。
 直に野崎へ久松と。夫婦にせふと思ふたも。後手になつたか口
 惜やと。身をもむ所へ多三郎夫婦。久作はまやしの源太。引く
 ゝつてつれ來り。詞お染久松心中と。讀うりは此まやしめ。善
 六に頼まれたと。一部始終を皆白狀。重々憎い此三人。代官所
 へ引立ましよ。マア氣がゝりは藏の内。ヤア久松も首くゝつた
 ア、可愛やと腰もぬけ。泣くは難波の河千鳥。浮名をながす追
 善と。あはれを殘す角やしき。盡せぬ筆に傳へける。

新版歌祭文

野崎村の段

野崎村の段

「天神」

は河内國北河内

郡（もと茨田郡）の佐太天満

宮なり、祭神は菅相巫、長

二尺ばかりの木像にして、

社傳には御自作なりといふ

なほ後篇の菅原傳授佐太村

の段にいふべし、

「觀音」

は久松が故郷な

る有名な野崎觀音、慈眼寺

にありて、十一面の尊像、

遠近の老若はいふに及ばず

春時大阪より賽するもの多

く、野崎詣と稱して頗る群

集せり、別記を見よ、

「鐵漿」の始めは詳なら

ず、いと古くより行はれて

中古時代は盛に用ひられた

り、なほ後にいふべし、

「覺束繪」

とかけたり

跡に娘は氣もいそく。日頃の願が叶うたも。天神様や觀音さ

ま。第一は親のお蔭。詞エ、此様事なら今朝當り。髪も結て置

もの。鍊漿の付やう挨拶も。どういうてよかるやら。覺束繪拵

へも。祝ふ大根の友白髪。末菜刀と氣も勇み。手元も輕ちよき

くく切ても切ぬ戀衣や本の白地をなま中にお染は思久松が

跡を慕て野崎村堤傳ひに漸と梅を目當に軒のつま供のお芳が聲

高に。詞申し御寮人様。彼人に逢うばかり。寒い時分の野崎参り。

今船の上り場で。教へて貰た目印の此梅。大かた爰で入りませ

ふぞへ。ヲ、もそつと靜に云やいのう。久松に逢たさに。來た

事は來ても在所の事。目立つては氣の毒。そなたは船へ早うく

と。追やりく。立寄り乍越兼る。戀の峠の敷居高く。詞申し

「友白髪」は太根を細長く刻みたるもの、夫婦共白髪になるまでといはひて祝事に用ふ。

「末柴刀」とかけ「きつ

ても切れぬ云々」とうけたり、意は切つても切れぬ、惡縁の戀に染まりしお染といふこと、戀衣、白地、お染など、縁の語をつられて面白く書きたるのみ。柴刀は庖刀

大阪より野崎村へは、懸屋川の引船、又其堤づたひなり、

「御寮人様」はお嬢様といふに同じ、御料と書くべきよし、安齋隨筆に見えたり、飯の事を御料といふより、そを調ふる婦人の事となり、轉じて娘の稱となる

「梅を目印」田舎の家を

物お頼申しませうと。言もこはく暖簾越。詞百姓の内へ改つ

た。用が有るなら這入しやんせ。ハイく卒爾乍ら久作様は。

内方でござんすかへ。左様なら大坂から。久松といふ人が。け

ふ戻て見た筈。ちよつと逢て下さんせと。いふ詞つき形かたち。

常々聞た油屋の。さてはお染と悋氣の初物。胸はもやくかき

交鱗。まな板押やり戸口に立寄。見れば見る程美くしい。詞あ

た可愛らしい其顔で。久松様に逢して呉。そんなお方はこちや

しらぬ。餘所を尋ねて見やしやんせ。あほうらしいと腹立聲。

心付ねば。ホンニマア。何ぞ土産と思ふても急な事。コレく

女子衆。さもしけれ共是なりと。夢にもそれと白玉か。露を

帛紗に包の儘。差出せば。こりや何じやへ。大所の御寮人様。

さまくくと云ても。心がいたらぬ置しやんせ。在所の女子

と侮つてか。ほしくばお前に遣はいなと。やら腹立に門口へ。

搜すによくある事なり「問
ふ人のしるべか妹が門の
梅」

「在所」 は田舎、舊里の
意に用ふ、

「立寄ながら越にかゝる云
々」 おぼこ娘のさま、さ
もあるべし、俗語た「逢た
さに用なき門を二度三度云
々」

「卒爾ながら」 は輕卒な
がら、

「悋氣の初物胸ももや
云々」 初物の悋氣でかき
まぜた鱸、其味殊に賞翫す
べし、

「さもしけれど」 はみ
すばらしけれど、

「夢にもそれと白玉か露を
云々」 意は久松の妻と定
まる女と夢にも知らぬか露
を帛紗に包みしまゝ差出す
いとふ事、露は銀の小玉の

ほればほどけてはらくと。草にも露銀けし人形。微塵に香箱

割出した。中へつかゝ親子連。出でくる久作。詞どうじや。

繪は出来たで有う。扱祝言の事婆が聞て。きつい悦じや。が年

は寄るまい物。先刻のやつさもつさで。取上したか頭痛もする

いかふ肩がつかへてきた。マ、橙の数は争れぬものじやわいの

左様ならそろく。私が揉で上げませうか。ソリヤ久松かたじ

けない。老ては子に随へじや。孝行にかたみ怨のない様に。お

みつよ三里をすゑてくれ。アイく。そんなら風の来ぬ様にと。

何かな表へ當り眼。門の戸びつしやりさしもぐさ。燃る思ひは

娘氣の細き線香に立つ煙。詞「サアく。親子連遠慮はない。艾も

肩癖も大摺に遣て呉。アイく。きつうつかへてござりますぞ

へ。そうで有ろく。序に七九もやつてたも。サットこたへる

ぞく。サア据ますぞへ。アツくゝゑらいぞく。あすが日

事、白玉は露の枕詞と見てよし、巧に書きたり注意すべし、伊勢物語の「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを」の歌、思ひ合されてよし。
「大所」は大家の意。「心がいたらぬ置しやんせ」とは尤も至極、如何なる土産も夫と逢引く手品の種と知りては、禮もいはれまじ請取られもすまじ。
「やら腹立」はいらち腹立つこと
「はら〜と草にも露銀云々」銀の小玉なる露、草の上に散亂せるを、縁の語にて巧みにあやなし書けるのみ「銀」に「鐵漿」を含め、「化粧」を「芥子人形」とかけて「微塵に香箱云々」とつゞけたり、これを知らば意自ら味ひ得べし、巧の美

死うと。火葬は止にしてみせう。丈夫に見えてもう古家。やねも根太も。こりや一時に割普請ぢや。アツ、。ナ、と、様の仰山な。皮切は仕廻でござんす。風が當ると思や。誰じや表を明たそうな。閉て参しよと立つを引留。ハテよいはいの。晝中に鬱としい。ノウ久松くく。コリヤ久松。餘所見して居ずと。しかくと揉ぬかいの。サア餘所見はせぬけれど。覗くが悪い。折が悪いくく。悪いと目顔の仕方。詞や悪いの覗のと。足に灸こそ居てをれ。何所もおみつは覗はせぬ。サアアノ悪いといひましたは。慥か今日は瘟瘡日。それに灸は悪いくと。いふたのでござります。エ、愚痴な事を。此様に達者なは。ちよこくと灸をする作りをする。そこで久作。アツ、エ、何じやはい。我身達も達者な様に。灸でもするるのが。おいらへの孝行じやぞ。ナ、そふでござんすとも。久松様には

に隔れるもの、よき文にあらず、

「橙の數」は年の數、橙は其實冬黃に變じ春青にかへる、數年落すして大きくなるものゆゑ、代々と名づくよりて家系の連續を祝して新春の飾りものに用ふ、

「老ては子に従へ」はもと

と女は家に在つては親に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老ては子に従ふといふ、婦人三従の一なるを、男親にもかく用ふるに至れり、

「三里」は灸穴の名所、

膝皿の下の凹みたる所にして、これにすうれば、足健になるといふ、

「常り眼」は當つて見る眼

「びつしやりさしもぐさ」とかけ「燃ゆる思ひは振氣の云々」とつづけたり、おほ

振袖の。美くしい持病があつて。招いたり呼出したたり。憎てらしいアノ病ひづらが。這入ぬ様に國の上へ。大きふして居て置きたい。コレおみつ殿。振袖の持病のと。いろくの耳こすり。はしたない事聞ては居ぬぞや。ホ、ホ、かはつた事がお氣に障つた。ヲ、障らいじや。こりやおかしい。其譯聞ぞへいふぞやと。我を忘れていさかいを。外に聞身の氣の毒さ。振の肌着に玉の汗。久作も持あつかい。詞ア、コリヤ。肩も足もひりく爲がなく。未祝言もせぬ先から。女夫いさかいの取越かいやい。灸業のかはり。喧嘩の行司さすのかいやい。二人ながら嗜めく。イエく構ふて下さんすな。今の様なあいそづかしも病ひづらめがいはいしくさる。何をいふやら。モウく兩方共おれが貰ひじや。ヨ、中直しが直に取結びの盃。髪も結たり鐵漿もつけたり。湯もつかふて花嫁御を。コリヤ作つて置と打笑ひ。

こ氣のやさしき悋氣を、寫し得て當意即妙といふべし感服々々「さしもぐさ」は灸のこと、思ひに火を含めたり、藤原實方朝臣「かくとだにやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆるおもひな」

「痔癖」は肩をいふ、もと肩より頸筋へかけて、こる病の稱なるが、これをもみ治すといふより、按摩の手術の稱となり、遂に肩のこともいふ、

「七九」は脊の灸穴の名所、

「あすが日死なうと云々」

よくある老人の言草、

「丈夫に見ゆてもふ古家」

余往年友人に「人間は家屋の如く、醫者はそより大工に似たり、屋根の漏り根太の朽なと、修葺もなし得

無理に納戸へ連れて行。其間遅しと駈入るお染。逢たかつたと久

松に。紐付けは。詞ア、コレ聲が高ふござります。思ひがけない爰

へはどふして。譯を聞してくと。問れて漸く顔を上。詞譯

は貴方に覚えが有ふ。私がことは思ひ切。山家屋へ嫁入せよと

残しておきやつたコレ此文。そなたは思ひ切る氣でも。わしや

何ぼでも得切らぬ。餘り逢たさなつかしさ。勿體ない事ながら

觀音様をかこ付て。逢に北やら南やら。しらぬ在所も厭はせぬ

二人いつしよに添ふなら。飯も炊ふし織つむぎ。どんな貧しい

暮しでも。わしや嬉しいと思ふ物。詞女の道を背とは。聞えぬ

はいのどうよくと。恨のたけをゆふぜん。振の袂に北時雨。

晴間はさらになかりけり。曇り勝なる久松も。背撫接り聲ひそ

め。詞其お恨は聞えて有ども。十の年からけふが日迄。船車に

も積れぬ御恩。仇で返へす身のいたづら。冥加の程も恐ろしけ

べけれど、屋簷骨が總くづ
れとなりては、著婆扇鷗も
手のつけやうなかるべし」
と語りし事ありしを思ひい
で、面白く感ぜし、
「割替請」の語、前をう
けて味ひあり、
「皮切り」は最初にすり
る灸の稱、
「覗くがわるい云々」久
松の謎、
「瘟癘日」延寶四年の伊
勢曆註に「かんろ日、うんか
う日、此二ヶ日はようとし
ゆくと、わがうそうじやう
の日なるゆゑに、佛事によ
しむこよめとりによし、か
くもんによし」と見ゆたり
とぞ、灸を思むはいかなる
ゆゑか、よき日なればか、
其道の人にたづぬべし、
「病ひづら」はお染をい
ふ、

れば。委細は文に残した通り。山家屋へござるのが母御へ孝行
家の爲。よふ得心をなされやと。いへば諾へも涙聲。詞いやじ
やく私しやいやじや。今となつてそくいやるは。これ迄わしに
隠しやつた。云號の娘御と。女夫に成たい心じやの。是非山家屋
へ行ならば。覺悟は疾から究て居と。用意の剃刀取直せば。夫
は短氣と久松が。留ても留らず。詞イヤく。そなたに別れ片
時も。何樂しみに生て居よふ。留ずと殺してくと。思ひ詰た
る其風情。詞夫なら是程申しても。お聞譯は御座りませぬか。
添ぬ時は死ぬるといふ。誓紙に虚がつかれうかいのう。ハア達
て申せば主殺し。命にかへて夫程迄に。思ふが無理か女房じや
物。叶はぬ時は私も一所に。お染様。久松と。互に手に手を取
かはす。惡縁深き契りかや。始終後に立聞く親。詞其思案惡か
らふと。云れてハット久松お染。さわぐを押へて。チ、大事な

「國の上に炎をすうる」

は、門にいれぬまじなひ、
足止めに下駄にすうるに同
じ、

「はしたない」 ばつゝし

みのない、

「障らしいや」 は東京の

障らなくてさ、

「もてあつかい」 はもて

あますに同じ、

「逢に北やら南やら」とかけ

「知らぬ在所も厭ひはせぬ」

とつゞけたり、たとへ山中

一軒屋、手鍋さげてもの意

「女の道にそむけとは」

元來の野合の果に、此貞節

の語を聞く、例の淨瑠璃界

特色の倫理、

「恨のたけをゆふぜん」とか

けたり、友禪は元祿の頃、

京都祇園町の畫工、宮崎友

禪が工夫に出でし染模様の

名、女用鑑に「こゝに有禪

いゝ。詞マアく下に居や。因縁とは云ひ乍ら。和泉國石津

の御家中。相良丈太夫様といふれこさの息子殿。聊の事で家が

潰れてから。わがみの乳母はおれが妹。其縁で十の年迄。育上

げた此久作は後の親。草深い在所におこより。智惠附の爲油屋

へ丁稚奉公。それ程迄に成人して。商ひの道讀書まで。人並に

爲たは親方の大恩。其恩も義理も辨へぬは。これ見や。先に買

たお夏清十郎の道往本。嫁入の極て有る。主の娘をそゝなかつ

とは。道知ずめ人でなしめ。ナこりや清十郎が嘸しどやわいの

とふから異見もしたかつたれど。今の様な事が有ふかと。それ

が悲しさ一日延。二日延しする間。ふつてわいた金のもめ事。

これいひたてに暇を貰ひ。分けて置くのが上分別と。思ふから

引負の銀の工面。どの様にきばつても。高の知れた水吞百姓。

わづかの田地着類着そげ。お光めが櫛笄迄賣代なし。やうく

といふ繪法師なりけらし、一流を扇に書き出しかば、貴賤の男女喜悅の眉うるはしく、丹花の唇をはこるばせり」と記し、これにより染摸様の雛形を作りて、吳服師に與へし由を載せたり「振（降）の袂に北時雨」北山時雨ともいふ、京都は北方に山ありて、冬間よくしぐるゝゆふ此稱あり、「晴間」曇がち「相應す、久松に日なかけたるなるべし」「用意の剃刀」かう來るが芝居淨瑠璃の紋切形、久松「命にかへてそれ程まで」お染思ふが無理が女房じやもの「これ常用の句調しかも情頗る深し、」「石津」は泉州堺の南廿町ほどにあり、「れこさ」はこれ（是）をかへしていへるにて歷々と

こしらへたさつきの銀。なさぬ中でも親子といふ。名が有るかは。肉身分た子も同然。可愛ふなふて何とせふ。コレお染様ではない。此本のおなつとやら。清十郎を可愛がつて下さつたは。嬉しい様で恨めしいわいの。聞いての通りおみつめと。女夫にするを樂しみに。病苦をこたへて居る。アノ婆様に今のやうな事聞したら。何と命がござりませうぞいの。若い水の出端には。そこらの義理も絲瓜の皮と。投やつてこな様と。いつ迄も添遂げらるゝにしてからが。戸は立てられぬ世上の口じやはい。エ、アノ久松めは。辛抱した女房を嫌ふて。身上のよい油屋の婿になつたは。アレ榮耀がしたさぢや。みな欲じや。人の皮着た畜生めと。在所は勿論大坂中に。指さゝれ人交りが。成りませふかいの。コレくく。爰の道理を聞譯て。思ひ切つて下され。申し。コレ拜ますはいのく。是程いふても聞入ず。親

いふに同じ
「お夏清十郎」 心中年月

詳ならず、淨瑠璃には寶永二年笠物狂出で、全六年に林葉子が五十年忌歌念佛出でたり、さらば萬治年中の事が道行本は、心ゆくどきの如きもの、

「着類着そげ」 は着類殘

らずの意、

「なさぬ中」 はうまぬ中

「水の出ばな」 はとまら

ぬ勢をいふ、

「糸瓜の皮」 とは、俗に

どうでもなれと打捨てるをいふ、雍州府志に、糸瓜の皮にて鍋の尻を洗ふ由見にたれば、洗ひ捨つる意か、物類稱呼に「ヘチクワンが馬の革一駄袋」と云へるが訛れるなりといへど、何とも分らず、
「月は立てられぬ世上の口」

御達まんざくが満足うみつに産付けて置しやつた。其體からだを切きりさいて。淺あさましう死ぬしるのが。女の道みちか心中しんちゆうか。サ久松きくまつも其通り。不義密夫ふぎみつとの悪あく名なうけ。實じつの親おやの名なを汚けがす斗たりか。世間の義理しやうも主しゆうの思おもひも。むちやくちやにして仕廻しまわのが。侍さむらいの子こか人間にんげんか。返事へんじ次第しだいで思案しあんが有あると。眞實眞身しんじつしんみの剛異見こういけん。骨身ほねに徹とへて久松きくまつお染ぞめ。何と返へん事も無ないじやくり。詞こと是程しやういふても返答へんたうの無ないは。コリヤ二人ふたりながら不得心ふとくしんじやの。ヤ、勿體もつたいない。實じつの親おやにも勝まさつた御恩ごおん。送おくらぬのみか苦くをかけるも。私わたしが不所存ふしよぞんから。イヤ／＼そなたの科とがではない。皆此身みなこのみの徒いたちから。親おやにも身みにもかへまいと。思おもひ詰つめても世よの中の。義理ぎりにはどうもかへられぬ。成程なるほど思おもひ切きりませふ。ヲ、よふ御合點ごがてんなされました。私もふつゝり思おもひ切きりり。おみつと祝言しうげん致しまする。夫そならそなたも。お前まへもと。互たがひに目めと目めに知あせ合あひ。心の覺悟かくごは白髮しらぐさの親父おやぢ。詞ことアノさつばりと思おもひ

は「人の口に戸はたてられぬ」といふ諺より書く、李鄭が詩に「雖將二人手掩得天下目」とあるに同じ、

「榮耀がしたさじや云々」

これ染模様に不染にいはしめたる語、取りて久作にいはしむ、同段参照、

「不義」は義に背く事より、専ら密通をいふ、これ男女の別を、義の最も重きものと見しゆゑなり、

「世の中の義理には云々」これ義と情との衝突、

「互に目と目に」これ心中との目くばせ「覺悟は白髮の親父」とかけたり、

「むくつげ」は氣味わるき事なれどこゝけむさぐるしき意に見てよし、

「善根」は佛經の語、慈悲などの善行をなして、佛

切て。祝言をしてたもるか。何の虚を申しませふ。娘御も今の詞に。微塵も違はござりませぬか。久松の事は是限。わしや嫁入をするわいの。チ、出来たく。むくつけな親仁めと腹も立ず。よふ聞入て下さりました。晩の間も知れぬ婆が命。息の有る中祝言が濟だと。聞かして下さるが大きな善根。善は急げじや今爰で盃さそ。おみつくと呼立る。聲聞えてや病架より。母は漸探り出で。詞親父殿。久松もそこにか。待に待つた娘が祝言。嬉しうてく。此間にない氣色のよい。大煩ひの上目迄潰た因果人。佛様のお迎ひを待かねたに。難面命があつたりやこそ。悦ぶ聲を聞くと云ふも。孝行な久松が影。ふつゝかな在所生れ。心には入るまいけれど。末の面倒見て下され。頼みまするといふ中も。痰火は胸にせき上せば。エ、此寒いのに寐所に。やつぱり居たがよござります。冷れば悪いと蒲團の上。抱きかゝへ

果の種をうゑるをいふ。

「ふつどか」 は不束など

書く行届かぬ、

「痰火」 は痰のこと、

「蒲團」 は字の如く、蒲

といふ草にて團く組みたる
敷物、今は誤りて褥の稱と
なる。

「介抱如納戸より」 と

かけたり。如在は抜目なく
行届くをいふ、もと論語よ
り出でたりと、俗に如才又
女才など書く、

「島臺」 は婚禮の席に用
ふるもの、松竹梅及高砂の
尉姥などを作りつく、これ
古への洲濱の遺形にして、
蓬萊島にかたどれるなりと
委しくは後篇菅原傳授にい
ふべし。此島臺のなきかは
り「世話事の尉と姥」とは面
白くいひたり、世話事は男
女などの間の事をいふ。高

て久松が。介抱如才納戸より。親子の中も丸盆に。乗た盃銚子

鍋。運ぶ久作。詞コレお婆。やつぱり寐ては居やらいで。シタ

ガ島臺の無かはり。世話事の尉と姥も新らしい。目の見えぬは

目出度秀句じや。ハ、エエめで度次手に。此嫁は何所に居ぞ

い。おみつくと尻輕に。立つて一間を差覗き。詞バテ出ぐす

みをして居るは。それでは果てぬと手を取つて。サアく。マ

アく嫁の座へ直つたりく。時に一家一門着の儘の祝言に。

改つた綿帽子。鬱としからふ取つてやらふ。脱すはづみに筈も

ぬけて惜げも投島田。根よりふつくと切髪を。見るに驚く久松

お染。久作呆てこりやどふじやと。いふ口押で。詞コレ申し父

様も。お二人様も。何にもいふて下さんすな。最前から何事も

残らず聞いてをりました。思ひ切つたといはしやんすは。義理

にせまつた表向。底の心はお二人乍ら。死ぬる覺悟でござんし

砂の尉姥の事は、別記を見よ。
 「目の見ぬめは目出たい」と洒落たるなるべし、否洒落どころにあらず涙なるべし。秀句は今いふ洒落の事にて中古の物語文にも見ゆ、秀句と呼べり、
 「出ぐすみ」は出すぐみ「綿帽子」は婚禮の時新婦のかむるもの、梅園日記に「今世婚禮に新婦の綿帽子といふものは、被のうつれるなり」と見ゆ、
 「簪」は髮搔の音便にて古は男女共に髪をかき上ぐるに用ひし具なるが、後には婦人の鬢の飾となれり、
 「惜げも投島田」とかけたり投島田は根を低く鬢を長く結びたる島田、大阪にては今盛りを過ぎたる娘の髪と聞く、

よがな。サ死ぬるかゝこで居やしやんす。かゝ様の大病。どふぞ命が取とめたさ。わしやもふとんと思ひ切つた。ナ切つて祝ふた髪形。見て下さんせと兩肌を。脱だ下着が白無垢の。首に掛たる五條袈裟。思ひ切たる眼の中に。浮む涙は水しやうの。玉より清き貞心に。今更何と詞さへ。涙吞込み。飲込んで。耐るつらさ久松お染。久作も手をあはせ。何にも云ぬ此通りじや〜。女夫に仕たい計に。そこらあたりに心も付かず。蕾の花を散してのけたは。皆おれがどんなから。赦してくれも口の中聞え憚る忍び泣。詞アノ冥加ない事おつしやり升。所詮望は叶ふまいと。思ひの外祝言の。盃するやうに成つて。嬉しかつたはたつた半時。無理にわたしが添ふとすれば。死しやんすを知らない。どふ盃が成ませうぞいな。詞おみつの何を云るやら。女夫になりやるを此母も。悦こそすれ何の死の。ノウ親父殿。そ

「ふつゝり切髪」とかけたり切髪は頭のあたりまで垂れて切りたる髪、

「白無垢」は祝儀にも凶事にも用ひ、河原の達引にいふべし、

「思ひ切つてナ切つて祝ひし髪たち」あはれなり「五條袈裟」は袈裟の一種「五條は下衣として食を断ず」と見ゆ、

「浮む涙は水晶の云々」實に玉よりも清し、

「おみつ何いやるやら」母いまだ知らずこれ「目の見ぬは目出度い」ところ

「花瓶の松の鶴龜も云々」島臺の千年に引かへて此契り、鶴龜々々、

「心ゆかし」は心やり

「たべつけぬ」はなれぬ

「三三九どうはいはぬが花嫁」とかけたりいはぬが花

じやはいの。迎も此世はない縁でも。せめて未來は。ア、イヤ未來までもかはらぬといふ。杯さそと立上。口に唱名ぶつくと。佛壇明けて取出す。花瓶の松に鶴龜も。あの世を契る心の島臺。詞サア、斯して成りと杯さすのが。せめてもの心ゆかし。エ、云たい事だらけじやけれど。此様な座敷には。たべ付けぬ此親父。三々九どうは云ぬが花嫁。一ツ吞で久松へ。ア、めでたいく。はゝも嘸かし嬉しがる。ヲ、嬉しい段かいの。一世一度の娘が晴。定て髪も美しう出来たて有る。さき筈に結つたか。イエ。そんなら兩輪か。ヲ、兩輪共く。思ひがけなふすつばりと。アイヤさつばりとよふ出来たはいの。ヲ、親父殿の云しやる通り。自慢じやないが。髪は大てい上手じやござらぬ。ホンニ前方大坂行の。土産に貰やつた薄のかんざし。けふの晴にさしやつたかや。着物は取つて置の。花色加賀のすそ模

の諺より書く、
 「さき筭」 は鬚を二つこしらへて筭をさし、餘りを垂れたる結方、今大阪にて廿四五より三十まで位の婦人、嫁入の髪に川ふと、
 「兩輪」 はさき筭の垂れを上げたるもの、用ひ方同斷。
 「花色加賀」 は花色の加賀絹。
 「顔直しやつたおとなしさ」 元服姿いかにも一目見たかるべし。
 「善光寺様の御印文」 善光寺は信濃國上水内郡長野町にありて、本尊は三國傳來の佛、閻浮檀金の靈像なり、佛教徒にして、これに參詣せざるもの、殆どなしといふ、なほ桂川連理の櫓を見よ、御印文の由來はよくも知られど、これを錦の

様。それか。アイ。夫着て居やるか。アイナ。ナ、吾身にはよふ似合ぞいの。成らふ事なら鉄漿付けて。顔直しやつたおとなしさを。たつた一目見て死んだら。善光寺様の御印文にも勝た。未來は極樂往生。詞ホ、ハ、ハ。私とした事が。目出たい中でいまはしいと。久松必氣にかけて。たもんなやいのと子に迷ふ。暗き瞽にそれぞ共。知ず悦ぶ母親の。心を察し誰々も。泣聲せじとくひしばる。四人の涙八ツの袖榎並八ヶの落し水。膝の堤や越ぬらん。見聽つらさに忍び兼。お染は覺悟の以前の剃刀。なむあみだ佛と自害の體。久作周章押止め。詞コレ娘御。何が不足で死ぬるのじやと。聽間違ふて娘ぞと。母は驚きコレおみつ。待つてくと這寄つて。探る手先に五條袈裟。ヤア此袈裟といひ此つむり。どうして髪を切たのじや。譯を聽してくと。せけばせく程咳のぼし。病苦になやむ母親を。見るに娘は

帛紗に包みて、額にあていたが、かしむ、これをいたゞけば、地獄へ落つる事なしとて、信者の最もありがたく思ふものなり、
 「子に迷ふくらき盲人に」
 實事、頗るあはれ、
 「四人、八つ、八ヶ」と
 數字にて調をとゝのへたり
 「榎並」は攝津東成郡にあり、大阪城の東北半里強、淀川に添ひたれば、灌漑の爲め「八ヶ所」の落し水ありしなるべし、
 「せけはせく程せき上し」調あり、
 「品」はわけ場合の意、
 「そなたは見ぬが」秀句の如し、
 「まじく」は見つめ居るさま、
 「蝶よ花よ」は子をいつくしみ愛するにいふ、もと

猶なほ悲かなく。詞ことばかゝ様こらへて下さんせ。添そかにそはれぬ品になり。

私あまや尼あまに成つたわいな。ヤアくく。そんならさつきにから。母はが氣きを休やすめふ爲。チイノ。來世らいせの縁えんを結むすぶ杯。此世このよの縁えんはきれて有るわいの。ハア、尤もつともじやく。そなたは見えぬがいつそまし。傍そばでまじく見て居ゐる心。推量すいりやうしてたもいのと。いふ聲こゑ咽のどに塞ふさせば。詞ことばサアく。其悲かなしみをかけるのも。此お染から起た事。死ぬるがせめて身の言譯いひわけ。イエく。死なねばならぬ久松。わしから先へとかけよるを。久作くさく剃刀そりかう引たくり。これ程いふても聞入れず。ぜひ死たくばおれが先へ。物の見事に死んで見せふか。とゝ様がしなしやんすりや。私も生ては居ませぬぞへ。ヲ、娘出かしやつた。むさい在所ざいじよに育そだつても。貞女ていぢよの道みちを辨わきまへて。よふ尼あまになりやつたのふ。そこにござるが。噂うわさに聞いたお染様か。お前や久松を殺ころしとむない計はかりに。蝶てふよ花はなよと

女子に用ふ、

「無足」は無駄の意、別

記を見よ、

「どうよく」

は佛語貪慾

の音便なりと、無慈悲、非

道などの意、

胸欲など書く

は當字なり、

「義理と情けと恩愛の云々」

よく書きたり味ふべし、

樂しんだ。一人娘を尼にして。出かしたいふと心の中。思ひや

りが有るならば。なぜ存命ては下されぬ。折角娘が志。無足に

するとは胸欲と。こらへし涙一時に。わつと計りに取亂せば。

詞ナ、道理じゃく。サアく。どふ有ても死度は。婆も娘も

たれも死ぬる。三人ながら見殺す氣か。サそれは。思ひ留つて

下さるか。但し死ふか。サアくくくと三方が。義理と情と恩

愛の。しめ木にかゝる久松お染。死ぬる事さへ叶ぬは。いか成

る過去の報ぞと。前後正體泣倒れ。むせ返へるこそ道理なれ。

久作涙押ぬぐひ。どふやら斯やら合點が行たそふな。嘸母御様

が案じてござらふ。大事の娘御慥な者に。イヤそれには及びま

せぬ。母が慥に請取ましたと。云つゝ這入ば。詞ヤア鼻様ハア

愕と計りに詞なく。差俯けば。詞コレお染。野崎参り仕やつた

と聞いて。餘り氣づかひさ。イヤ氣慰みによからふと。跡追ふ

「女郎」は女といふ意、
 「御利生」は御利益、衆生を利するといふ佛典の語
 「出すぎぬ杉折」調あり
 「冥加もない」は勿体ない、冥加じやわい、は志じやわいの意、
 「ぶしつけ」は無禮の意もと嫉なき意より轉じたるなり、今川大草紙に「酌取りは杯を避くるに、押してもる事卑法無嫉なり」
 「春を松竹梅」とかけたり
 「蓬萊」に二種あり、一は蓬萊島に擬し、松竹梅などを飾つけ、總ての祝に用ゆ、一は春盤又喰摘(くひつま)と稱し、米、熨斗鮑など盛りて、新年の祝に用ふ、
 「いく久松」とかけたり
 「くちさむなき者」はつましみなき者、

て來て。何事も残らず聞いて。夫婦の衆の親せつ おみつ女郎の志。最前からアノ表で。わしや拜んで計り居ましたわいのふ。サア觀音様の御利生で。怪我あやまちのなかつた嬉しさ。是から。直にお禮参り。ホンニ是はさもしい物なれど。御病人への見舞のしるし。麓末ながらと詞數。云ず出過ぬ杉折を。供の男が差置は。詞「マア」。冥加も無いお見舞。頂だきますると取上る手元はづれて取落せば。中よりぐはらりと以前の銀。詞「ナア先刻に渡た此銀を。チ、表向で請取たりや事は濟。改めて尼御へ布施。せめて娘が冥加じやはいのふ。云譯が立からは。久松も元の通。戻つて目出たふ正月仕や。取込の中長居も不遠慮。娘もおじやと手を引て。表へ出ば久作も。門送して。詞「是はマア」。何とお禮を申しませふやら。お辭儀致すも却て無様。せめてものお土産に。折つて置た此早咲。目出度く春を松竹梅

「鷺の片羽のかたぐに」

相思ふ男女の惜しみつゝ、かたぐに別るゝをいふ、染摸様に解せり。片羽は片羽根の鳥、身の自由ならぬをいふ、不具者をかたばといふも、これより出でたり。

「敷入」 はやどさかり。

やどおり、約めて、やどりとはいふ、正月と七月との十六日に、商家の奉公人などの一日暇を得て、家に歸るをいふ、草深き己が郷里に歸るといふ意なりとぞ、別訓を見よ。

「あはれを餘所に水なれ棹」とかけ「船にも積まれぬ云々」とつづけたり。水馴棹は舟棹をいふ、拾遺に「大井川下す筏の水なれ棹見なれぬ人も戀しかりけり」「泣く音伏籠の面伏」 極

と。お家も榮え蓬萊の飴物。幾久松が御奉公。大事に勤て此御

恩。忘れぬ證と差出せば。ナ、心有げな此早咲。たとへて云ば

雨露の。恵を請ぬ室咲は。萎も早し香も薄い。盛の春を待とい

ふ。二人へのよい教訓。殊更内に口さがない者もあれば。何角

に遠慮せねばならぬ。幸わしが乗つて來たアノ竹輿で。コレ久

松。そなたは堤お染は船。別れゝに逝るのが。世上の補ひ心

の遠慮。左様でござりまする共。お志じや乗つていにや。娘は

船へと親々の。詞に否もいひかぬる。駕鷺の片羽のかたぐに。

わかれて二人は乗移れば。詞夫なら久松もふ行やるか。來正月

の敷入を。母も必ず待て居る。詞兄様お健でお染様。モワおさ

らばと詞迄。早改まるおみつ尼。哀を餘所に水馴棹。船にも積

れぬお主の御恩。親の恵の冥加ない。取譯ておみつ殿。斯なり

くだるもさきの世の。定まり事とあきらめて。お年よられた親

めて巧みの句なり、意は泣く音をふせぐ伏籠の中で、面を伏せるといふこと。伏籠にふせぐをかけたなり、籠を伏籠といひたるは鶏になぞらへしなり、且面伏の調になへたり。面伏は面目なきこと、面を伏せる意を含めたり、

「死んで花實は」 の謎面白し「死んで花實が咲くなら江戸の比翼塚にも咲くであろ」一本花は凶事に用ゆ、

「お袋」と母を呼ぶは胎中にある中、袋の如きゆゑなりと、又ほところの轉なりと、後にいふべし、

「縁を引綱の一筋に云々」よく書きたり、思ひ合つたる比翼の中を、寢屋川の引船と雲井を墓ふ籠の内とに引分くる、義理の柵情けのくびせはつらき譬、比翼は思ひかはせる男女をいふ、琴貴の段に解せり、結末の文頗る妙、味ふべし、

達の。介抱頼むといひさして。泣く音伏籠の面ぶせ。船の中にも聲上げて。よしないわしゆゑおみつ様の。縁を切したお憎しみ。堪忍して下さんせ。ア、譯もないお染様。浮世放れた尼じや物。そんな心を勿體ない。短氣起してくださんすな。チ、娘が云通り。死で花實は咲ぬ梅。一本花にならぬ様に。めでたい盛を見せてくれ。随分達者で。ハイ、お前も御無事で。お袋様もお娘御も。おさらばさらば。さらばくも遠ざかる。船と堤は隔たれど。縁を引綱一すじに。思ひ合たる戀中も。義理の柵情のかせぐい。かごに比翼を引わくる。心くぞ世也けり。

淨瑠璃通解第壹編別記

鳬の脰短かしといへども云々 莊子駢拇篇「鳬脰雖短、續之則憂、鶴脰雖長、斷之則悲、故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也、噫仁義其非人情乎、彼仁其多憂也、」

虎の威を借る狐 戰國策、荆宣王問群臣曰、吾聞北方之畏昭奚恤也、果誠何如、群臣無對、江乙對曰、虎求百獸而食之、得狐、狐曰、子無敢食也、天帝使我長百獸、今子食我、是逆天帝命也、子以我言不信、吾爲子先行、子隨我後、觀百獸之見我而不敢不走乎、虎以爲然、故遂與之行、獸見之皆走、虎不知獸畏己而走也、以爲狐、今王之地方五千里、帶甲百萬、而專屬之昭奚恤、故北方之畏奚恤也、其實畏王之甲兵也、猶百獸之畏虎也、」

伽羅 嬉遊笑覽、伽羅は奇南香なり、伽なん南とも奇きらん藍とも伽藍ともいふは、一語の轉訛なるべし、伽羅は黒の梵語なり、陀羅尼經云、伽羅樹、華嚴經云、黒沈香と見ゆ、同じ木ながら、蟻の集りて香を結びたるにて、其性沈香と相反き、沈木は降し、伽羅は升すといふ、漢土にて沈香は嶺南の産を上品とし、蠻國のを下品とす、伽藍は嶺南を下とし、蠻國を上品とす、本邦には嶺南の伽藍は渡らず、交趾暹羅などより來るよしなりと見ゆ、香合には、新古の舶來を分つを大事とすといへり、

琴 我國にて通常琴と稱するは箏の事なり支那より渡來の樂器にして一名筑紫琴と稱す。宇多天皇の御宇、筑紫の石川色子の傳へたるよりの名なりといへり。糸竹初心集に「中頃九州に玄淨法水とて二人の僧あり。或時長崎に至り、琴の彈やうを唐人より傳はり。其後都に上り、公家殿上の交りをなし、寛永二年の頃、琴の御ゆるしを給はりて、法水は關東に下り、琴をひろむ。玄淨は筑紫に歸へりて、これも琴を専らに修行す。今在家に彈ける樂を筑紫樂といへり云々」と見ゆ。八橋檢校は、此玄淨に隨身して肥前に至り、琴の奥儀を學びて都にかへり、唱歌曲調を改良せしより、大に世に行はるゝといふ。

三味線、胡弓 三味線には諸説あり。其渡來を永祿といひ、文祿といひ、糸を二絃といひ、三絃といひ、彈初めしを中小路といひ、石村檢校といへど、普く世に行はるゝは、糸竹大全「三味線の起りは、永祿年中琉球よりこれを渡す。其時は蛇皮にて張りて、二絃なるものなり。泉州堺の琵琶法師、中小路といへる盲人に人の取らせけるを、此盲人嬉びてしらべつゝ、心見けれど、教へおかざれば音律かなはず。これを心憂く覺えて、長谷の觀音へ一七日參籠し、彈やうを祈りしに、あらたなる靈夢有つて、階を下る時に大中小の糸三筋、盲が足にかゝる。是より三筋の糸をかけて、彈くに無盡の音色いでたり。夫より三絃にきはむるゆゑに、三絃といふ云々」の說なり。按ずるに、其はじめまづか審ならざるが信にし

て。つまびらかに記するは却つて疑はし。永祿以前に渡來せしならんも。亂世なればさのみ玩ぶ人もなかりしに。中小路石村などいふ盲人。心を専らにしてこれを彈じ。遂に其妙に達せしかば。彈はじめし人といふに至れるならん。隨つて其形も改めしなるべし。後にも屢變遷ありて。今の形は古近江といへる三味線師の作れるものなりといふ。一説に葡萄牙の樂器ラベカ（訛りてラベイカと稱す。今のバイオリンと同物なりと）といふもの。永祿年中に琉球より我國に渡來せしが。三絃にして弓形のものに。馬尾を釣りて鼓せしゆゑ。胡弓（こきう）と稱せり。此樂器次第にひろまりしが。當時の盲人琵琶に堪能なれば。慣れたる撥にて彈はじめ。遂に三味線のもとゝなれりといふ。

けうがる 稀有（けう）又興（きやう）の活用ともけしかるの轉語ともいひて詳ならず。意は場合によりて異なり。わやしき時は稀有の意。おかしき時は興の意。又騒ぎ立つるやうの意に用ふる事あり。注意すべし。

岩越す 琴柱の糸をうくる所。十訓抄上。東門院の御方に琴彈く人の今まゐりしたり。院紫式部に。此女房に琴彈くよし。離れぬ名つけよと仰事ありけるに。岩越すとつけたりければ。殊にほめさせ給ひけり。琴柱の先に緒のわたる所は。いはこすと申すによりて思ひよられけり。かの名をば知れる人。いとまれなりと見ゆ。柱（ことう）を岩。糸を水に見立て、

付けし名所などころなるべし。

枯野の船 應神天皇五年に伊豆國に命じて長十丈の船を造らしめ枯野と名け給ひしに三十一年朽ちて用に堪えざるゆゑ其材にて鹽を焼かしめ給ふ材堅くして燼えざる處ありしかば採りて天皇に奉りしに琴を造らしめ給へり其音さはやかにして遠く聽えければ天皇枯野からのを鹽にやきしが餘り琴につくりかき弾くや由良ゆらの門との門中となかの海石いづしに觸れたつなづの木さや〜と詠みてほめ給へる事日本記に見えたり古事記には仁徳の御宇とし兎寸河西方とさにありし高木を以て作れる由を載すかく琴に縁深き船を巧みに用ひたる手際感服の外なしさがしき人の説に琴は枯野といへる船の底に絃を張りて彈きたるがもとにて形の船底に似たるは其證なりと笑ふべき事ながらよくも附會せるものかな。

名古屋帶 嬉遊笑覽名古屋帶といふはまづさなだの袋打なり産業袋に名古屋帶女帶は總づけ巾四寸位男帶は二寸五分位尤も糸さなだといふは只一枚に織りたるもの名古屋織は袋打なり」

班女 班婕妤とて有名の美人なり漢の成帝即位の時選まれて後宮に入り小使せうしたりしが俄に寵幸せられて六宮を傾く後趙飛燕の爲めに寵を奪はれ思ひに沈みて怨歌行

を作り、身を秋の扇に比して歎く。文選卷二十七に見えたり。

新裂齊紈素。鮮紫如霜雪。裁成合歡扇。團々似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。

涼飈奪炎熱。弃捐篋笥中。恩情中道絕。

比翼連理 比翼は鳥の名。雌雄各一翼を有し、車の兩輪の如く相俟て用を爲す。故に須臾

も離るゝ事なく。相比して飛ぶといへり。爾雅に「南方有比翼鳥焉。不比不成。其名謂之鵲

々。注似鳬青赤色。一目一翼。相得乃飛。」と見ゆ。連理は木の名。幹を異にしたる二枝相接着

して離れざるをいふ。樹一枝相向。連接脉理而生。爲連理枝。と見ゆ。いづれも男女の契り

のこまやかなるにたふ。白居易が長恨歌に「七月七日長生殿。夜半無人私語時。在天願

作比翼鳥。在地願爲連理枝。」

濱松の音はさゝんざ 本朝廿四孝にも「さゝんざ諷ふ悦だは」と見え。天和以前流行の小

歌にて「飲めや諷へやさゝんざ」濱松の音はさゝんざなど。目出たき等にうたひしもの

と見えたり。竹齋物語に「またさゝんざなど諷ふ所もあり」一代男の越後寺泊りの條に

「此頃上方よりさゝんざと申す小歌が。はやり來り。こゝもとの若い衆。いろ／＼稽古は

いたせども。聲がそろはぬと申しはべる云々」又狂言にも「濱松の音はさゝんざ」といふ

謠あり

佐分利流 武藝小傳に「佐分利猪之助平重隆、富田牛生に従つて槍術を學び、富田流の妙旨を悟つて更に工夫を加へ、潛に佐分利流と稱す。慶長五年、石田治部少輔三成謀叛の時、富田信濃守信高志を關東に通じ、勢州津の城に籠る。凶徒來つて攻むること急なり。重隆城中に在り、槍を以て震撃して大に勇名を顯す。後池田三左衛門尉輝政に仕へて鳴る。從ひ遊ぶもの頗る多く、佐分利源五左衛門重賢、佐分利佐内重可、各其宗を得たり。佐分利平藏重種、重賢の傳を繼ぎ、其末流諸州に在り」

富士見酒 酒の名所なる、攝州池田伊丹等にて、酒樽を船に載せ、海へ漕出し、富士山の見ゆる處迄行きて戻し、これを富士見酒と稱してひさげりといふ。沼津などにて賣る富士見白酒も、これより出でしなるべし。酒樽を海へ漕出す事は、攝州より江戸に送る酒は、海上にて搖るゝゆゑ、熟れて味よしなど聞けるが、これ等の事より始まれるにはあらざるか。おのれ下戸なればよくは知らず。

瀬川 江戸吉原松葉屋の妓にして、殊に名高き者二人あり。一は奈良の人大森右膳の女にして、本名をたかといふ。十餘歳の時源八なるものこれに戀慕し、右膳の僕によりて艶書を送る。たか肯せず却りて之れを辱しむ。源八悲りて鹿を殺し、右膳の門前に棄てゝ去る。奈良の法鹿を殺す罰は、人を殺すより重し。右膳疑を受け獄に繋かれしが、罪決

せずして追放せられ。京都に行き後大阪に移りて死す。鯛屋貞柳其遺族の窮困を憐み、
 たかを媒介して。城代内藤式信の家士。小野久之進に嫁せしむ。久之進主に従ひて江戸
 に行き。命により金を懷にして大阪に來り。途中駿河の江尻にて。賤の爲めに殺されし
 ゆゑ。式信怒りて其族を逐ふ。たか母子身を江戸富澤町の商戸金七の許に寄せしが。頼
 焼に遇ひ金戸町なる金七の弟。君太夫の家に憑る。たか貧困を悲み。遂に吉原松葉屋の
 娼妓となり。名を瀬川と改む。容姿美にして技藝に通せしかば。廓中唯一の花魁と稱せ
 らる。偶客あり。金と印形とを廓主に託す。瀬川傍にありて見れば亡夫の印なり。又間を
 窺ひ佩刀を撿ふれば。亡夫の料なり。よりて仇なる事分明し。且源八なる事を知る。これ
 を樓主に告げ。其室に入りて刺殺す。間もなく廓を出で。幡隨院に入りて剃髮し自貞と
 稱す。後淺草に一小菴を營み。再法と改む。一は下總國小見川村農夫の女にして。容貌美
 麗。動止閑雅。氣節頗る高し。書は廣澤烏石。徵明の風を學び。畫は池大雅を師とし。俳諧に
 達し。筮易を能し。諸藝通ぜざるもの無かりしといふ。時に常磐津文字太夫。始めて豊後
 節を唱ひし者。安永十一年没す。年七十三なるものあり。自ら容姿を自負す。瀬川の才色
 を喜び。幫間正三に金を啗ましめ。一夕の歡樂を求む。娼家の例。藝人を客とするを許さ
 ず。瀬川正三の百方勸むるによりて之を諾す。其日太夫修飾して來る。瀬川盛裝して出

づれば、艷色目を奪ふ。瀬川太夫に豊後節を望む。太夫喜び、妙を盡して唱ふ。瀬川白金十枚を包み出して曰く、聊唱歌の勞に報ずと、一楫して去る。太夫呆然して氣を奪はる。後豪商江戸屋宗助に身受けされ、二十八にして死す。俳諧の名吟、今なほ世に傳ふ、有名な娼妓なれば、取りて作れるなるべし。

相良 人吉の事なり。肥後國球摩郡の中央にありて、球摩川に沿ひ、人口七千許。本縣南部に於ける第一の都會なり。熊本を去る二十七里餘の山間にあり。相良はもと地名にあらず。建久年中、相良氏人吉莊の地頭職を賜りしより、以來王政維新に至る迄、七百餘年間、此地を領せしゆゑ、其氏を以て呼ぶに至れるなるべし。同國の人に聞くに、人吉にては河合又五郎落ち來たる筈なりし由、いひ傳へ居れりと。西南の役、賊軍一時本營を置きし處なり、なほ總解參照。

法藏寺 三河國額田郡本宿村にあり。岡崎の東南三里。街道に沿ひ、有名の古刹なり。大寶元年、行基菩薩の開基にして、本尊は聖觀世音。寺傳に、文武天皇の皇后、御産に當りて艱み給ひし時、行基に勅して、遙に當寺の觀音を祈願せしめて、皇子御降誕あり。よつて勅使を下し、勅願所となして、號を出生寺と賜ふといふもと、法相宗なりしが、至徳中、教翁上人中興して、淨土宗の檀林となす。舊幕の頃、寺祿八十三石あり。徳川家康公幼時、此寺

に寓して讀み書きを學ばれしとて。今寺門の左側にある一老松を。草紙掛の松といひ。又徳川竹千代と。幼名を自刻せられしといふ机あり。其他寶物多し。中に天國の劔といへるは。長二尺ばかりにて。昔拔けば血出づをなどをそれし者なるが。頗る錆びたり。枕屏風といへるは。戰國時代諸將の花押をあつめしものにて。もと一雙ありしが。今は其一をとゞむるのみ。地名辞書に「運開錄には。駿河知源院にて。物讀み手習ひ遊ばしける時の硯机を。後には法藏寺に移したりと見えたり。長澤松平譜。備中守親則より五代。上野介親廣の長子。此寺に入り教翁洞惠といひ。神君讀書の師なりといふ。凡三州は御當家發祥の地。寺社由緒數多ありといへども。大樹寺大林寺法藏寺は。同派の三檀林にて。尤も深縁の靈場など聞えける」

柔術 武藝小傳に「拳法秘書曰。今世に所謂柔術是なり。武備志にこれを拳といふ。古へこれを手搏といふ。日本に始る事は。近世陳元贊といふもの。我國に來り居て江戸淺府あさふの國正寺に寓す。又浪人に福野七郎右衛門磯目次郎左衛門三浦興次右衛門といふ者。同じく彼寺に寓居して。衆寮にありしが。元贊語るに。大明に人を捕ふる術あり。我其術を知らずといへども。能く其技を見つるといふ。右三人の士其術を聞き。自ら其技を工夫して。後能く其事に熟せり。凡柔やうじゆの起りは。右三人より傳はりて。諸方に眞似し。此術の理

は柔にして敵とあらず。しばく勝ん事を求めず。虚静を要とし物をとがめず。物にふれ動かず。事あれば沈んで浮かず。沈を感じるといふ。凡調息を要とすと見ゆ。神代に起りしなどいへるは。其事を神秘にせん爲めにていふに足らず。昔より幾分の術はありしならんも。一般に行はるゝに至りしは。これが本なるべし。關口八郎左右衛門氏心子氏業孫氏連等其妙に至る。氏心氏業は紀州侯頼宣に仕へ。氏連は將軍吉宗に仕ふ。劔術 武藝小傳に。それ刀術は。武甕槌^{たみかづ}命經津主^{ふつな}。十握の劔を地に植ゑ。其鋒端に踞り給ふ。神術に始り。景行帝の皇子日本武尊。其神術を傳へて三段の位と爲し給ひ。陸奥守源義家之を學びて。五段の位となす。鎮西八郎爲朝。刀術を肥後の人尾伊手次郎太夫則高に習ひて。其技則高に超ゆ。伊豫守義經。刀術を鞍馬の僧に習ひて。名譽を顯す。常陸鹿島の神人。其長たるもの七人。刀術を以て業となす。今に至りて關東七流と號する者これなり。中興飯篠天真正傳の術を得て。大に刀槍の術を興起す。と見ゆ。

神代の事は知るべからず。中興の祖は飯篠山城守なるべし。されど何流など稱して道場を開き。劔道の指南をなし。武士一般これを習ひ。武者修行などに出づる事の盛になりしは。柳生但馬守宗嚴が信長に召され。後幕府の劔法師範役となりし頃よりなるべし。九州の人愛州惟孝。陰流を創む。上州の人上泉伊勢守之を習ひ。工夫を加へて神陰流

を開く。柳生宗巖これを受けて、新陰流と號す。宗巖は和州柳生の人にして、父を因幡守重永といふ。少年より刀槍の術を好む。上泉伊勢守柳生に來り、門弟神後伊豆守正田文五郎等從ふ。宗巖上泉に見え、其術を學ばんと請ふ。上泉之を諾して、其技を教へ、疋田を留めて去り、他邦を遊歴して再び柳生に來り、宗巖の技の妙を賞して、新陰流と謂つ可しと、悉く其奧秘を授く。宗巖後織田信長に仕へ、列侯諸士從ひて、其藝に遊ぶもの頗る多し。老て薙髮し、柳生に閑居せしが、關が原戰後家康の命により、刀術の事を言上し、其褒賞を蒙り、名世一世に高し。慶長十八年歿す。年八十。劔道の流義は師より受けては一派を開き、其數一百にも及ぶべし。しかして其階級を、名人、免許、目録、初段、切紙の五つに分ちしが、明治に至り七級に區別すといふ。

いんのこ 貞丈雜記に「小兒を抱きて夜中他行するに、紅指^{ベニサシユビ}を以て小兒の額に犬といふ字を書く。これをいんのこといふ。犬の子といふ事なり。此の如くすれば魔除^{まじり}になり。狐狸類小兒をおびやかす事なしといふ。神道類聚各目抄に云く、山州祇園社^{あまのり}緒^おを以て、小兒の額に犬の字を印す。これをいんのこといふ。祇園社の守なり。一社の秘訣の義あり。小兒の額に犬の字を書くこと、古代より有りし事なり。年山打聞に云く、大府記時房公日記、康和五年八月廿七日に云く、東宮遷高松第、戊尅御出、宗通卿御額に奉書犬字云々」

と見ゆ。これがもとにて、夜小兒を寢さする唄となりしなるべし

悴 燕石雜誌に「悴は憔悴と熟して、憂哀の義なり。屈原が漁父辭に、顔色憔悴形容枯槁とあるを、古點にガンシヨクヤセ、ケイヨウカレタリと訓ましたり。後に混じて憔悴の二字を「ヤセガレ」と讀むによりて憔悴の訓を「ヤナリ」と思ひ誤まりて悴を「セガレ」と訓まするが、其實は悴なり。今悴に作るは誤れり。正字通に「遊悴は子之未仕者也」とあれば、其義近し。今の俗部屋住と唱ふるものは、所謂遊悴なり」と見え、奈留別志にも悴を「セガレ」とよむは、周禮の國悴の字なるべし」と記す。

兵法 武藝小傳に曰く「兵法は鹿嶋香取の神兵、神武天皇順ばさるを平げ、日本武尊東夷を征し、神功皇后三韓を撃ち給ふに起る。持統天皇陣法博士をして、諸州に教習せしめ給ふ。大江匡房、吉備大臣、諸葛亮の八陣、孫子の九地、及結營向背を吾朝に傳ふ。吉備は兵法を傳へし人、匡房は精しき人なり。中興武田家の軍律、諸家其右に出づる者なし。小幡景憲大に之を興起し、幕下より諸家に至るまで、皆其兵法を用ひざる無し。然らば景憲兵法の大祖か。

兵術文稿に曰く「吾邦の兵術傳來する所の祖、大江維時、大江匡房、法眼鬼一、山本鬼道、以て武田宗師に至り、其法大に行はる。其臣高坂昌信、之が書を爲り、以て後世に遺し、小幡

景憲之が傳を爲り。以て教を立つ。是武田兵法の世に行はるゝ所以なり。蓋其法良といへども。然れども昌信書を爲らずんば。則ち世に傳らず。其書存すといへども。然れども景憲傳を爲らずんば。則ち行ふ可からず。是を以て二子の幼を最も雄偉と爲す云々。

貝原氏曰く「甲州法兵學の起は。小幡勘兵衛甲州の士小幡山城が子の又兵衛（後豐後が子なり。豐後は天正三年武田勝頼滅亡の時病死す。勘兵衛は其時九歳四歳か）なりしを家康公之を尋出し。勇士の末なりとて。井伊兵部と共に。秀忠公の御遊伴に定めらる十六歳の時武者修行の志有つて。玄關にて髪を切つて駈落す。家康公之をわはれみ給ひ尋ねさせ給へども。其居所を知らず。勘兵衛は所々遊歴し。慶長五年關が原陣の時。井伊兵部に隨つて功あり。其まゝ佐和山に浪人して居住す。慶長十九年大阪冬陣に。僞つて籠城し。夏陣の時城を出で。秀忠公に召出されて。御使者となる。高坂彈正が書を集めて甲州の士數人。井伊兵部に從つて佐和山にありしに。信玄の事を尋聞き。甲州流の兵術を建立して。人の師となる。高坂彈正が作りし書は。甲陽軍鑑十九冊。同末書上中下。結要本龍虎豹の三品。これなり。景憲は寛文三年二月廿五日歿。年九十二。甲陽軍鑑を高坂が書しといふは。僞（いつはり）なるよし。諸先輩の論あり。されど兵家必須の書なりといふ。

河口 大阪西區安治河の河口をいふ。名所圖會に。河海の喉口にして兩所あり。一は安治

川といふ大川筋。土佐堀蜷川等の下流なり。一は木津川といふ。長堀道頓堀及び西の方諸流こゝに歸會す。諸國の廻船こゝにつどひて碇石を卸し。之より行李船三板船を以て。五穀雜貨を問屋へ運送す。千石二千石の大船。水上に町小路を作りたる如く。掘竿は北斗を指し上下は欄絞をもつて自在にし。錨首には船の名家々の紋つけて其國々をしらせ。風威の順不順潮時の満干を考へ。出帆あり着船あり。兩河口共に官家の監船所ありて。海船の出入を改めらる。抑初春の乗初より晩船の甲乙あるは新艘の船おろしの祝ひまでも。皆兩河口の賑ひなり。其連船の中を。尖頭船漕ぎつれ漕ぎつれ。酒肴麵類野菜の物まで賣ありく。其聲喧し。又其船に遊女土妓を乗せて。三絃をかしく弾かせ。何やら聲をあげ喚くあり。これを土俗伽遣船といふ。昔の川末の江口なり。難波津大湊となれるは。此河口に泊船の連なるにて知らるべしと見ゆ。されど重に安治河口のみを稱す。

兵庫 名所圖會に「福原莊海陸都會の地なり。町數四十四名。西海道の驛にして。大阪入船の要津なり。官通に岡方北濱南濱等の名あり。一名武庫の水門。武庫の泊或は輪田の泊ともいふ。諸國の商船こゝに泊りて。風波の平難を窺ひ。諸品を交易す。町小路の賑ひ。晝夜のわいだめなく。繁花の地なり。出帆の時は東南の風宜しからず。涯南百歩許にて海

底に洲あり、長き事菟原郡深江の浦に連る。毎年三月沙干の時は、必ず見ゆるなり。天長八年三月、大輪田の泊を造つて、使の遷替を定むは即こゝなり。又承和三年、入唐使の船を此澳おきに泊るなど、古記に見えたり。平相國の時より築嶋成就して、今の如く水門となれり。昔の兵庫の津は、これより西北の山手にして、凡て其地まで海濱なり。町小路もなくして、多くは漁村楫取の家のみなり。諸船入津の賣買は、天正以後の事なりと見ゆ。

紫霜石 砒霜石なるべし。書かへたるか。知らずに書きしか。和漢三戈圖會に「本綱に、砒霜石は銅山に近き所にあり、信州より出づるものを佳とするゆゑ、一に信石とも名づく。生砒は砒黄といふ。多く山中にて砂石を夾む者を取り、焼きて白霜となして之を製す。生砒黄は赤色を以て良となし。熟砒霜は白色を以て良となす。之を焼く時、八十餘丈の風上かざかみに立つ。風下かざしもの草木皆枯死す云々と。按ずるに砒霜石は石にあらすして、銅錫等の鑛中に之を含み、就中銅に最も多し。銅鑛を竈に入れて之を鎔かし、覆ふに濡薦ぬれこを以てす。火焰熾なるに至つて、薦亦燃え盡し。其中純赤なるものあり。これ即ち砒霜なり云々と記す。俗にいふ砒石にて、此上なき劇毒藥なり。

盧生の夢 異聞錄に「道者呂翁、經邯鄲道上、舍中有少年盧生、自稱其貧困、言訖思寐。主人方炊黃粱、爲饌。翁乃探懷中枕以授生。枕兩端有竅。生夢中自竅入。其身富貴五十年、老病而卒。

欠伸而悟。顧翁在傍。主人炊黃梁而未熟。

岩田帶 結肌帶を略して。ゆはだ帶といひたるを。いはた帶と轉訛せしかば岩田の字を當てゝ。腹の子の堅固を祝する帶などゝいひ出でたるなるべし。懷妊後五月目にする腹帶にして。貞丈雜記に「懷妊の婦。人着帶の祝の時は。其婦人の夫帶を取りて結ぶ事。古例なり」と見ゆ。本式は生絹八尺にして。四つに疊むといへど。略式は絹又木綿六尺を用ゆといふ。

白骨のお文 「夫人間の浮生なる相をつらく観するに。おほよそはかなきものは此世の始中終。まぼろしの如くなる一期なり。されば未だ万歳の人身をうけたりといふ事を聞かず。一生すぎやすし。今にいたりて誰か百年の形體を保つべきや。我やさき人やさき。今日とも知らず明日とも知らず。おくれさきだつ人はもとのしづく。末の露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて。夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風來りぬれば。すなはち二つの眼忽ちに閉ぢ。一つの息ながく絶えぬれば。紅顔むなしく變じて。桃李のよそほひを失ひぬる時は。六親眷屬あつまりて。歎きかなしめども。更に其甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて。野外に送りて。夜半の煙となしはてぬれば。たゞ白骨のみぞ残れり。あはれといふもなか／＼おろかなり。され

ば人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、誰の人もはやく後生の一大事に心をかけて阿彌陀佛をふかくたのみまゐらせて念佛まうすべきものなり。あなかしこくこれ蓮如上人が作られたる五帖八十通のお文中、大阪と對して二大名文なり野崎觀音 河内國北河内郡もと讚良郡野崎村(今四條といふ)にあり。福聚山慈眼寺と號して曹洞宗なり。本尊は十一面觀音唐作にして長三尺五寸三十三ヶ所觀音の像、及江口君の像と共に本堂に安置す。名所圖會に「寺説にいふ、夫當山は南天笠波羅奈國、大悲の聖蹟を摸して、吉利たる事年既に深し。今に至つて寺前の澤を、人呼んで波羅奈澤といふ。惜かな中古以來傳記喪びて、只郷童の口碑を證とす。故に開闢の年代事實ならず。大悲尊像も何人の刻めるか。寺宇の權輿も分明ならず。抑一條院の御宇に、攝州難波江の渡口に住して、ゆきゝの旅客を饗す美女あり。世にこれを江口の君といふ。ある時沈痾に罹りて、醫療の驗さらになし。常に聞けるは、和州初瀬寺の觀世音靈應殊に勝れさせ給ふ。既にかの地に參籠して、懇に禱り一七日滿願の時、靈夢を感ず。端嚴たる高僧來りて曰く、河州野崎福聚山は、我山に異ならず。其處の大悲に懇求せば、所願空しからず。妓女夢覺めて歡喜し、直に尋ねて此山に來り、本尊を敬禮七晝夜に滿ちぬれば、忽病惱治愈す。これより傳へ聞きて、四來の緇素遠村近郷こゝに群す。又野崎を去る二里許

にして御供田と名づくるものは當寺の設にあてぬるなり。其後龜山帝の朝に權大僧都實慶當山に寺職して弘長元年に寺記を書けり。又伏見院の御時沙門入蓮こゝに住して衰弊を悲しみ力を優婆塞秦氏に合せて重修せらる。此時に立てる石塔婆今に存す。又其後永祿八年松永久秀志貴城に籠りて延隣動亂の時佛閣兵燹に罹りて灰燼となる。漸く本尊實慶の寺記のみ遣れり。其より今の如く再營あり。春は無縁經とて櫻花匂ふ頃秋は紅葉して山々錦なるふし浪花津の老少こゝに群しあるは川舟に掉さして道行く人と言葉戰ひして詣づる輩多し。是を野崎参りといふと見ゆ。

尉と姥 此事は紀貫之が古今集の序に「高砂住の江の松も相生のやうにおほえ云々」と書けるを本として謠曲に彼の兩所の松の精老たる夫婦と化して筑前阿曾宮の神主友成といへる者と問答したる由を作れるに始り夫婦の偕老を祝ひて目出たき時の謠物となり又嶋臺に其形をつくりつけて婚禮などの席に用ふるに至れるなりといふ。無足 領地給物なき者をいふなり。又鎗を立つる事ならぬ者をいふとぞ。無にするを無足にするといふは無足の如くせんなき者にするといふ意ならん。

數入 燕石雜誌に「毎年正月十六日市井の老少或は神佛に參詣し。或は郊外に遊山し。奴婢はこの日主人に許されておのが親里へ歸展するを數入といふ。今俗にこれを宿下

りといへり。只正月十六日のみならず。春秋二期に此事あり。五雜俎に。齊魯人。多以正月十六日遊寺觀。謂之走百病。といへるに相似たり。按ずるに走百病とは遊山して。元氣を養ひ百病を走らす義なるべし。本邦に藪入と唱ふる事。本据詳ならず。只元錄以降俳諧の發句に見えたり云々といひて。赤染衛門が

しげからじ萩のや。ふこそ戀しけれしかばかりだに我れやとはまし

の歌を引きて。やぶは彌生にて竹に限らず。草深き處の稱なる由を述べ。もと野徑に逍遙するを藪入りといひたらんに。奴婢等が親里へ歸るも。朱門より白屋に入るなれば。これをも藪入りといふなるべし。唐山探春踏青の義にも稱へり。縣より草ぶかき田舎へゆくを藪入といはん事疑ふべからず。又越後名寄卷五。舊蹟門魚沼郡に逃入村といふあり。一名を藪入村といふよし見えたり。土俗の説に。小千谷のはとり山中村より一里許を隔て。左大臣藤原時平公の墓あり。大臣の餘流と稱するもの彼村にあり。よりて逃入村と唱へ。一名藪入村といふ由を記せり云々。貴人京都より逃れて村落に入る義をとりて。後世逃入村と唱へ。又藪入村と唱ふる事。其古跡によりて分明なり。しかれば此村も藪入の一證とすべし云々と見ゆ。

淨瑠璃通解第壹編終

明治三十六年八月十九日印刷
明治三十六年八月廿二日發行

淨瑠璃通解第壹編

定價金參拾五錢

著者 山本信吉

發行者 大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博進社工場
東京市小石川區久堅町百〇八番地
合資會社



發兌元 東京日本橋本町博文館

▲博文館發兌戲曲書類目錄▼

謠曲及能狂言

大和田建樹君著

謠曲通解

全一冊 背皮上綴 正價壹圓八拾錢
大判一七八頁 小包送六百文

次

- 第一 總論 起原 猿樂の起原 大成 能の作者 小外 四章
第二 歌謡 高砂 田村 東北 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第三 白樂 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第四 養老 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第五 龍井 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第六 蟻通 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第七 蟻通 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第八 蟻通 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章
第九 蟻通 天 八島 江口 望月 紅葉 萬葉 熊野 外 四章

大和田建樹君著

謠曲文粹

全一冊 紙皮上綴 正價參拾五錢
小判五三〇頁 郵稅六錢

大和田建樹君著

謠曲

と

能

全一冊 洋並綴 正價貳拾五錢
大判二七六頁 郵稅六錢

幸田露伴君校訂

狂言全集

上、中巻既刊 下巻近刊
全三冊 和上綴 正價一冊五拾錢
中判凡千三百頁 郵稅一冊八拾錢

上巻					中巻					下巻				
(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)
鳥帽子折	渡福	末ひろく	かくす	栗田口	伊文	河原	成子	岡太夫	目んぼ	戦近	素襖落	三本柱	老松	餅師
きんし	ひめ	いかり	いかり	いかり	文	新市門	黒殿	黒殿	名座頭	名座頭	入問	文相	祐輔	煮物
きんし	ひめ	いかり	いかり	いかり	武蔵	秀江	鶏立	竹立	金岡	禁野	磁石	文相	祐輔	煮物
きんし	ひめ	いかり	いかり	いかり	武蔵	秀江	鶏立	竹立	金岡	禁野	磁石	文相	祐輔	煮物
きんし	ひめ	いかり	いかり	いかり	武蔵	秀江	鶏立	竹立	金岡	禁野	磁石	文相	祐輔	煮物

（三の卷迄出來四の卷以下續刊）

全六册洋並縵正價一册四拾錢
一册二〇〇頁郵稅六錢

俗曲大全

全一册脊皮上綴正價六拾錢
中判一〇九四頁郵稅拾六錢

—

形類
雜子
と仕
舞

田三
村轉

江口

百萬

猩々

(三)

鄆

○鉢木
○卷絹
○俊寛
○海人

養老
橋

忠榮 松風寺 七馬落 富士太鼓 山姥

賀茂

○巴
○三井寺
○葵上
○鳥帽子折

花月山

實盛
二景
放下
雲蜜
沒望
產月

項羽

○ ○ 刺頭 盛久
○ ○ 住吉 夫詣
○ ○ 柏崎 貞城
○ ○ 綾上 幸久

大國
帶柳

○大原御幸
○蟬丸
○鴉飼

文藝雜著

●日本歌謠類聚

全二册脊皮上綴正價二册拾錢
中判二〇四八頁郵稅二册拾六錢

我國開闢以來二千五百年間の歌謡は載せて本書にあり時代を以て古今を分ち種類に依て雅俗を別にし、一讀人なりして其沿革を詳にせしむ。大和川先生が之を輯むるに幾星霜の勞苦を費されしかば、讀ふ一本を綴て實驗あらんことな

俗曲大全

全一册脊皮上綴正價六拾錢
中判一〇九四頁郵稅拾六錢

小唄 まくろ音 流行唄の部 情歌の部 大道一の座

曲自在 全一冊洋並綴正價貳拾五錢

彩色木板寫真詞反垂入

曲獨稽古
大判二四八頁
郵稅六錢

全一冊 氏友二段 三頁 參合五

金

都々兔の采

王
丁
〇
雲
全一冊
紙
支
上
綴
正
價
貳
合
邊

[illegible]

身小判 二五二頁 郵税四錢

新刊
附
の
玉
小判
二七四頁
郵正税作四
金

全一冊
紙皮上綴
正裝
價貳
拾

正
欣
○
正
全一册紙皮上綴正買貳合

小判 二九六頁 郵稅四
 錢

淨瑠璃集

水谷不倒君校訂

義太夫百番

全一冊洋布上綴 正價壹拾貳錢
小判 六七六頁 郵稅拾貳錢

嬰庭箕村君校訂

近松時代淨瑠璃

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇〇八頁 郵稅拾六錢

目次

- 唐船陣八國性爺武合戰國性爺合戰國性爺合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰
- 賀古教七冠爺大磯虎稚物語常源田兵衛後日所合戰

博文館編輯局校訂

近松世話淨瑠璃

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇四四頁 郵稅拾六錢

目次

- 曾根崎心中 山崎與壽の門松 藤摩草歌
- 生玉心中 櫓の櫓三重帷子 心中 萬年草
- 博女郎波枕 清心 又及に水の朔日 おふさ重井筒
- 紙屋治兵衛天の網島 清心 又及に水の朔日 おふさ重井筒
- 淀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡
- 堀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡
- 堀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡
- 堀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡
- 堀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡
- 堀川波の鼓 梅川冥途の飛脚 夕霧 阿波鳴渡

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇九〇頁 郵稅拾六錢

目次

- 百源氏 鳥帽會 腹子 切折我
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸
- 明天皇 職草人 景紙繼丸

水谷不倒君校訂

近松二半淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇九〇頁 郵稅拾六錢

目次

- 山城國畜生塚
- 關者待新田系圖
- 三大名 傾城敵討
- 道代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡
- 時代織室町錦繡

水谷不倒君校訂

並木宗元淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇四四頁 郵稅拾六錢

目次

- 道成寺 現在蛇鱗
- 七條河原 金洲雙級巴
- 北條連 賴兒記
- 安倍宗任 松浦見
- 軍後法三 富年士
- 軍後法三 富年士
- 軍後法三 富年士
- 軍後法三 富年士
- 軍後法三 富年士
- 軍後法三 富年士

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾錢
中判一〇二〇頁 郵稅拾六錢

次 目

小傾	東山	神功	鎌倉	傾城	頼朝	八光	末廣
野城	殿無	室三	倉院	山新	國跡	生目	十
町小	都間	年合	三朝	代部	性目	お	二
			談責	記罪	筆論	七石	段

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
難玄	心鎖	義甲	曾本	三忠	百	人	
波皇	中經	限我	朝井	青	一		
橋帝	郎新	經姿	五寺	青			
蓬達	唐高	今富	翠開	低			
心萊	腹土	樣					
中鶴	帶船	館粧	士殿	帳刀	首		

水谷不倒君校訂

竹田雲出 淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

次 目

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

水谷不倒君校訂

文耕堂 淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

水谷不倒君校訂

江戸者作 淨瑠璃集

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

次 目

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
河井	正宗	由來	志賀	敵討			
矢口	後日	荒御	靈新	田神			
吉野	賀道	人者	源氏	鑑場			
理和	尚勸	化帳	化競	丑滿	鐘		
化地	藏尋	綠記	化競	丑滿	鐘		
博文	館編	局校					

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
河井	正宗	由來	志賀	敵討			
矢口	後日	荒御	靈新	田神			
吉野	賀道	人者	源氏	鑑場			
理和	尚勸	化帳	化競	丑滿	鐘		
化地	藏尋	綠記	化競	丑滿	鐘		
博文	館編	局校					

次 目

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

次 目

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

全一冊脊皮上綴 正價六拾 錢錢

●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●	●●●●●●●●●●
小町	炭燒	深草	土器	師七	小町		
白髮	實盛	加賀	國條	原合	戰		
江戶	文七	紺屋	男作	五雁	金		
大阪	文七	紺屋	男作	五雁	金		
網目	大塔	宮	鐵				
大内	裏大	友真	鳥				
南朝	正平	四年	北朝	貞和	五年	太平	記藥
水	谷	不	倒	君	校	訂	

●**巢林子撰註**●

全一冊洋並綴 正價八拾 錢錢

右の外 ●**大坂五行義夫太本** 各種取揃
 有之候間多少に不拘御注文の程奉願候也

發兌元 東京本町 **博文館**

淨瑠璃通解



次編概目



第三參編

- 桂川連理柵……………(帶屋の段)
- 源平布引の瀧……………(綿操馬の段)
- 源平布引の瀧……………(松波琵琶の段)
- 蝶花形名歌島臺……………(小坂部館の段)
- 本朝二十四孝……………(百度參の段)
- 本朝二十四孝……………(桔梗ヶ原の段)
- 本朝二十四孝……………(景勝下駄の段)
- 本朝二十四孝……………(勘助住家の段)
- 本朝二十四孝……………(十種香の段)
- 關取千兩幟……………(猪名川内の段)

九月出版

第二貳編

- 菅原傳授手習鑑……………(傳授の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(八聲の雞の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(道明寺の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(車曳の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(佐太村の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(飛梅の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(寺子屋の段)
- 菅原傳授手習鑑……………(松王屋敷の段)
- 近頃河原の達引……………(堀川の段)
- 傾城戀飛脚……………(新口村の段)

八月出版

一冊正價金參拾五錢郵稅六錢

●六冊貳圓●二十冊參圓八錢○外要郵稅

